4号住居跡（第6図）

調査区の最も北側に位置する。西側に張り出し部をもつ楕円形のプランを呈し、張り出し部を含めた規模は長軸5.5m 、短軸4.9m である。埋土は大きく3層に分れ、主に黒褐色土、黄褐色土、茶褐色が堆積している。壁の遺存は北、西側はゆるやかに立ちあがるが、東、南側はほぼ垂直である。床面までの深さは12～16m である。壁直下には西側をのぞき、周溝が廻るが部分的に切れている。きわめて浅く遺存は悪い。ピットは、壁沿いに円形状に多数検出されたが主柱穴と思われるのは堀り込みのしっかりした深さ23cm以上のものである。炉は東南部に作られた土器埋設炉で、周辺は赤く焼け、堅くしまっている。床は比較的堅く良好である。張り出しの部分の床はわずかではあるが高くなる。

出土遺物

土器（第11図5、17図21～23）

21～23は埋土出土の土器片である。21・22は口縁部破片で22は撚糸文である。5は炉埋設土器である。底部、口縁部は欠損しているが、胴部がゆるくふくらむ深鉢である。地文の縄文はＬＲの縦位回転である。二次加熱を著しく受けて赤く、全体にもろくなっている。

石器（第18図4・5）

埋土から石匙2点が出土した。4は縦型で片面加工でツマミ部、刃部をつくっている。5は横型で、自然面を残した扁平な剝片に片面加工によりツマミ部、刃部をつくり出している。4・5ともに頁岩である。

5号住居跡（第7図）

調査区と南側でゆるく傾斜するところに位置し、8号住居跡のすぐ東側に位置している。プランは、東側がやや不定であるが2.7～3.0m のほぼ円形を呈する。埋土は、黒褐色土、褐色土が堆積している。壁の高さは10cmで床から垂直に立ちあがり良好である。ピットは堀り込みのしっかりした深いものが3個あり柱穴と思われる。炉は住居跡中央部かからわずかに東側に位置する土器埋設炉である。東側に礫が2個置かれている。炉周辺は赤く焼け、固くしまっている。床面は比較的堅くしまって良好である。

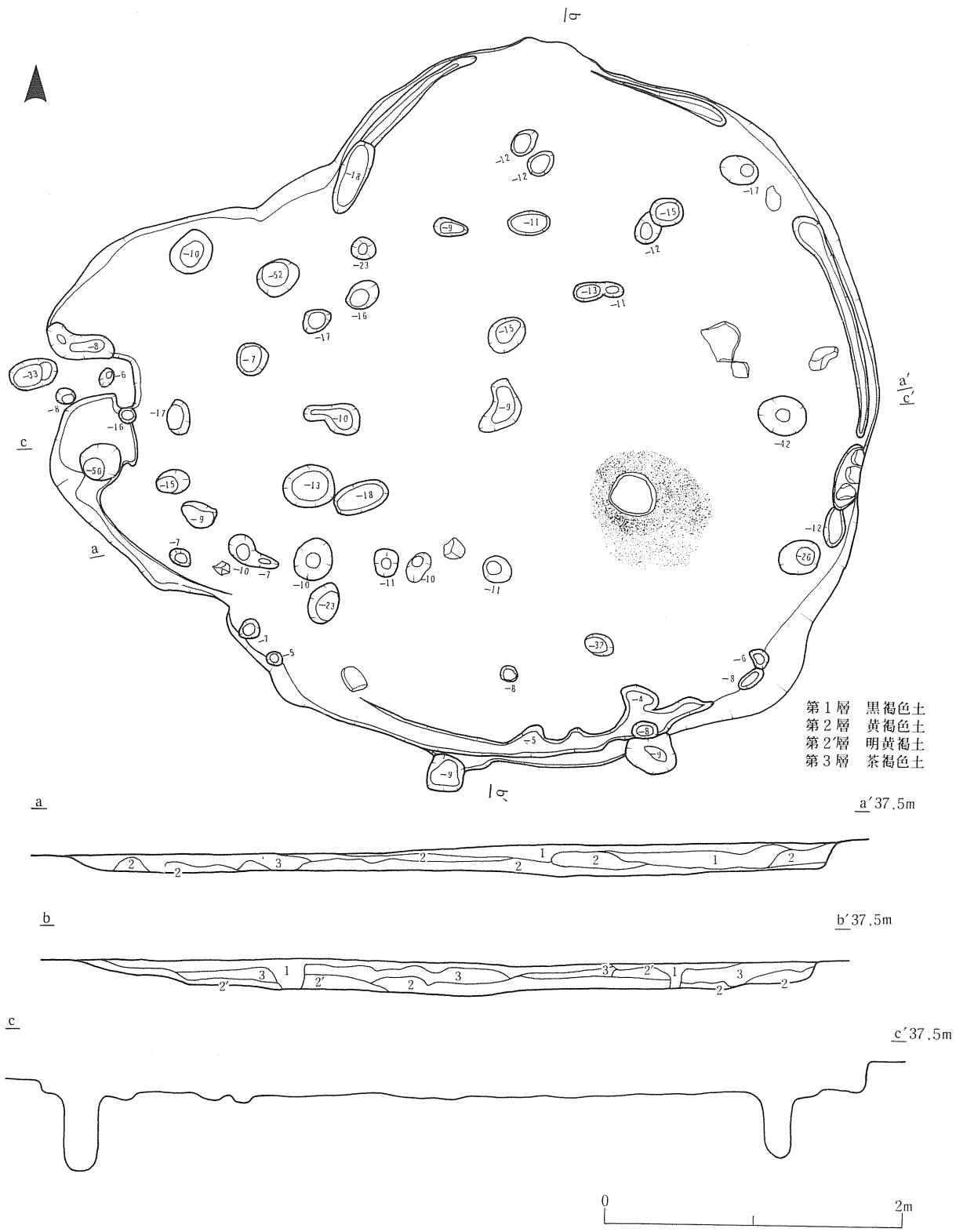
出土遺物

土器（第11図6、17図24・25）

24、25は沈線を磨り消し縄文で文様を構成する。6は炉埋設土器で底部、口縁部が欠損する深鉢形土器で、地文の縄文はＬＲの縦位回転である。全体に二次加熱を受けてもろく、なっている。

6号住居跡（第8図）

調査区の中央部東側に位置する。住居跡の上面はほとんど攪乱されており壁の遺存はきわめて不良である。また南西コーナー部は風倒木により壊わされている。プランは、北東部が若干張り出す隅丸方形を呈し、長軸4.3m である。壁はわずかに遺存する部分で高さ5cm程である。周溝は認めら



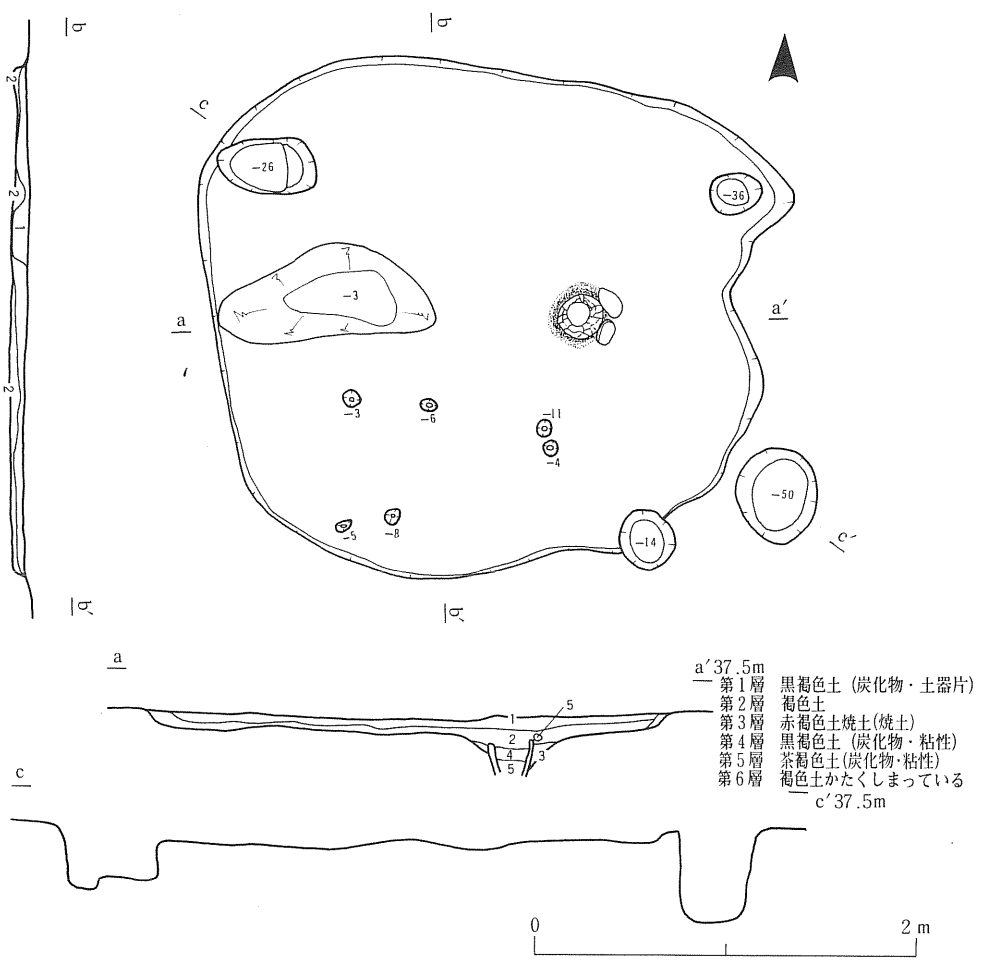
第6図　4号住居跡

れない。ピットは壁沿いに検出され、コーナー部にある堀り込みのしっかりしたものが柱穴と思われる。炉は中央北寄りに作られた土器埋設炉である。床面は撹乱を受けたためか不良である。

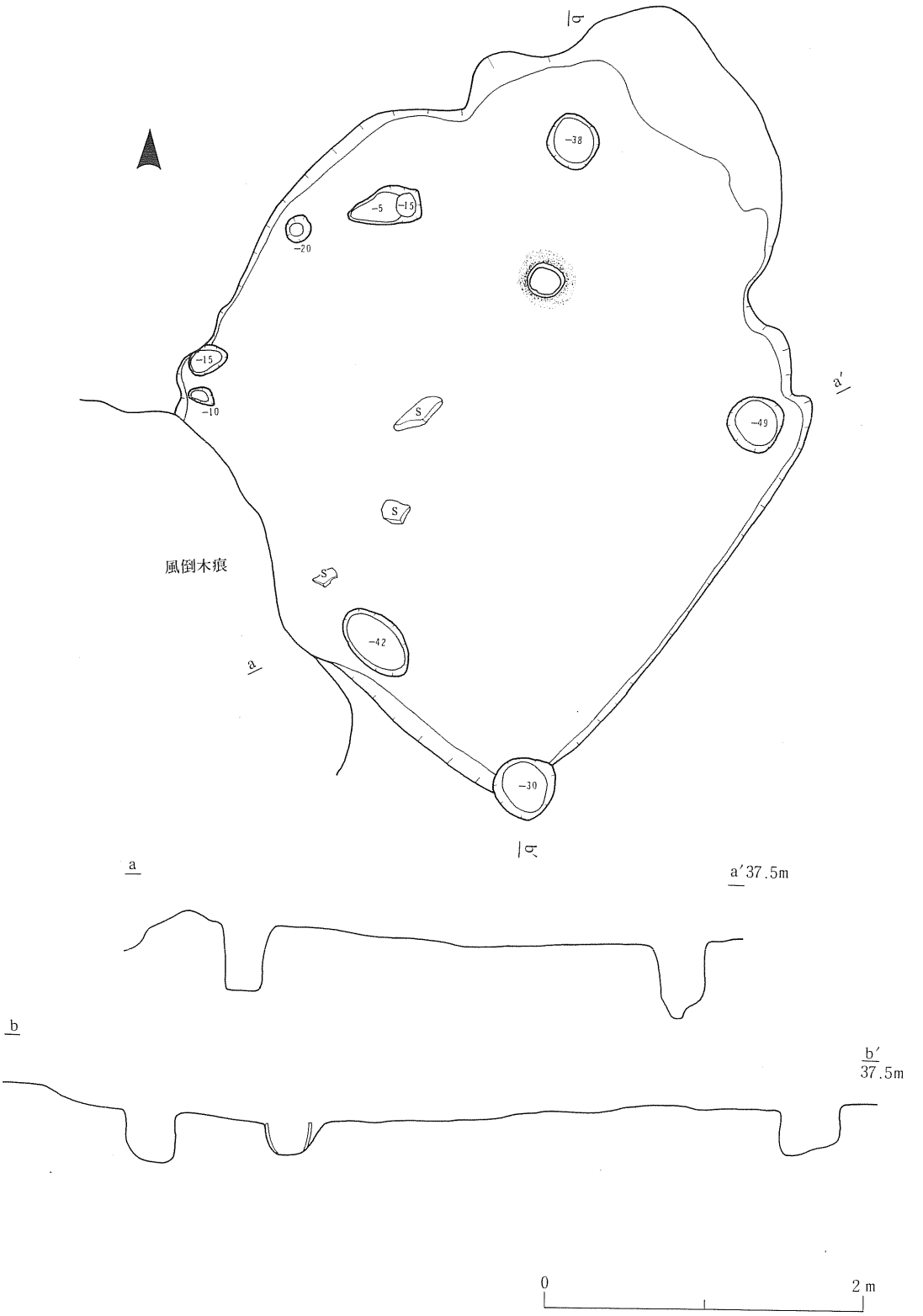
出土遺物

土器（第12図７）

炉埋設土器である。胴部以外は欠損している。器形は胴部がふくらむ深鉢である。縄の一端をループ状にし縦位回転したＲＬの縄文を施文する。



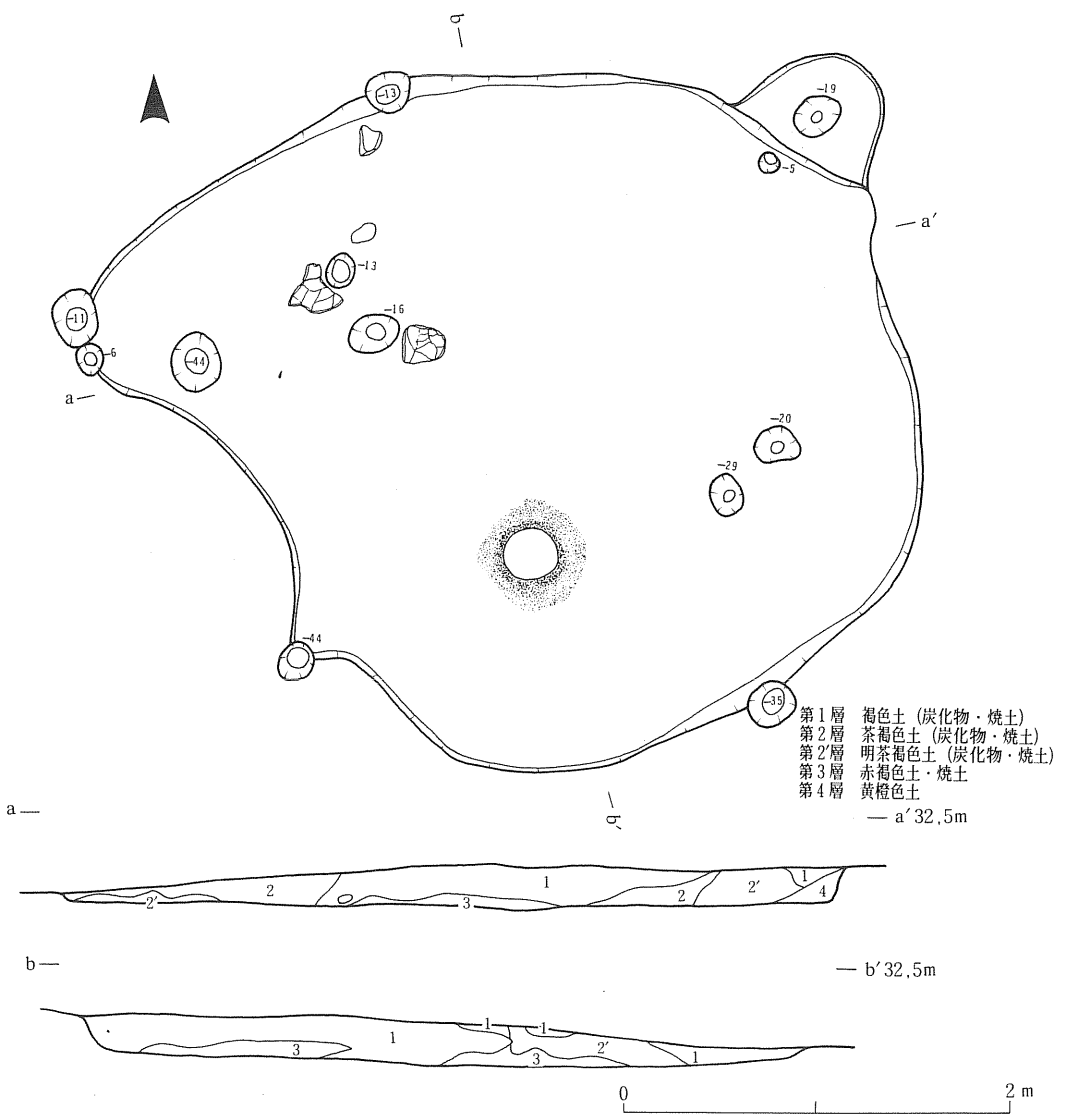
第７図　５号住居跡



第８図　６号住居跡

7号住居跡（第9図）

調査区の最も南側に位置する。南側はゆるく傾斜しローム層までは非常に浅い。東側に4号土坑がある。プランは、西南部が若干孤状をなすがほぼ円形を呈し、3.5～3.8m である。埋土は、褐色土、茶褐色土が充満している。壁は東側が高く良好でほぼ垂直に立ち上がり80cm程ある。ピットは壁や、コーナー部に堀り込まれたものがその規模からみて柱穴と思われる。炉は南側に作られた土器埋設炉である。床面はほぼ平坦であり、炉周辺は焼けて固くなっている。



第9図　7号住居跡

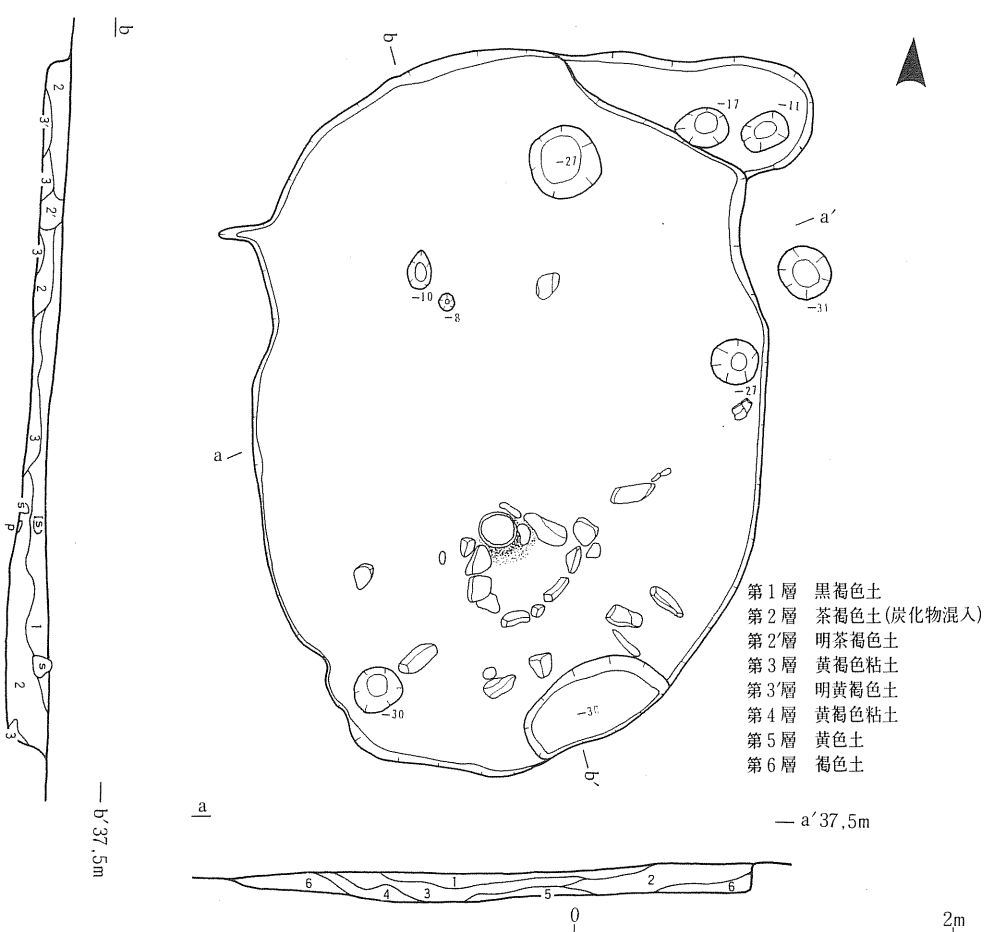
出土遺物

土器（第12図８・10、17図26～29）

10、26～29は埋土出土の土器片である。26～28は沈線と磨り消し手法を用いて文様帯を展開させる土器である。８は炉埋設土器で、口縁部が外反し、胴部がゆるくふくらむ深鉢である。頸部に一条の沈線が廻り、胴部はＬＲの縦位回転の縄文である。

８号住居跡（第10図）

調査区の南側に位置し、５号住居跡と隣接する。プランは長軸3.9m 、短軸2.7m の北に長い楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり床面からの高さは20cmである。埋土は黒褐色、茶褐色、褐色土が主体で部分的に黄褐色土のブロックが混入している。ピットは南、東壁に堀り込みのしっかりした深さ25cm以上のものが検出され主柱穴と思われる。炉は住居跡の南側につくられた土器埋設複式炉である。埋設土器と石囲い部はまだ明確に分離していないが、埋設土器を先端部に据え後方に馬蹄形に開くように石囲いをしている。土器埋設部は火を受けて赤化し焼土が多くみられる。床



第10図　８号住居跡

面は平坦で、堅くなってしまっている。

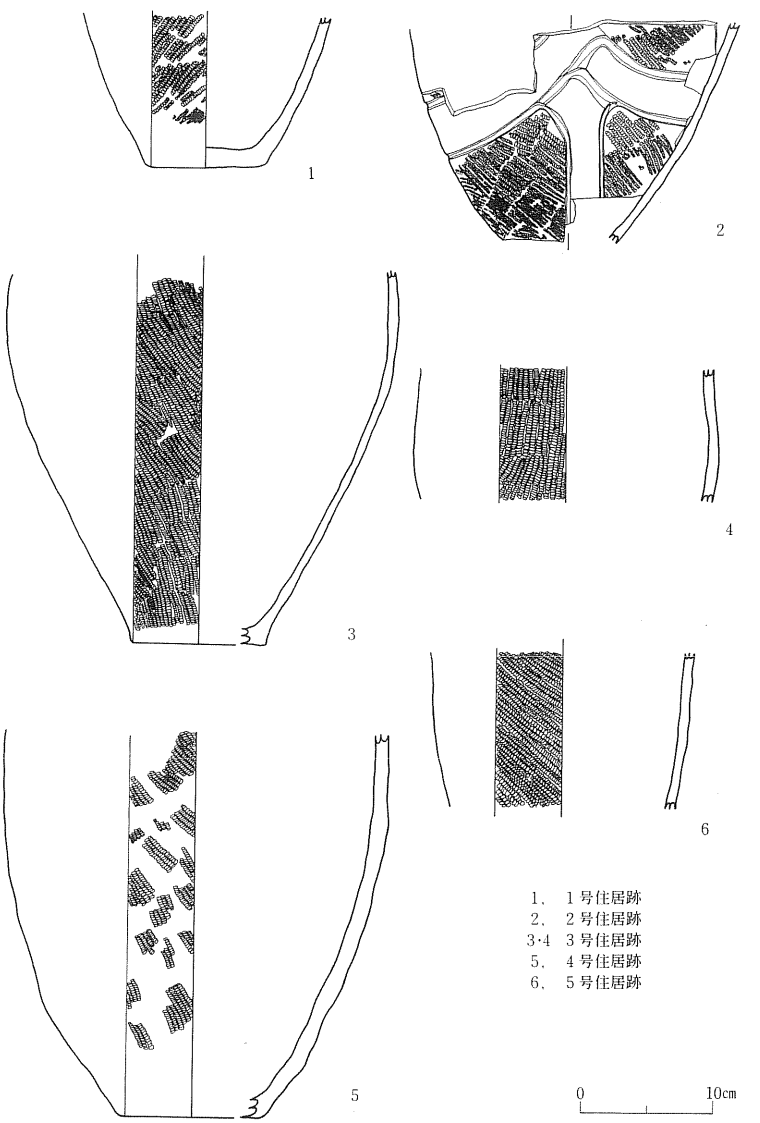
出土遺物

土器（第12図９、17図30・31）

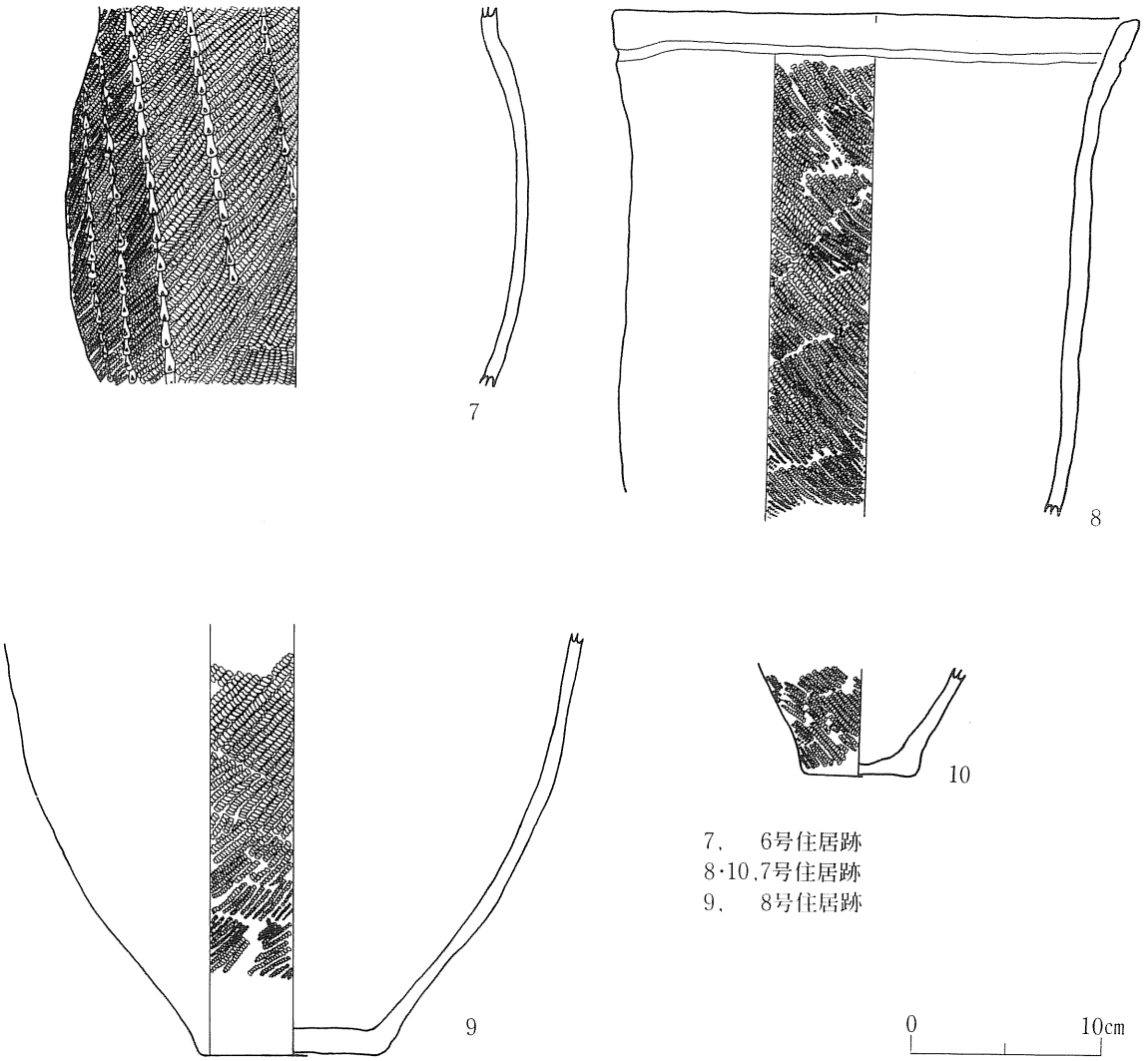
30は口縁部が内湾し、沈線を磨り消し手法によって文様帯を区画し楕円文を描出している。31は地文のＬＲ縦位回転縄文を縦に磨り消し、四条の沈線を施している。９は埋設土器で底部が小さく胴部がふくらむ深鉢である。口縁部は欠損している。地文の縄文は、ＲＬの縦位回転である。全体に二次加熱を受け赤化し、部分的にもろい。

石器（第18図８）

縦型の石匙が１点出土した。ツマミ部は両面加工、刃部は片面加工である。石質は頁岩である。



第11図　遺構内出土土器



第12図　遺構内出土土器

土　坑

1号土坑（第13図）

調査区の北側、4号住居跡の南に位置する。プランは、円形を呈し、口径1.2m、底径1.35mで、狭い頸部から外に開くように掘り込んでおり袋状を呈する。確認面からの深さは、98cmでローム層を堀り込み灰色砂礫粘土層に至る。底面は平坦である。埋土は、壁周縁に崩落したロームブロックがあり、中には黒褐色土、黒色土、褐色土を主とする土がレンズ状に堆積している。底面の壁際にはこぶし大～人頭大の礫が配置されている。土坑をとり囲むようにピットが検出されている。

2号土坑（第14図）

調査区の中央やや北寄り、1号住居跡の北東部に位置している。プランは、口径1.14m、底径1.4mの円形を呈する。深さは、確認面からの深さは50cmで、20cm程堀り込んだところから急に外に開き、袋状を呈する。埋土は、壁周縁に崩落したロームブロックがあり、底面から黒褐色土、明褐色土が

堆積し、さらに上部に炭化物、焼土を含む黄褐色土、明褐色土がある。土坑周辺には相対するピットが４個検出されている。

出土遺物

土器（第17図32、33）

埋土から二点出土した。32は然糸文、33は口縁部で斜めに細い条痕がみられる。

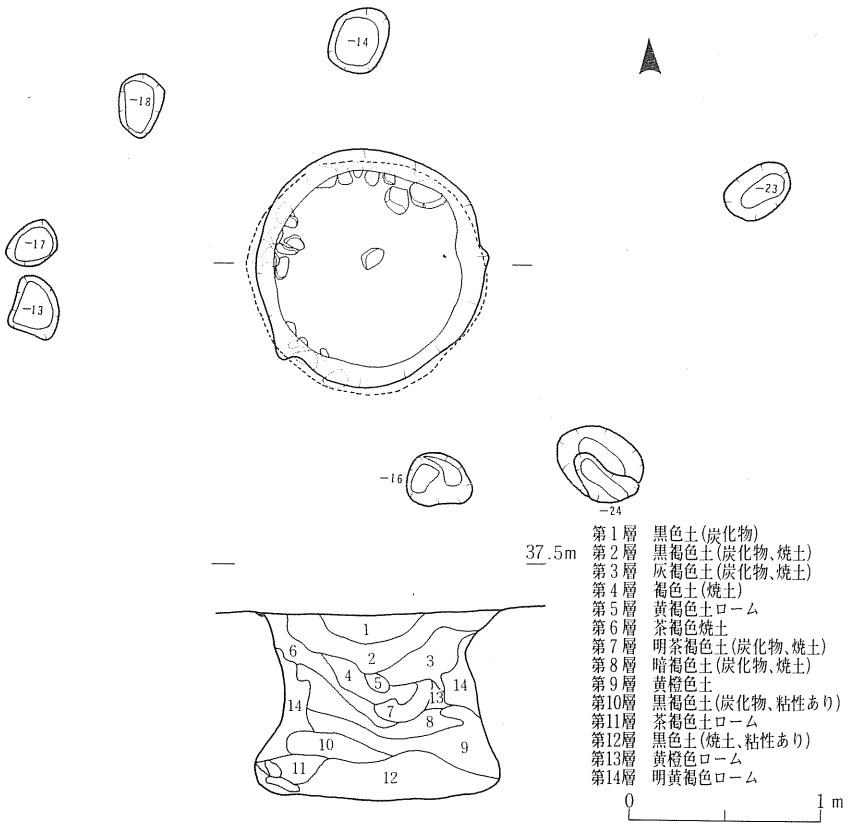
３号土坑（第15図）

調査区の中央やや南側に位置し、３号住居跡を切って作られている。プランは、口径1.35m、底径1.1mの円形を呈する。確認面からの深さは1.05mで袋状を呈する。底面は平坦で灰色砂礫粘土である。埋土は底面に暗い黄褐色土、赤褐色土、壁周辺に砂礫混じりの明褐色土、ロームブロックが堆積する。上部には、明褐色土、茶褐色土が入り込んでいる。土坑周辺には半円形に並ぶピットが検出されている。

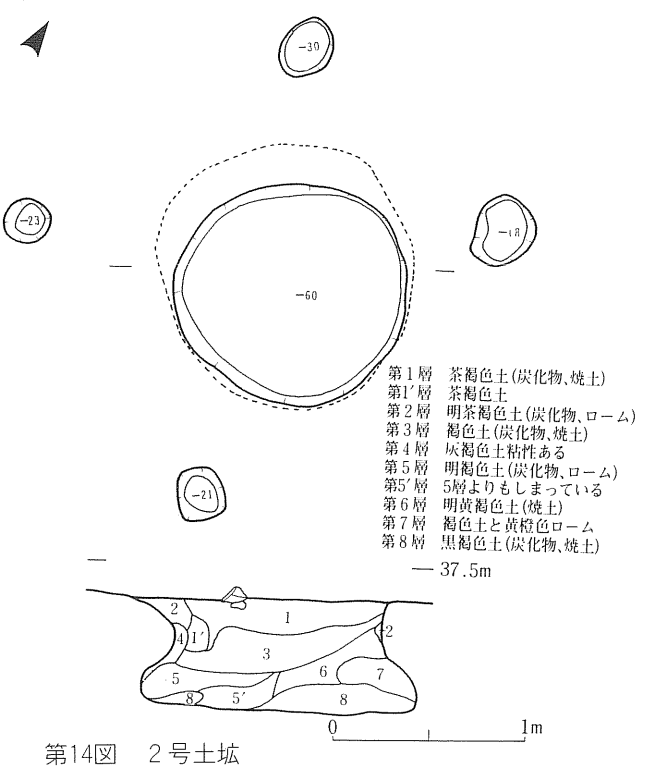
出土遺物

土器（第17図34～36）

埋土から３点出土した。34は山形の口縁を呈し、頂部は口唇部をつまみ出してつくっている。地文はＲＬの縦位回転である。33は撚糸文である。34は四個の橋状把手を有する四単位の深鉢形土器口縁部破片である。把手間には小突起をもつ。把手部分は中心部に穿孔



第13図　１号土坑



第14図　２号土坑

がある。それを中心に円形の刺突が三カ所にあり、間を沈線で連絡する。把手の下には、連鎖状文を施している。

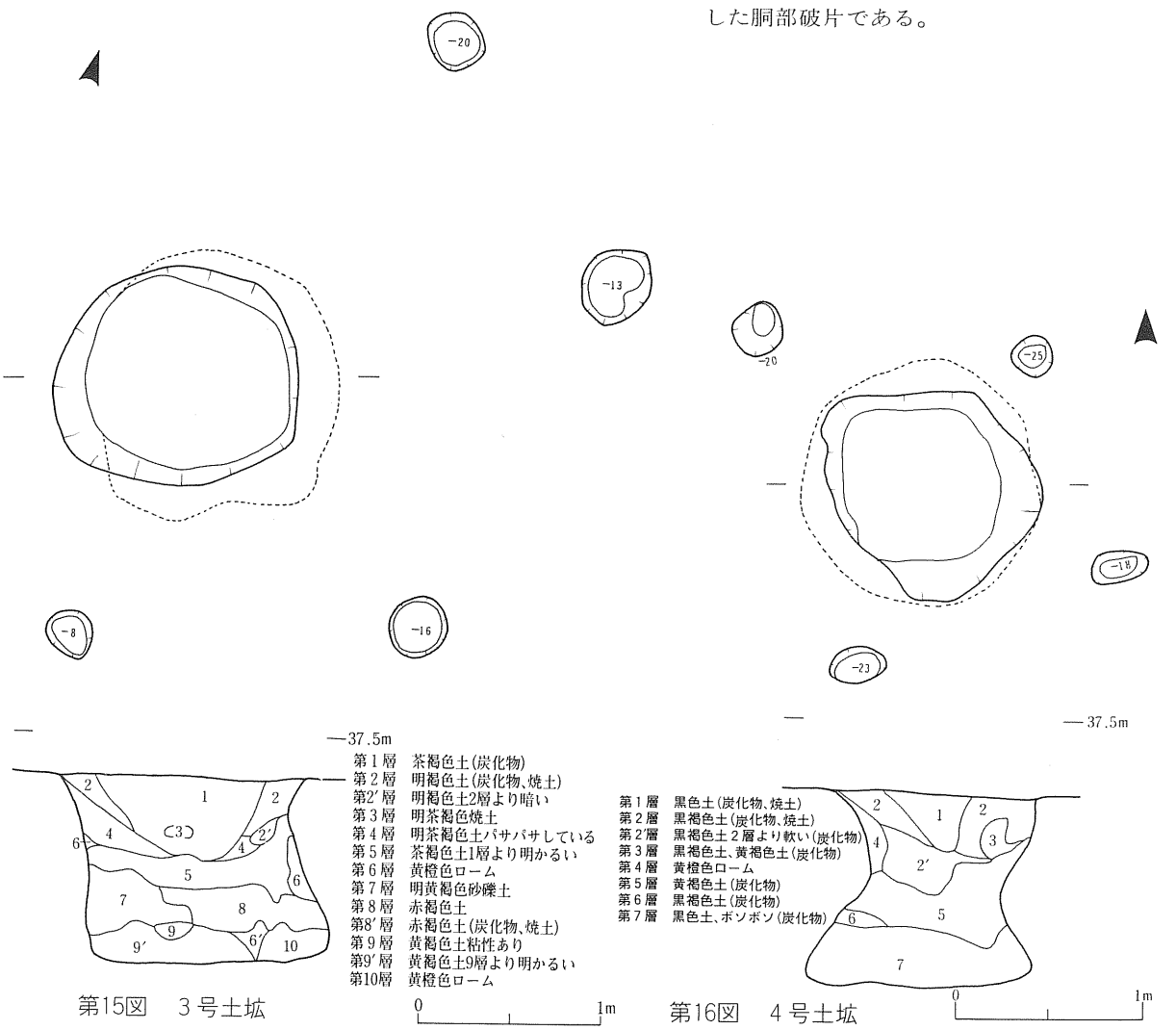
4号土坑（第16図）

調査区の最も南側、8号住居跡の東に位置する。プランは、口径1.3m、底径1.25mの円形を呈する。頸部径は70cmでここから外に開くように堀り込み、袋状を呈している。深さは1.1mである。底面は平坦で、灰色砂礫粘土層である。埋土は、黒色土、黒褐色土、黄橙色ロームが主で、壁際には崩落したロームブロックが堆積している。土坑周辺には、相対する4個のピットがとり囲むように検出されている。

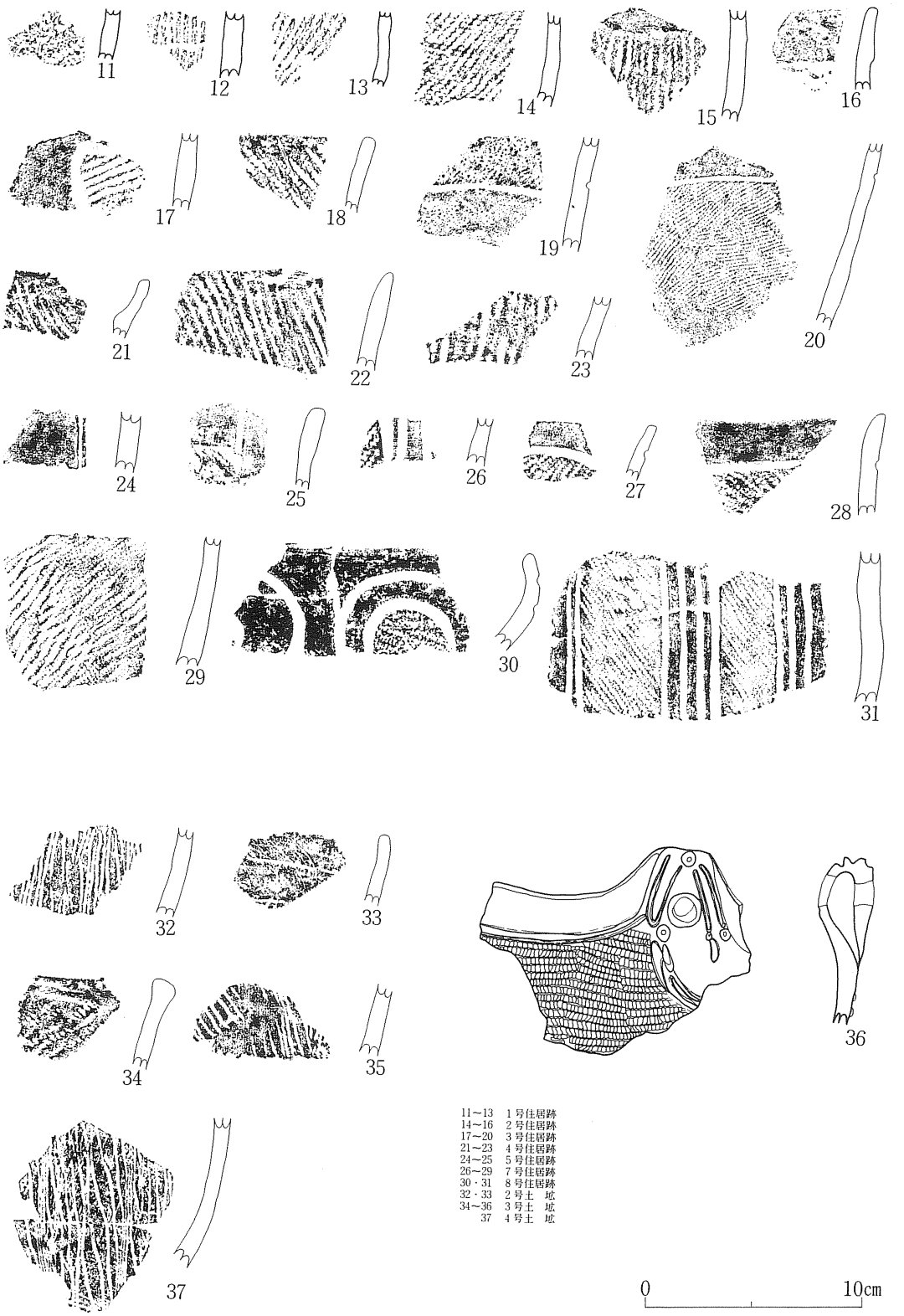
出土遺物

土器（第17図37図）

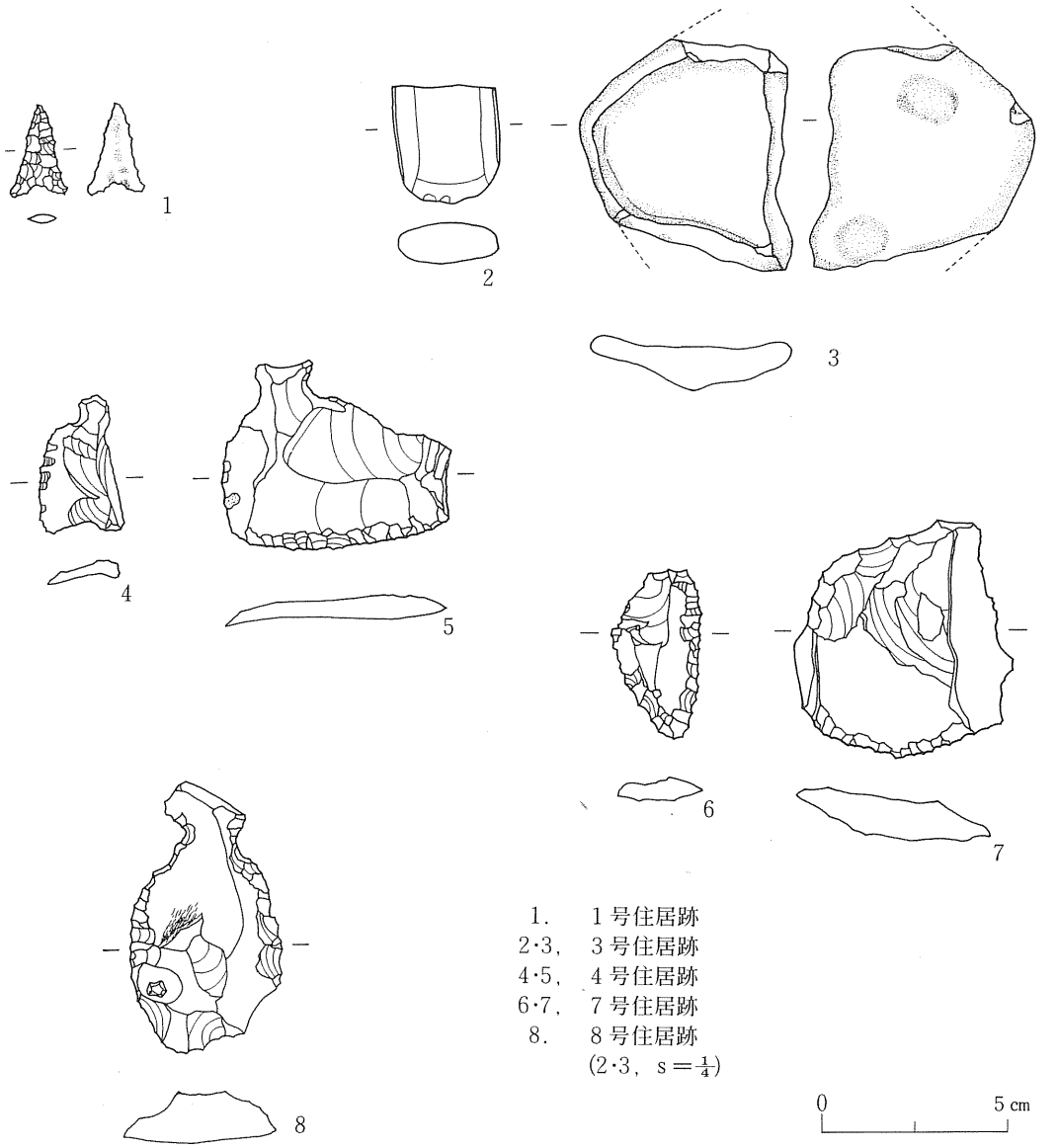
37は埋土から出土した撚糸文を施文した胴部破片である。



第15図　3号土坑　　第16図　4号土坑



第17図　遺構内出土土器



第18図　遺構内出土石器

遺構外出土遺物

土器（第19図）

出土した土器は非常に少なくすべて破片である。層位的に把握することが不可能なため、文様などの特徴から2種に分類した。

1類土器

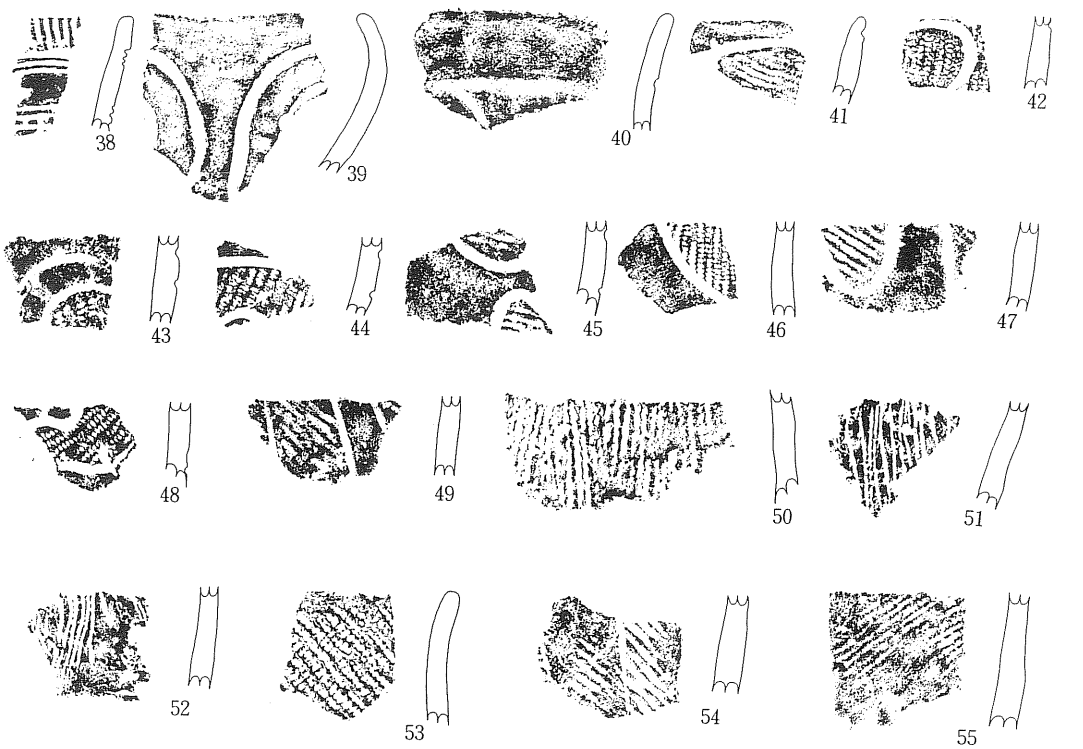
38 1片だけの出土である。口縁は粘土貼り付後縦に沈線を施す。体部は無文帯をはさんで細いヘラ状工具による三条の沈線をめぐらす。下部の沈線内に刺突文を施している。

2類土器（39～55）

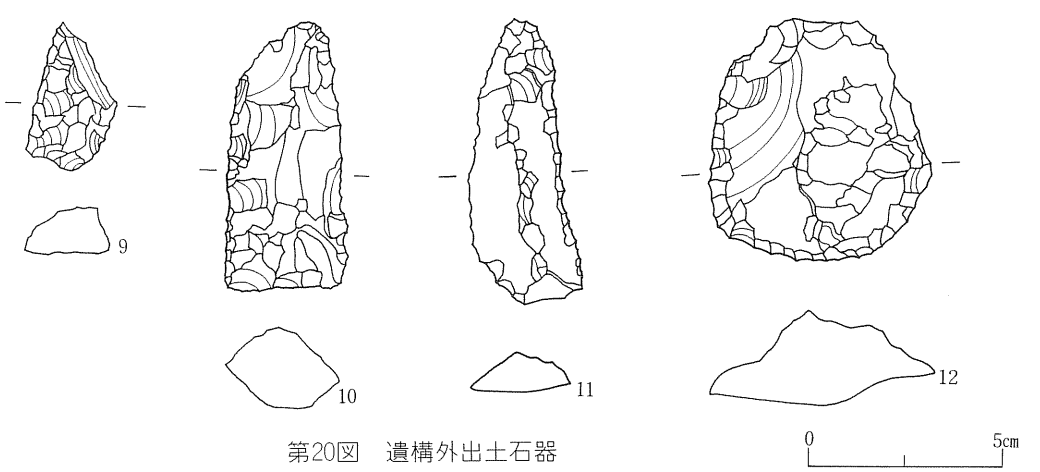
沈線を磨り消し縄文手法を用いて文様帯を構成する土器で、本遺跡の主体を占める。39は口縁が内湾し、磨消し部分を沈線によって区画している。胎土、焼成とも良好で磨きを施している。40は平縁で口縁部は無文帯である。41～49は沈線によって文様帯を区画し、区画内に縄文を残した他は磨消し手法を用いている。50～52は撚糸文、53はＬＲの縦位回転の縄文である。

石器（第20図）

ヘラ状石器、石べら、掻器が出土した。２は両面から加工を施し形を整えている。刃部は入念に



第19図　遺構外出土土器



第20図　遺構外出土石器

剝離を施している。３、４は片面加工によって刃部をつくっている。掻器的な機能をもつものである。２～４とも石質は頁岩である。

まとめ

遺構について

野畑遺跡からは、調査の結果、竪穴住居跡８軒、土坑４基を検出した。

住居跡は、南面する舌状台地の西側縁辺部に沿い南北に発見された。出土土器から大きく大木10式の時期に位置づけられるものである。住居跡どうしに重複関係はない、また炉埋設土器からも住居跡相互の関係は不明である。しかし、土坑との関係でみると３号土坑が３号住居を切っていることから新旧関係が認められる。炉には、次の４形態がみられる。①土器埋設炉－２～７号住居跡、②土器埋設石囲い炉－１号住居跡、③土器埋設複式炉－８号住居跡である。本遺跡では①が６軒と圧倒的に多い。８号住居跡の土器埋設複式炉は明確に土器埋設部と石組部が分離しておらず、また石組もいわゆる複式炉に比べると貧弱である。

土坑は、すべて円形を呈する袋状土坑である。時期は、３号土坑埋土から大木10式の新しい方か門前式に比定できる土器が出土していることから中期最終末～後期初頭に位置づけられる。他の土坑も規模形状からほぼ同時期と思われる。

土坑の周囲には、明らかに意識して堀り込まれたピットがある。２、４号土坑のように２個が対になるものや、１、３号土坑のように数個が円形状にまわるものがあり、土坑に付随する施設の柱穴と思われ、特に上屋構造の存在を想起させる。

土器について

野畑遺跡から出土した土器は、遺構内、外から整理箱で５個分ほどときわめて少なく、炉埋設土器以外は接合破片もほとんどない。

１類土器は、第19図38、１点である。縄文時代中期に位置づけられ、新潟、北陸地方にみられる新崎様式に近いものである。

２類土器は、一般的に中期末葉、大木10式土器に入る土器群である。第17図31、第19図45、47は沈線によって区画した文様が楕円、U字状に残るものや、縦に垂下するものなどで、大木９式土器のなごりを残すものであろう。本類には、１～８号住居跡出土の土器が含まれる。

３類土器としたものは、３号土坑から出土した第17図、36１点である。中期末葉大木10式の新しい方が後期初頭の門前式に比定できるものであろう。

参　考　文　献

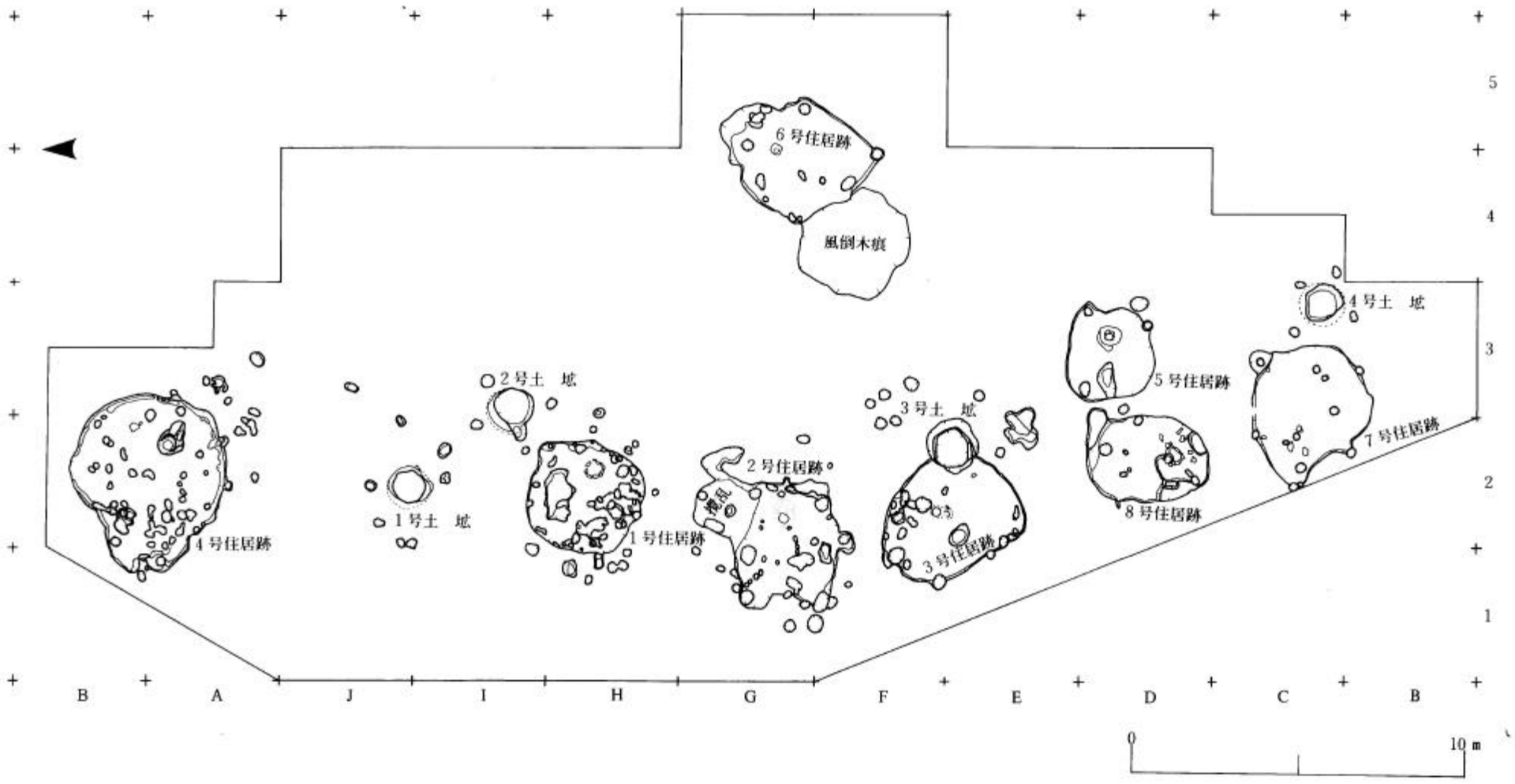
秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

秋田市教育委員会：「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」　1982

目黒吉明：「住居の炉」　縄文文化研究８雄山閣出版　1982

縄文土器大成２：「中期」　講談社　1981

季刊考古学ー縄文人は何を食べたかー、雄山閣出版　1982


6号住居跡
風倒木痕
4号土　坑
5号住居跡
7号住居跡
8号住居跡
3号土　坑
3号住居跡
2号住居跡
1号住居跡
2号土　坑
1号土　坑
4号住居跡
5
4
3
2
1
B
A
J
I
H
G
F
E
D
C
B
0
10 m

第21図　遺構配置図

発掘状況（東→）

遺跡全景（北→）

図版 1

1号住居跡（南西→）

2号住居跡（南→）

図版 2

3号住居跡（東→）

4号住居跡（東→）

図版 3

5号住居跡（北→）

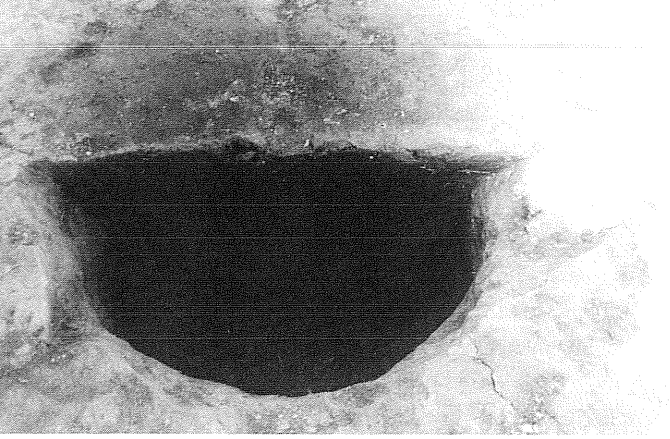
6号住居跡（北東→）

図版 4

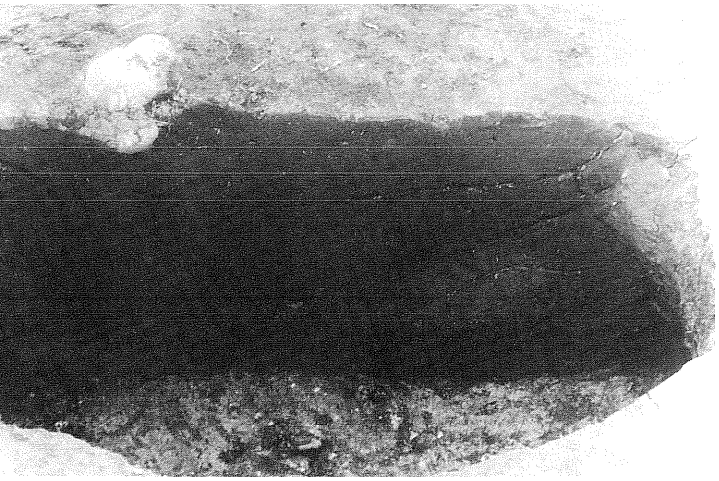
7号住居跡（南→）

8号住居跡（南→）

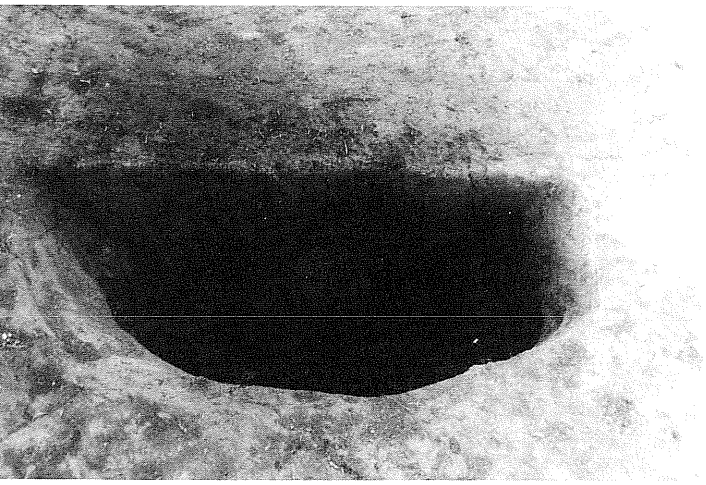
図版 5



1号土坑（南→）



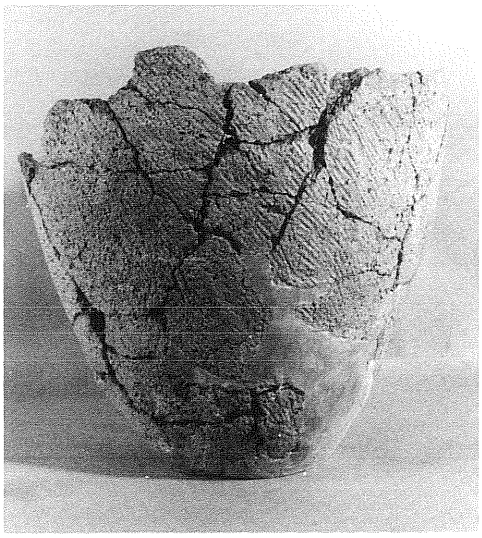
2号土坑（南→）

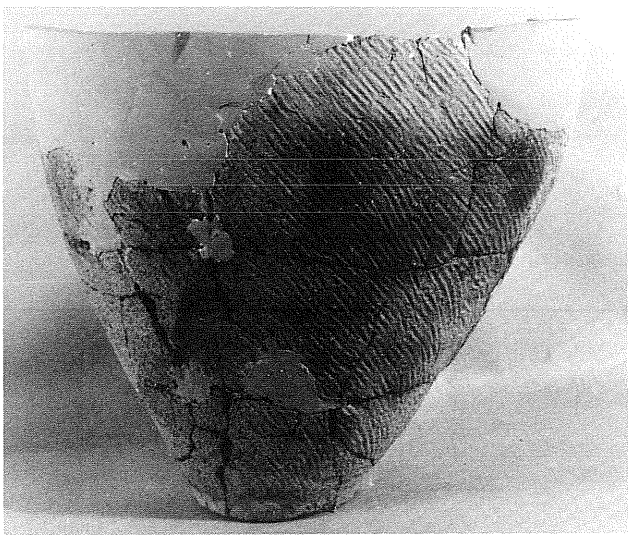


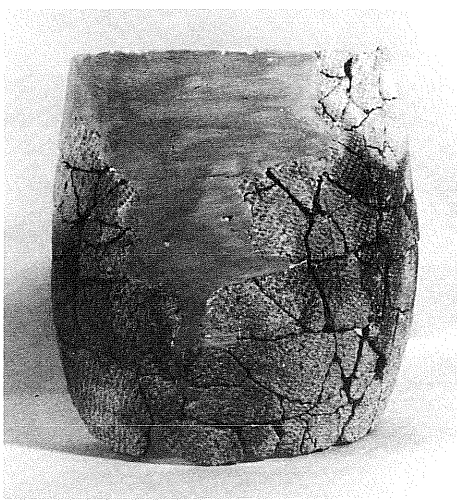
3号土坑（南→）

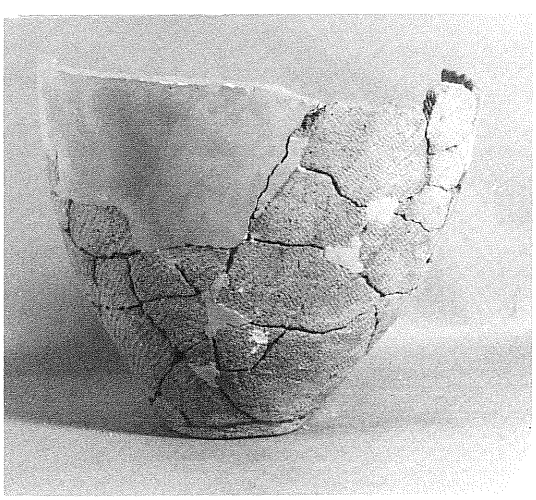
4号土坑（西→）

図版 6

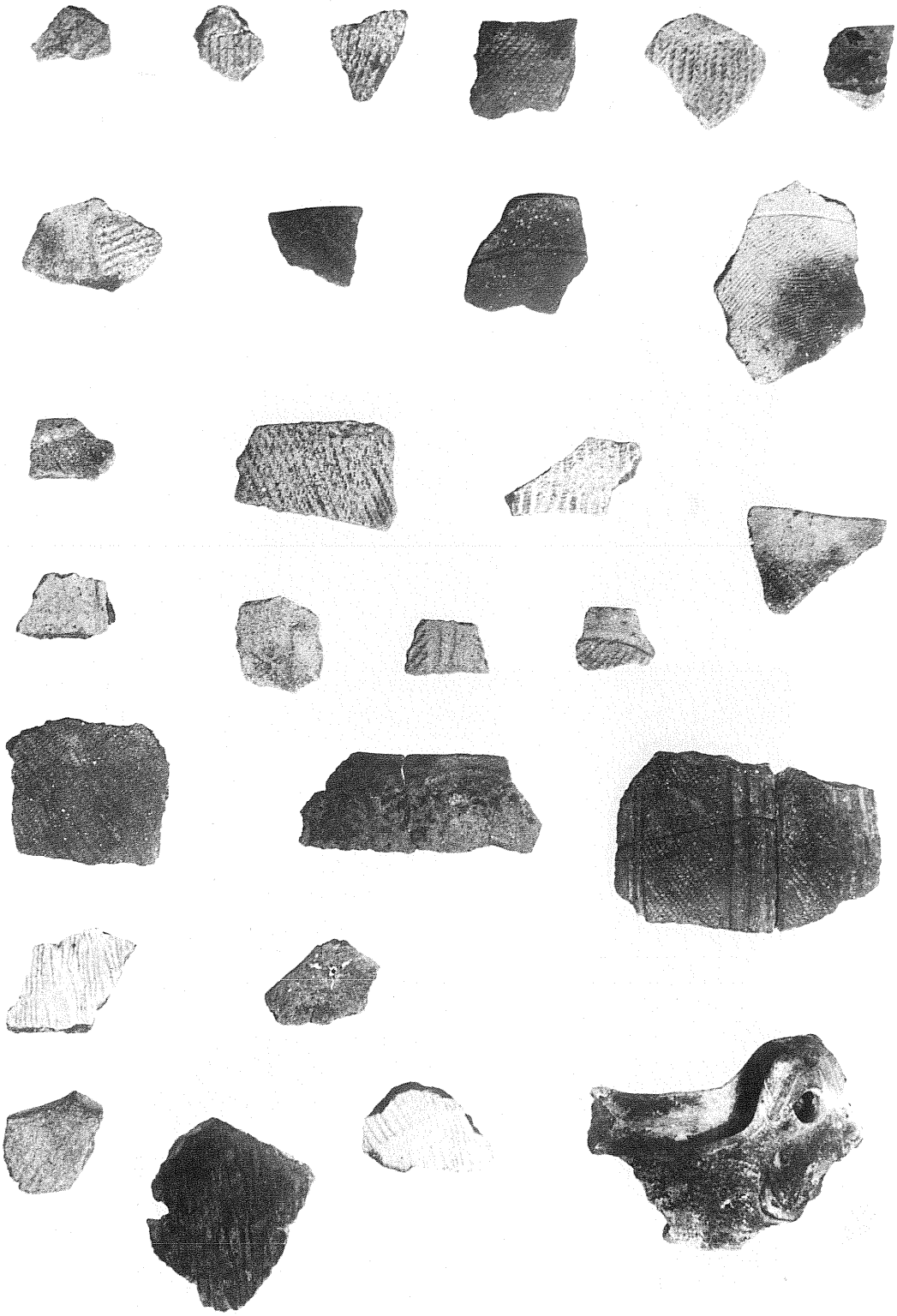




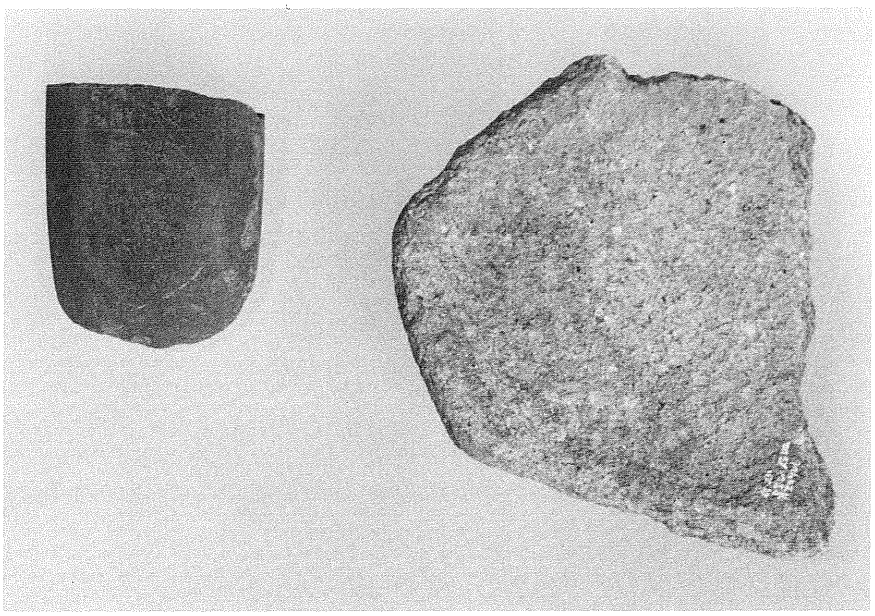


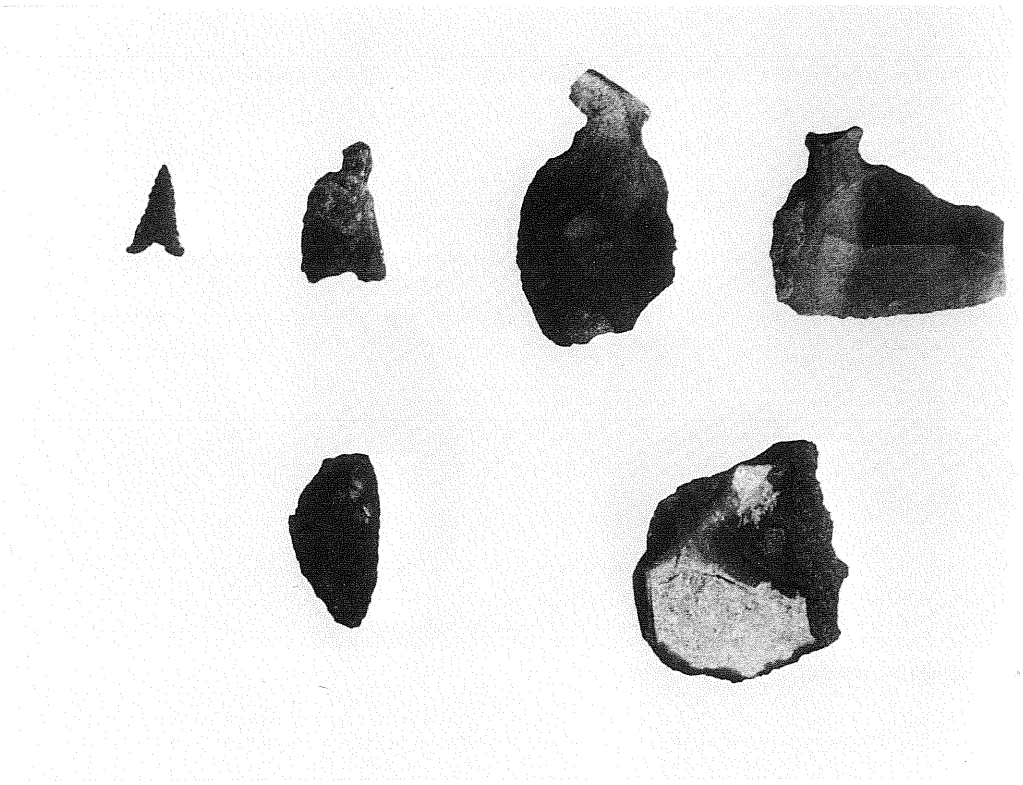


図版 7　遺構内出土土器

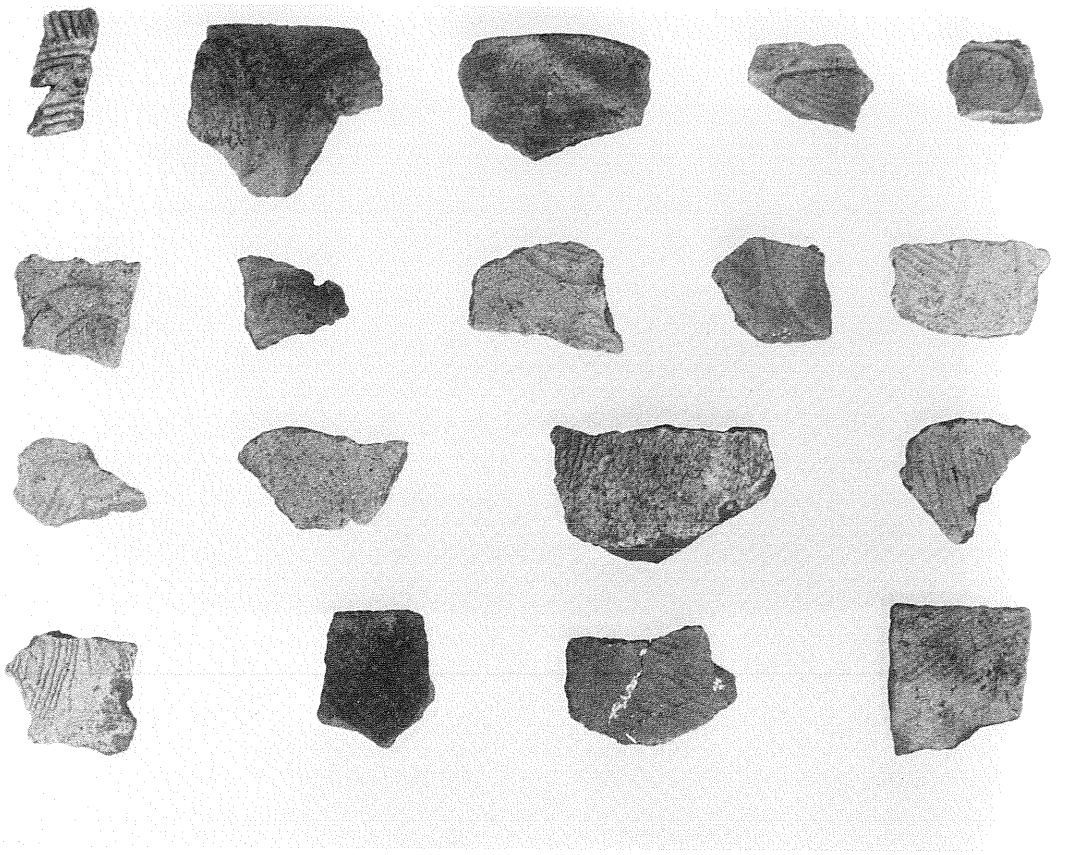


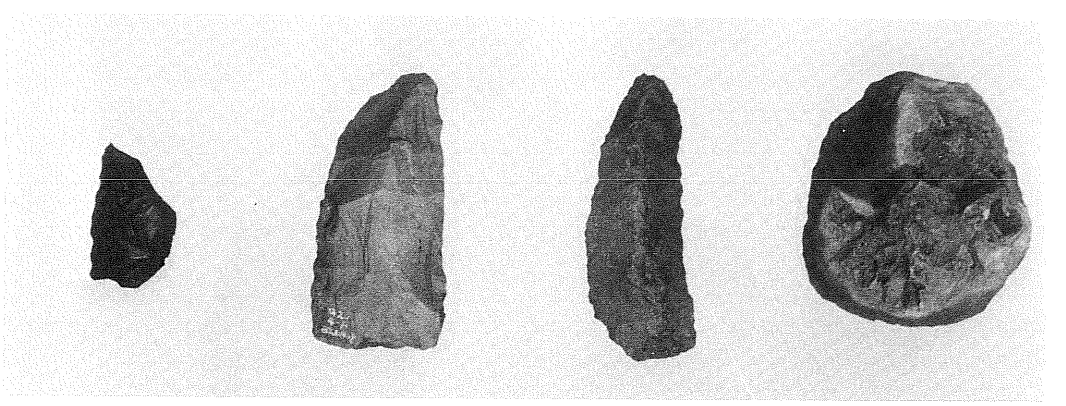
図版 8　遺構内出土土器





図版 9　遺構内出土石器

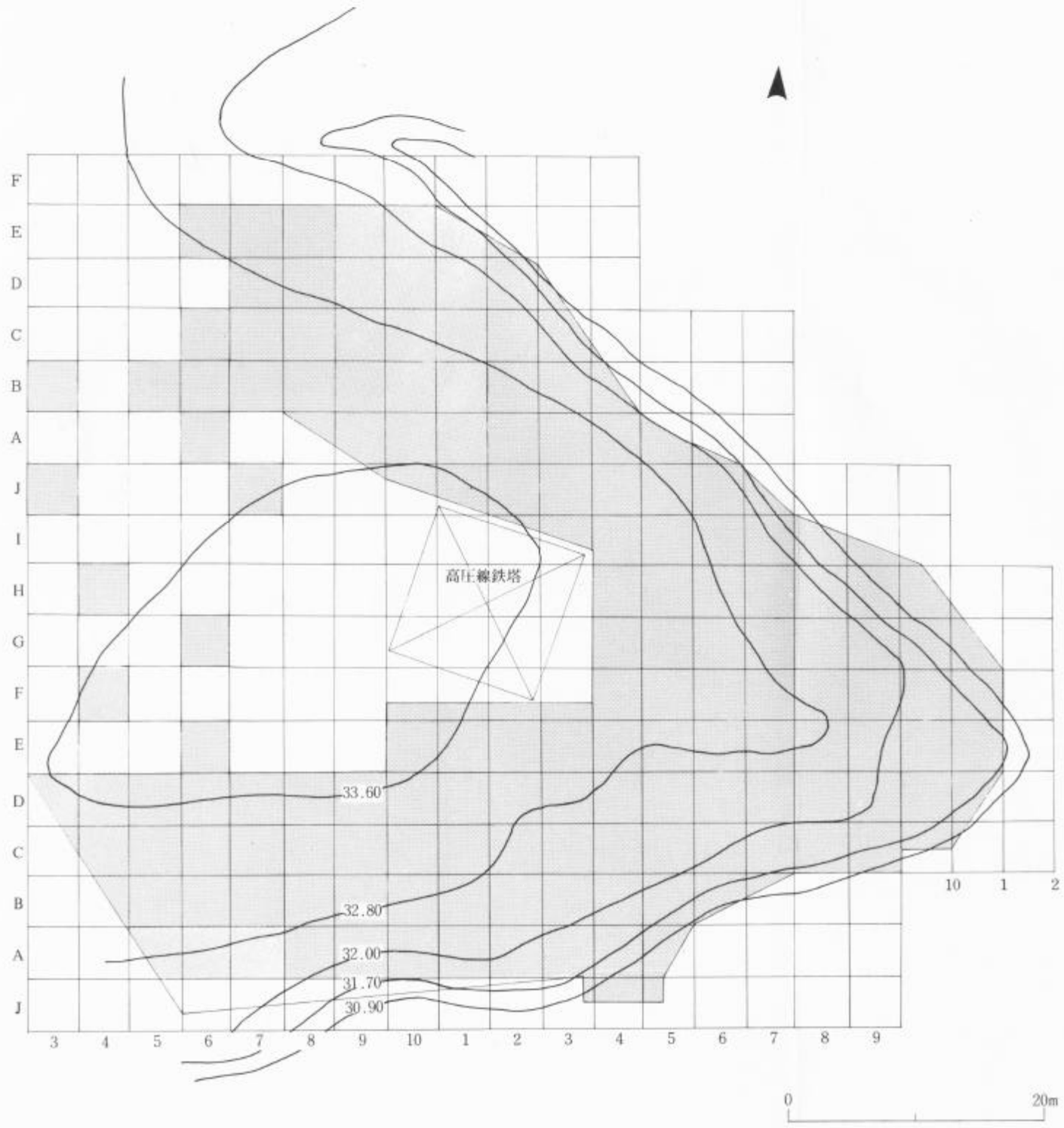




図版10　遺構外出土土器・石器

湯ノ沢Ｂ遺跡

第1図　遺跡周辺の地形図



第２図　湯ノ沢Ｂ遺跡グリッド配置図

遺跡の概観

湯ノ沢Ｂ遺跡は、岩見川によって形成された扇状地にある未戸松本部落から北側に伸びる沢（現水田）に面した標高32.0ｍ～33.6ｍの平坦な舌状台地上に位置し、遺跡はこの台地上の東端に営まれている。検出された遺構は縄文時代中期の住居跡17軒、同期袋状土坑が８基、平安時代住居跡１軒である。遺物は、縄文時代前期末葉～晩期の土器・石器、平安時代の土師器等で、整理箱で15個ほどである。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査区の北西に位置し、プランは一辺4.0ｍの方形を呈する。壁は高さ25cmほどでほぼ垂直に立ち上る。床は堅くしまり、焼けた部分もあり西側は一段高くなりベッド状となる。埋土は黒色土系の土が土器片・炭化物を含んで堆積する。ピットで主柱穴と考えられるものは、深さ40～60cmのもので、東南の二つのピットでは柱痕跡を確認している。住居跡北側の堀り込みは長軸1.8ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈して埋土は黒色土を主体として土器片・焼土・炭化物が混入している。カマドは、住居跡北西隅に構築されているが保存状態は悪く、青灰色粘土を使用した袖部と支脚に使用された甕を検出したにすぎない。

出土遺物

土師器（第４図１～6,5図29・30）

１～４は内面に黒色処理を施した坏である。すべて回転糸切り無調整である。１は底部から丸く内湾しながら立ちあがり、口縁部は外反する。２～４は体部が直線的にのび口縁部が外反する。1･3は胎土中に小石粒を多く含む。4･5は台付坏である。内面に黒色処理を施している。貼り付け高台でナデを施しており底部切り離しは不明である。29・30とも回転糸切り無調整で胎土中に小石粒を多く含み、焼成良好の甕である。29は、カマド支脚として使用されていた。

須恵器（第４図７～15）

７～11は回転糸切り無調整の坏である。灰白色を呈し焼成は良好である。８は底部に墨書がみられるが判読不能である。12は内湾しながら立ちあがり、口縁部はやや外反する台付坏である。回転糸切り後に高台を貼り付けている。灰白色で焼成良好である。13、14は胴上半部が欠損する壺である。13は胴下半部に回転ヘラケズリを施している。焼きぶくれが著しい。14は底部周縁にケズリを施し、胴下半部はヘラ状工具によるカキ目痕が明瞭である。15は甕の破片である。外面は条線状叩き板痕、内面は同心円状のアテ具痕がみられる。

赤褐色土器（第５図16～28）

16～26は回転糸切り無調整の坏である。ゆるく内湾しながら口縁部に至るもの（17・22・24）や口縁部が外反するもの（16・18～21・23・25・26）がある。胎土には小石粒を多量に含む土器が多い。27・28は回転糸切り無調整の皿である。底部が厚く、体部は直線的に外へ開くようにのび口縁

部は外反する。胎土には小石粒を多く含む。

遺構外出土土器

1号住居跡南東部グリッドから一括出土した。

土師器（第6図31・32）

31・32は回転糸切り無調整の坏である。31は黒色処理を施し、口縁部は横、体部から底部は放射状にミガキがみられる。32は二次加熱を受けたものか内黒が消失しているが、ミガキが明瞭にみられる。

須恵器（第6図33）

33は回転糸切り無調整の坏である。ゆるく内湾し、口縁部は外反する。胎土中に小石粒を多く含む。焼成は良好である。

赤褐色土器（第6図34～42）

34～42は40を除き、回転糸切り無調整の坏である。40は、底部にヘラ状工具によりナデが施され切り離しは不明である。胎土には小石粒を多く含むものが多い。

以上述べたように、1号住居跡、それに近接するグリッド（遺構外）から出土した遺物は土師器須恵器、赤褐色土器がある。特に主体を占める赤褐色土器坏、皿は回転糸切りで二次調整を全く施さないもので、時間的には10世紀後半以降の年代が考えられる。これらの土器は、秋田城跡、払田柵跡、足田遺跡、野形遺跡等から出土している。本遺跡出土の赤褐色土器は約500 m北に位置する野形遺跡出土の土器に技法、器形、胎土が類似する。

2号住居跡（第7図）

調査区、中央部北側に位置し、プランは径3.0 mの円形を呈するものと考えられる。壁は高さ20cmほどであるが、東から北にかけてはほとんど確認できなかった。床は軟らかく炉・ピットも検出出来なかった。

出土遺物

縄文土器細片数点が出土したにすぎない。

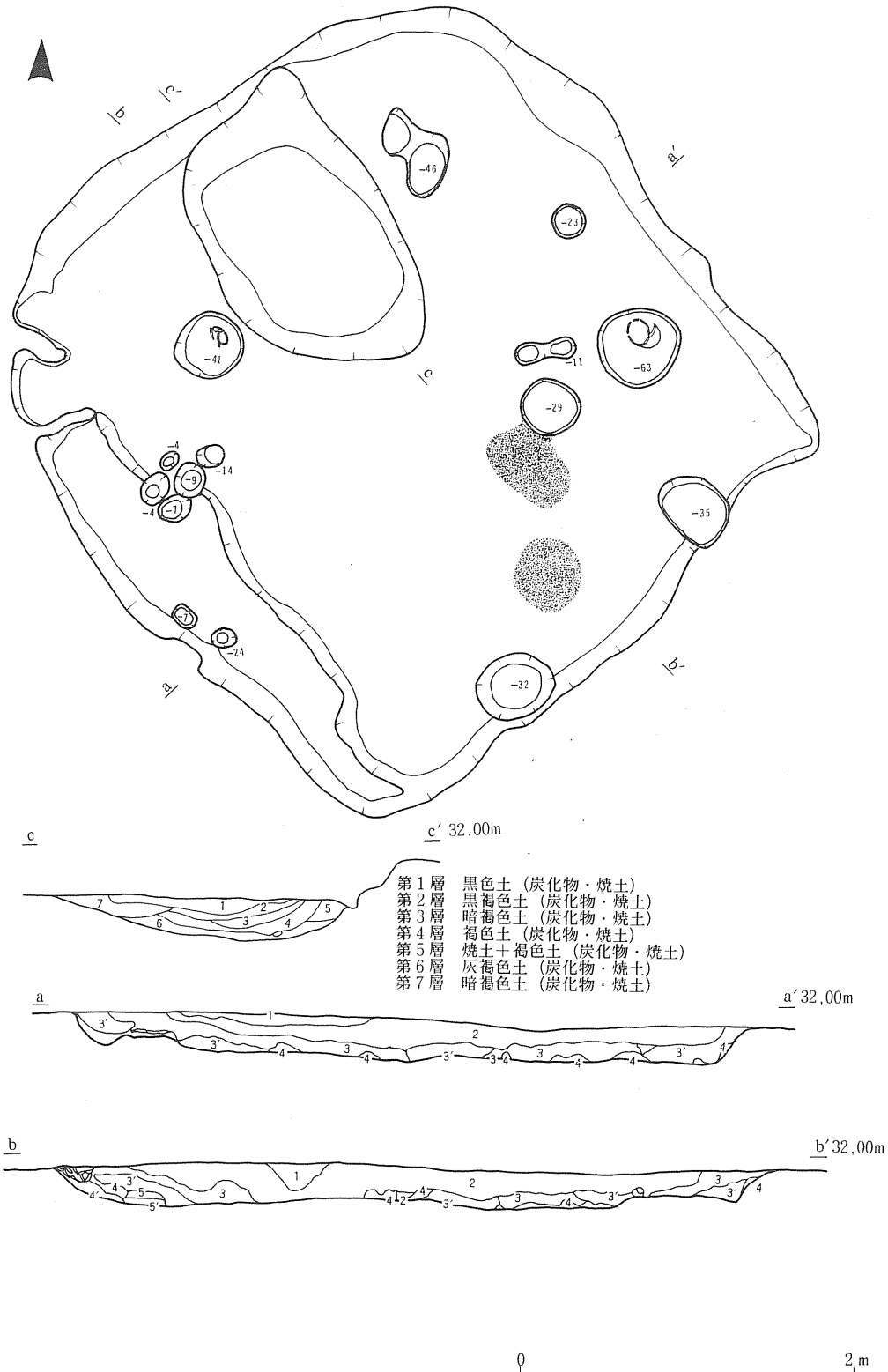
3号住居跡（第8図）

調査区　の東端、4号住居跡の東側に位置し4号土坑上にある。プランは長軸5.0 m、短軸3.3 mほどの楕円形を呈すると考えられるが沢に傾斜する東側では明確でない。

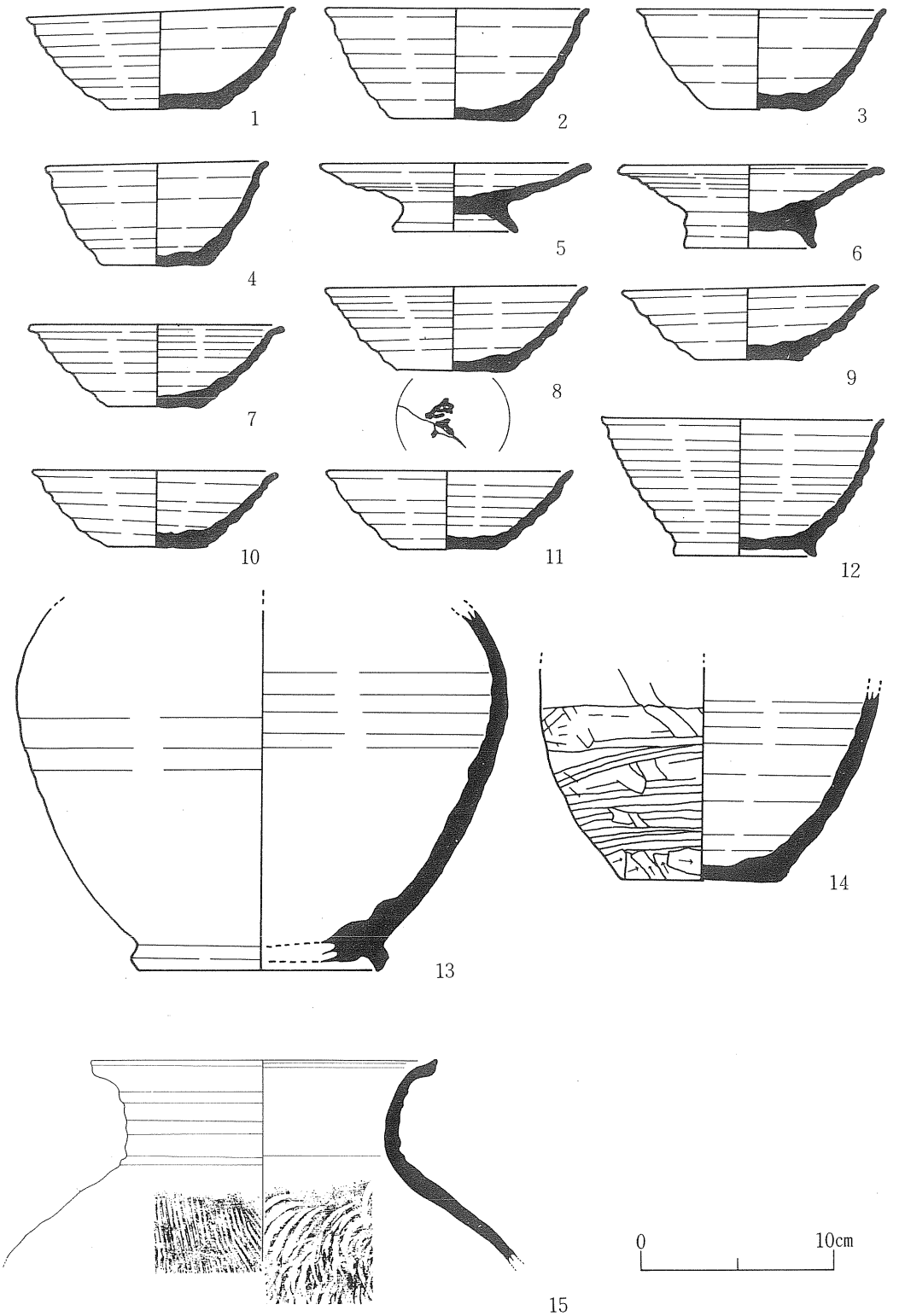
壁は、西側では高さ55cmほどでしっかりしている。埋土は、褐色系の土が沢に向って流れ込むように堆積し、全体的に土器片・フレイクが混入しており、特に7層ではその傾向が強い。床は比較的堅くしまっており、特に東側では明瞭である。炉はないが中央部床面が焼けており焼土が堆積している。ピットは住居跡東側で多く確認したが、柱穴が壁外にあったかどうかは明らかでない。

出土遺物

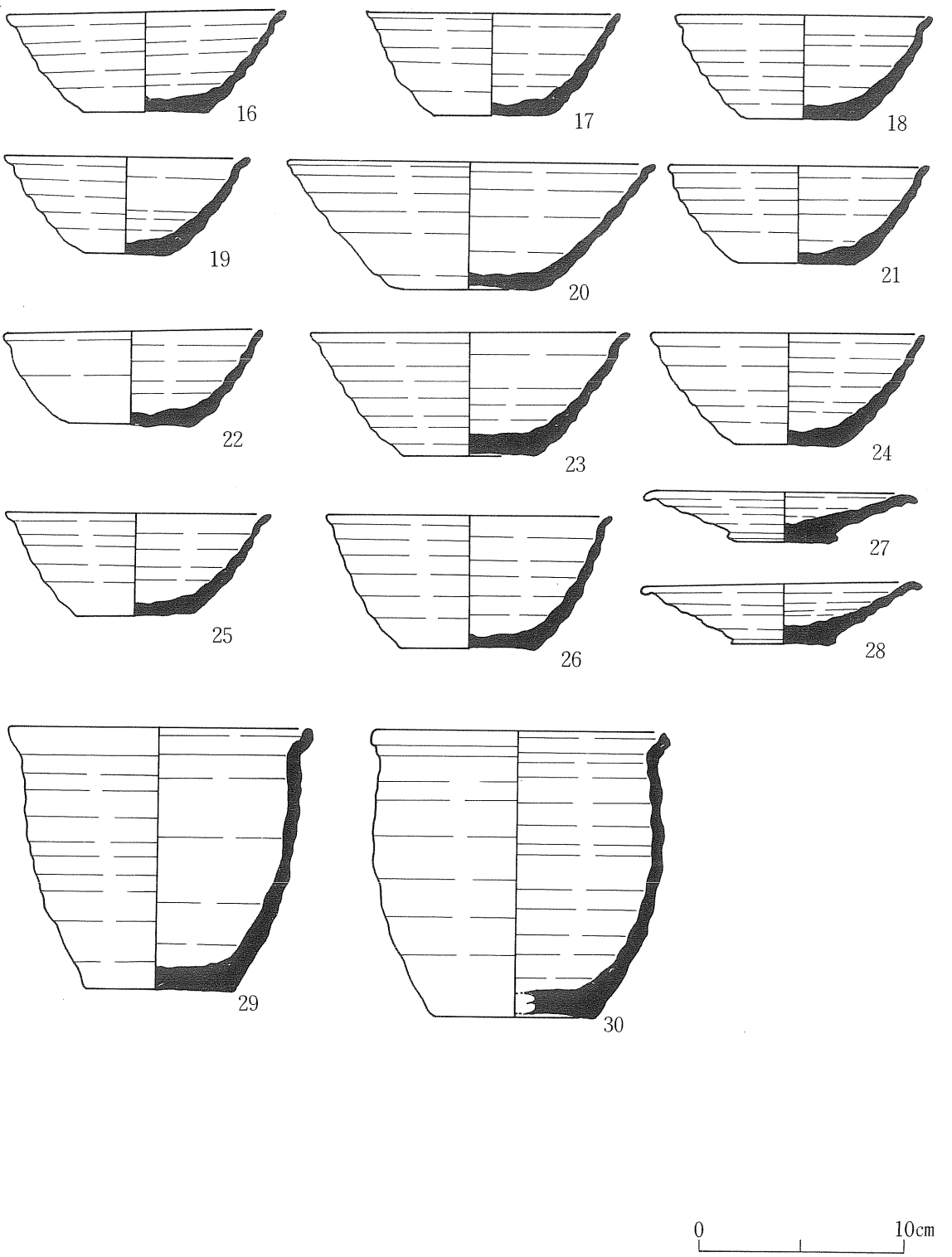
土器（第35図16～27）


c
c′ 32.00m
第１層　黒色土（炭化物・焼土）
第２層　黒褐色土（炭化物・焼土）
第３層　暗褐色土（炭化物・焼土）
第４層　褐色土（炭化物・焼土）
第５層　焼土＋褐色土（炭化物・焼土）
第６層　灰褐色土（炭化物・焼土）
第７層　暗褐色土（炭化物・焼土）
a
a′ 32.00m
b
b′ 32.00m
0
2 m

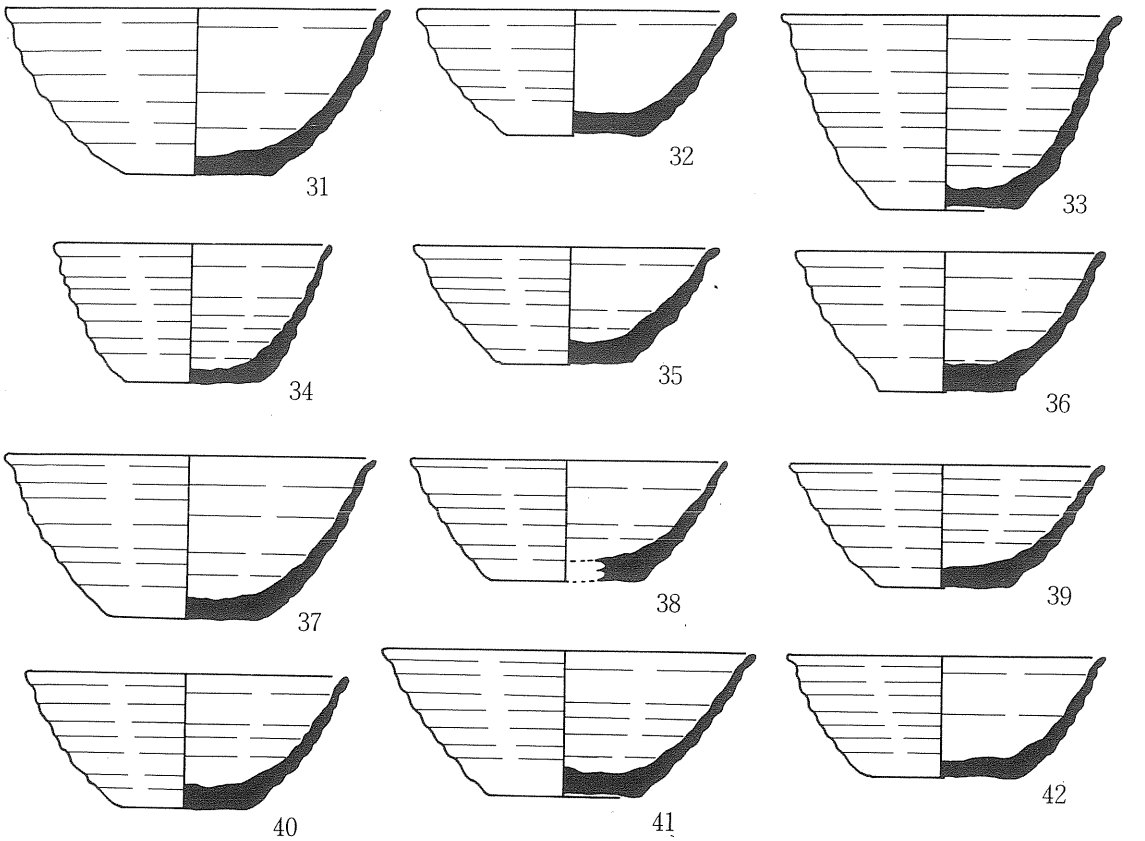
第３図　１号住居跡



第４図　１号住居跡出土遺物

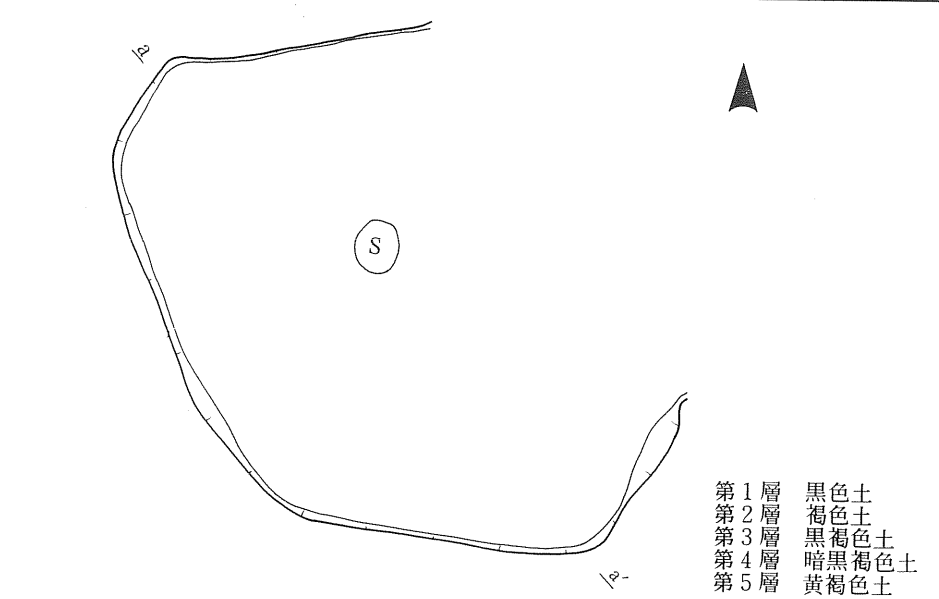


第５図　１号住居跡出土遺物

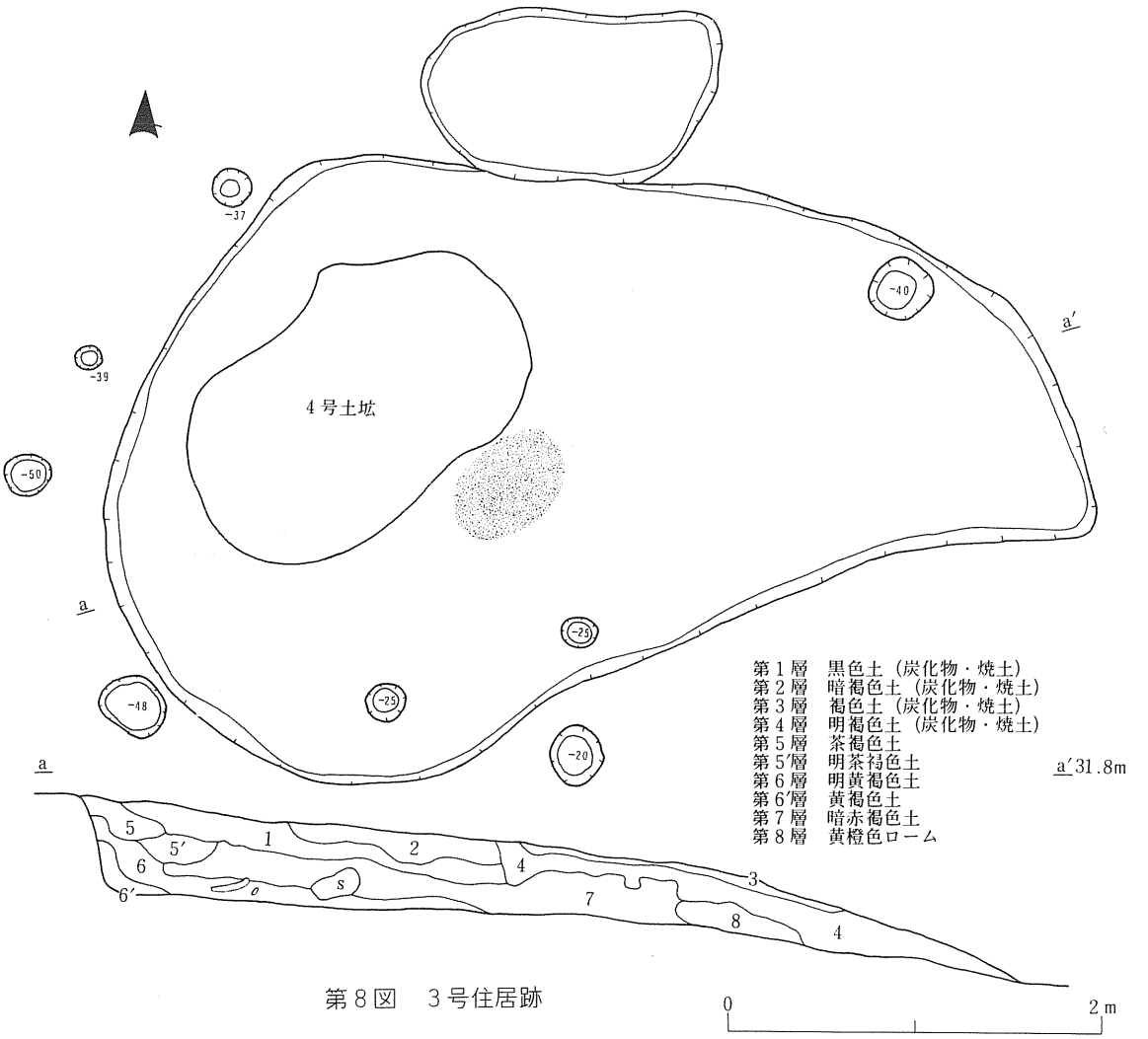


第６図　遺構外出土遺物

0　10cm



第７図　２号住居跡



第8図　3号住居跡

土器はいずれも埋土出土のもので、口縁部がやや外反し、無文となり胴部は曲線的な沈線で磨消しによる無文部と縄文帯とを区画するものや刺突を伴う深鉢形土器である。21と24は同一個体で口縁部が波状を呈し、胴部は粘土紐貼付による断面三角形の隆起線によって縄文帯を区画している。伴出する土器底部には網代痕がみられる。

石器（第41図1～4、第42図1）

両面加工の槍先状のもの(1)、ヘラ状石器(3)、縦型の石匙(4)、両面使用の凹石（第42図1）等が出土している。

4号住居跡（第9図）

調査区　の東側、3号住居跡の南側に位置し、プランは長軸5.2m、短軸2.8mの楕円形を呈する。壁は高さ10cmほどでしっかりしており、幅15cm、深さ5～10cmの周溝が東側と西側にある。埋土は黒褐色土を中心に褐色系の土がブロック状に堆積する。床は全体的にしまっており、炉はないが東

側床面が焼けて焼土が堆積している。ピットは住居跡壁に沿って確認されている。

出土遺物

土器（第35図28～33、第36図34～39）

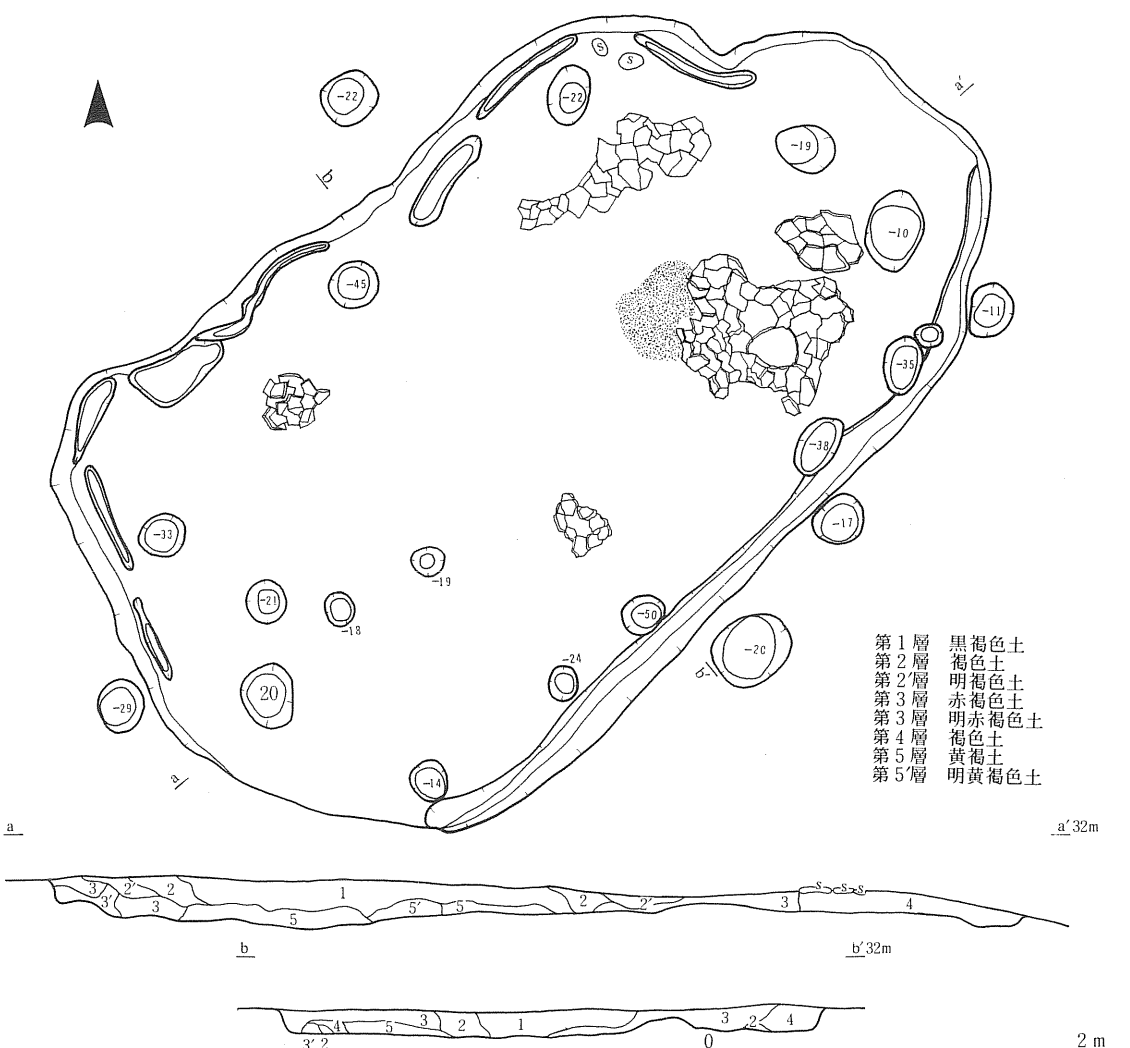
床面出土のものである。平縁でやや外反ぎみの口縁部から垂直ないしはふくらみながら胴部にいたる深鉢形の土器であるが、内湾する口縁部（28・29）、ゆるやかな山形状を呈するものもある（32）。口縁部文様帯は無文となり胴部文様は曲線的な沈線によって区画された縄文帯であるが、縄文帯の区画が隆起線によるもの（28・29）、刺突の施されるものがある（33・34）。

石器（第41図５・６）

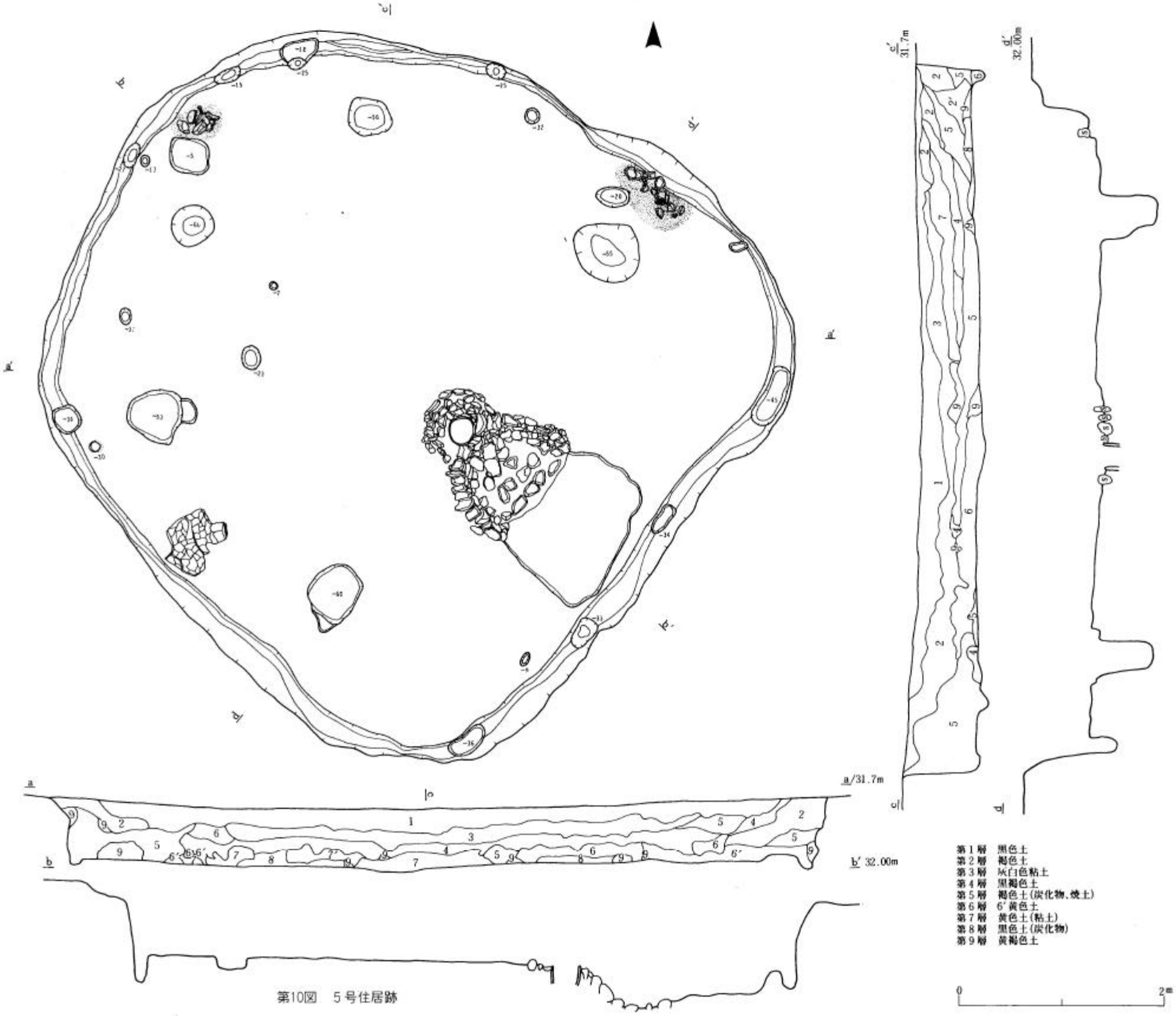
主要剝離面からの押圧剝離による石錐(5)、基部にアスファルト付着の片面調整の石器(6)がある。

５号住居跡（第10・11図）

調査区の東南隅、台地が張り出した所に位置し、最大の住居跡である。プランは径6.5m の円形を



第９図　４号住居跡


a/31.7m
b′ 32.00m
c′ 31.7m
d′ 32.00m
第1層　黒色土
第2層　褐色土
第3層　灰白色粘土
第4層　黒褐色土
第5層　褐色土(炭化物,焼土)
第6層　6′黄色土
第7層　黄色土(粘土)
第8層　黒色土(炭化物)
第9層　黄褐色土
0
2m

第10図　5号住居跡

呈し、壁は高さ50cmでしっかりしており、巾15cmの周溝がめぐる。埋土は、上部に黒色土が厚く堆積し、その下に灰白色粘土層がある。全体的に炭化物・焼土が多量に混入するが、土器・石器は少ない。床面はしっかりしていて、炭化材が散乱し、全体的に焼土の入った径３cm、深さ10cmほどの小穴があるが床、壁とも焼けておらず焼失家屋とは考えられない。炉の他に北側に二ヶ所床面が焼けて焼けた石が散乱する場所がある。ピットは周溝内にもあり、主柱穴は、深さ50cm以上のもので５個と考えられる。

炉は住居跡の中軸線上に作られ、土器埋設石囲部に石組部と堀り込み部のある複式炉である。土器埋設石囲部は土器を中心に径1.2ｍの範囲に扁平な石を並べており、石組部は1.8ｍ×2.5ｍ深さ70cmの大きさで堀り込み部に向って広がり、石組は長方体の石を壁際に２～３段に積み重ね底面には扁平な石を敷いている。堀り込み部は1.3ｍ×1.0ｍ深さ30cmで住居跡南壁に向って開き、底面は石組部に向って傾斜する。石組部と堀り込み部の埋土は、上部では堅くしまったロームが、底面近くでは炭化材の層や褐色の土が堆積する。

出土遺物

土器（第32図１・２　第36図40～43）

口縁部が内湾しゆるやかな波状を呈するもの（40・43）と外反するものがある（41・42）。胴部文様は曲線的な沈線によって縄文帯が区画され刺穴が施される。

炉埋設土器は(1)、やや外反ぎみの口縁からわずかに胴部がふくらむ大形の深鉢形土器でＬＲ縄文が付される。(2)は周溝内のピットから出土したもので頸部が長く、底部が上げ底の壺形土器である。

石器（第41図７～９、第42図20～33）

いずれも掻器状の石器であり、片面からの調整によって刃部を作り出す頁岩製のものである。磨石は全て凝灰岩製で、両面を磨いてある。(22)の石棒は住居跡床面から出土したものである。

６号住居跡（第12図）

調査区南側12号住居跡の東に位置し、７号土坑を埋めて作られている。平面形は長軸4.6ｍ、短軸3.0ｍの隅丸長方形を呈する。壁は、10～20cmで、しっかりしており、幅15cm、深さ10cmほどの周溝が壁直下よりもわずかに住居跡内側をめぐる。埋土は、黒褐色土を中心に褐色土、黒色土等が壁際に堆積する。床は全体的に堅く、明瞭であり、床面から土器が押しつぶされた状態で出土する。炉はないが住居跡西側で60cm四方に焼土の広がる部分がある。ピットで柱穴とわかるものはない。

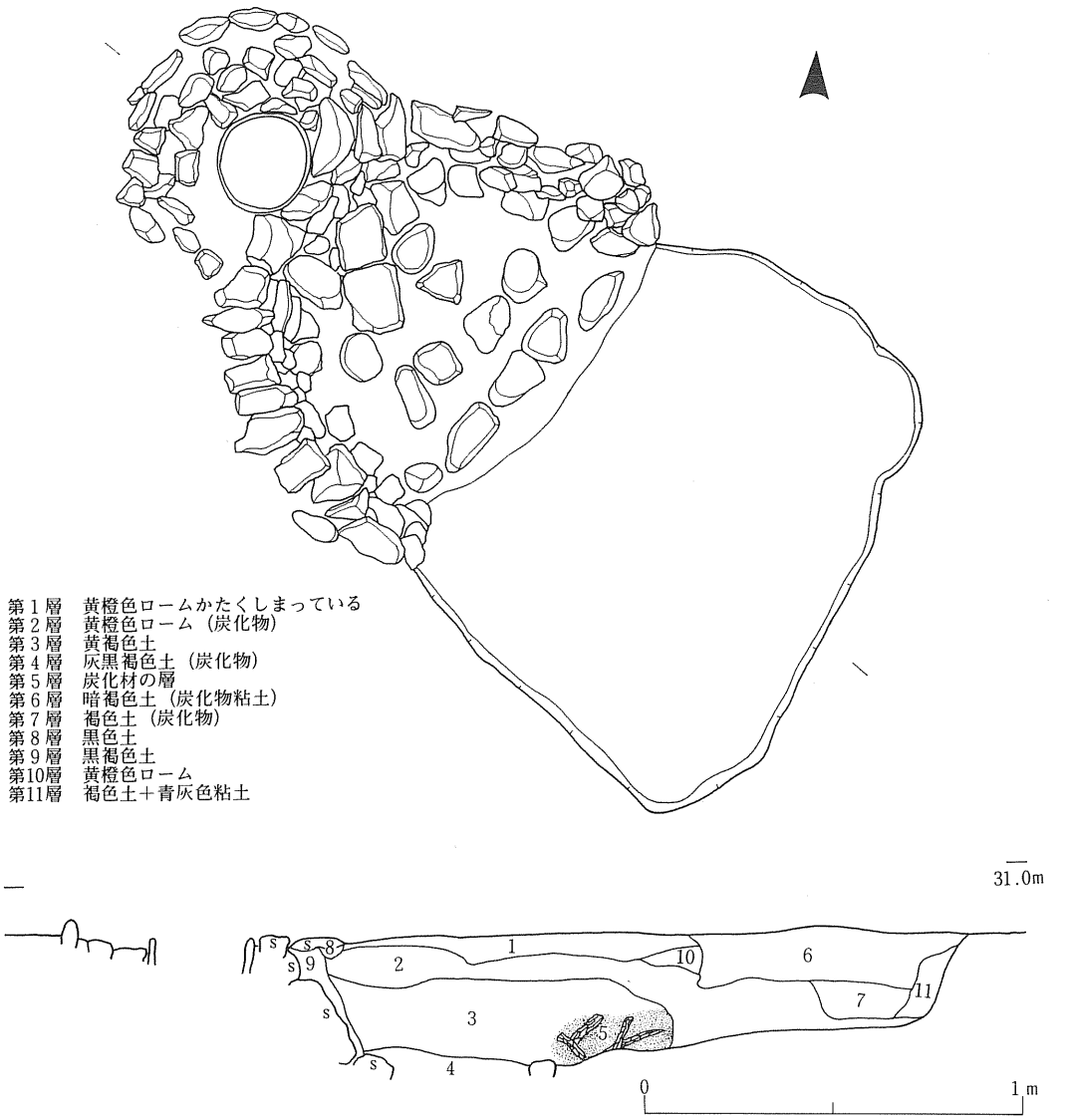
出土遺物

土器（第36図44～47）

曲線的な隆起線によって、縄文帯が区画され、刺突が施されるものもある。いずれも深鉢形土器であろう。

石器（第41図10、第42図24）

(10)は両側縁部に刃部を作り出す頁岩製の石器で、(24)は凝灰岩製の両面使用された凹石である。

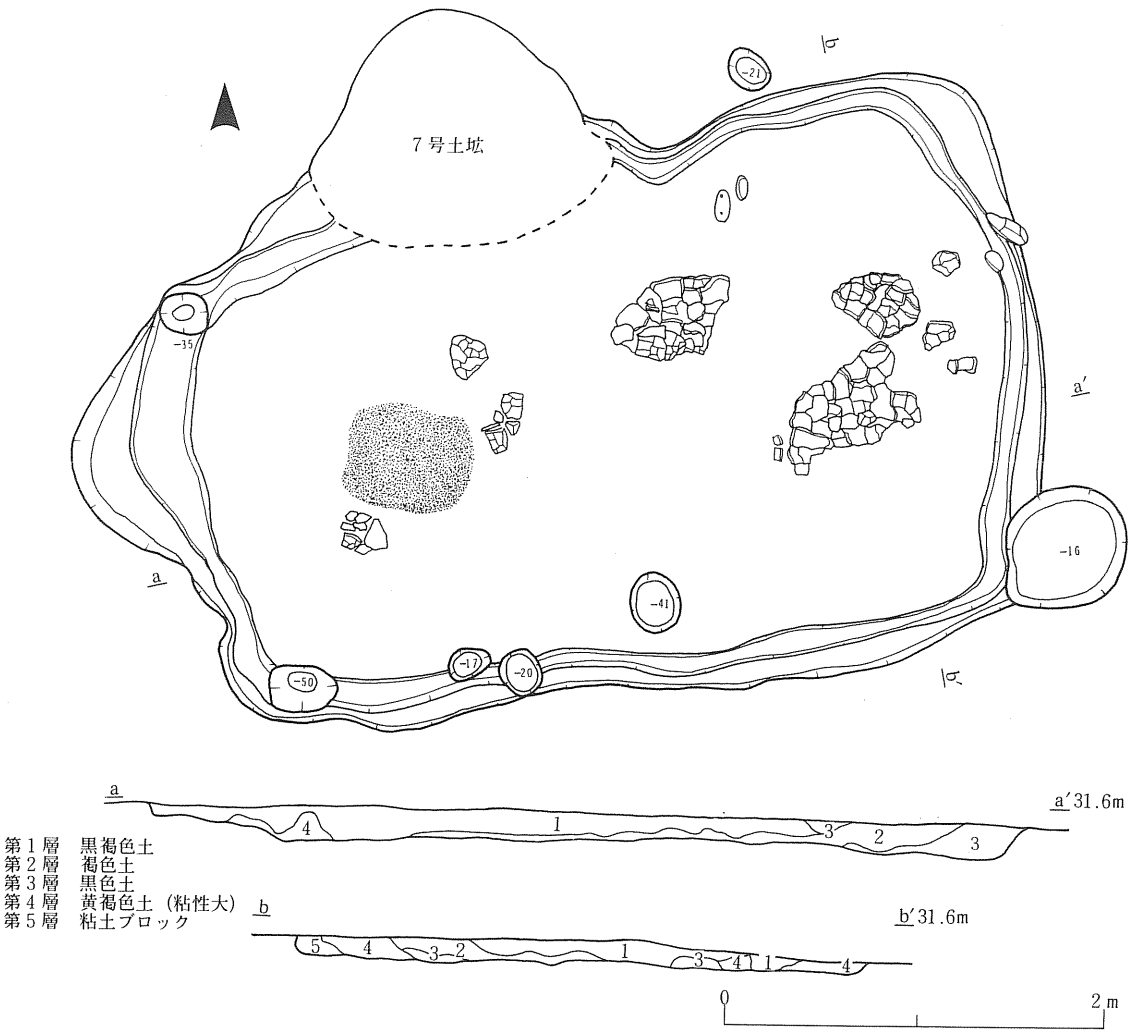


第11図　５号住居跡　炉

７号Ａ・Ｂ住居跡（第13図）

調査区中央よりやや南側に位置し、３号土坑によって切られており、二つの住居跡が重複する。

７号Ａ住居跡は、長軸3.6ｍ、短軸3.0ｍの楕円形を呈し、Ｂ住居跡よりも規模の小さな住居跡である。壁は高さ30cmほどで垂直に立ち上るが、北側では、ゆるやかに立ち上る。埋土は暗褐色土を中心に褐色土、黄褐色土等が堆積する。床は比較的堅く特に炉周辺は堅い。北側の床面からは磨石と凹石が並ぶように出土する。炉は土器埋設炉で北に径80cm深さ30cmの円形の堀り込みをもつ。ピットで柱穴と確認出来るものはない。



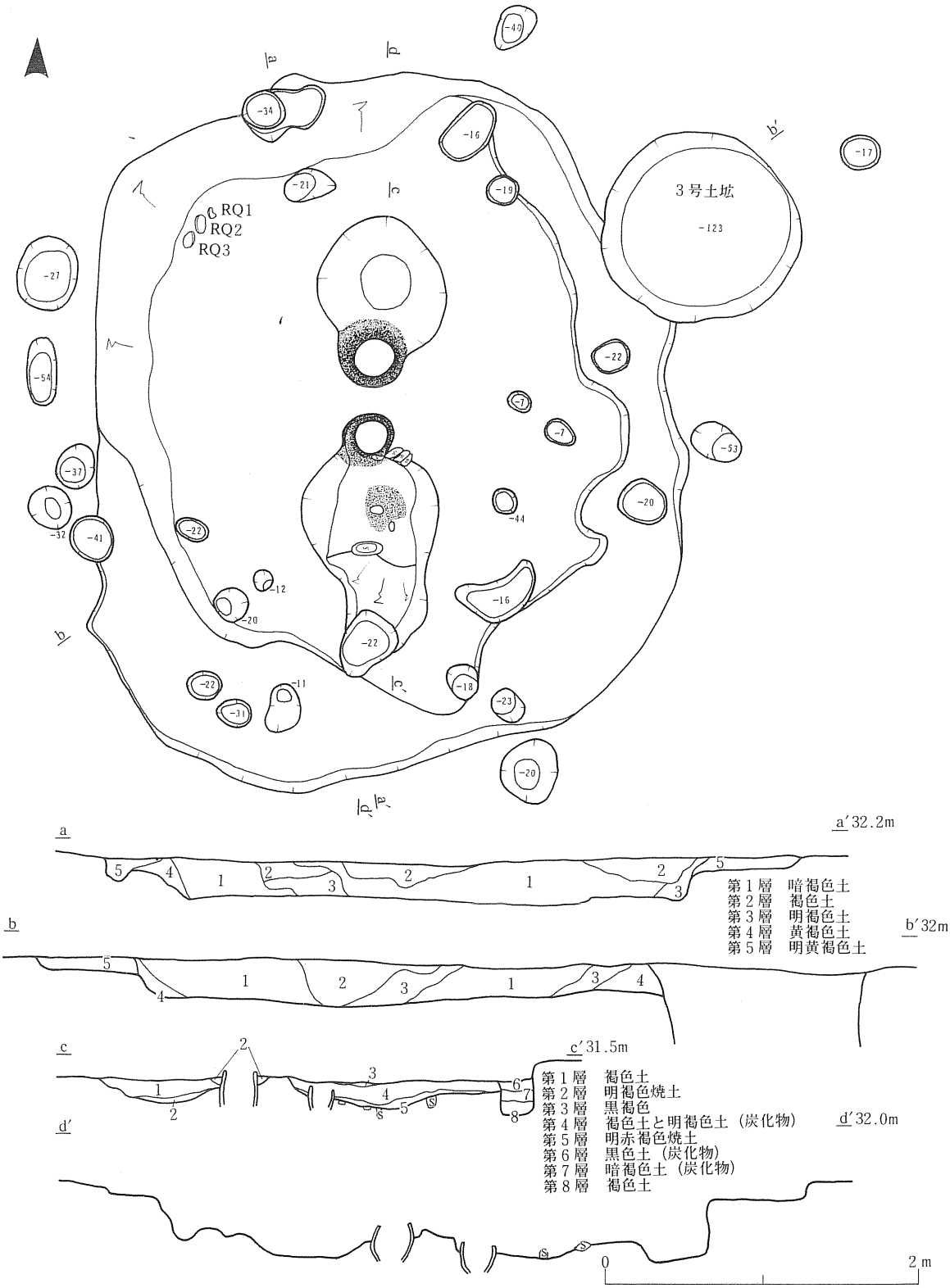
第12図　6号住居跡

7号B住居跡は、長軸4.5m、短軸3.8mで楕円形を呈する。壁は、残存部分で10cmほどの高さで埋土は壁際に明黄褐色土がある程度である。床は、A住居跡よりも軟らかく、炉はA住居跡の床面下にある土器埋設炉で、南側に楕円形の掘り込みをもつ、掘り込み部にみられる石の存在は石組の可能性をうかがわせる。

出土遺物

土器（第32図3・4、第36図48～58）

土器片は7号A住居跡埋土出土のものである。地文に縄文を施し、貼り付けによる細い粘土紐（以下細隆帯と呼ぶ）上に爪形文を施すもの、平縁で山形状を呈する口縁部から頸部ですぼまり、胴部に至る深鉢形土器で、口縁部文様帯に三角形の沈刻文や集合沈線状の沈線を施し、胴部には羽状縄文と綾繰文を施すもの、貼付けの隆帯が渦巻となるものや隆帯が縄文を区画するもの等がある。



第13図　7号A・B住居跡

Ａ住居跡炉埋設土器（第32図３）は内反する口縁からふくらみながら胴部に至るＬＲ縄文を施した深鉢形土器である。

Ｂ住居跡炉埋設土器（第32図４）は口縁部に指頭状の工具による円形の浅い刺突列がボタン状突起に垂下し、胴部との境にも同様の刺突列がめぐる。

石器（第42図25～32）

７号Ａ住居跡の床面から出土したもので、いづれも凝岩製である。

８号住居跡（第14図）

調査区西側に位置し長軸5.5ｍ、短軸3.2ｍほどの楕円形を呈する。壁は高さ10cmほどで垂直に立ち上るが南側では新しい溝によって切られている。埋土は褐色系の土が堆積する。床は堅くしまりがあり、炉は中心部70cm×50cmほどの楕円形の掘り込みがありこれに２～３個の石が伴う。ピットの中で、北西隅のものは柱穴であろう。

出土遺物

土器（第33図５、第37図66～69）

平縁で外反する口縁部をもつ深鉢であろう胴部文様は曲線的な広い沈線によって縄文帯が区画されるもの（59・60）垂下する３本の沈線間を磨消すもの（61・64）等がある。(5)は底部から胴部にかけては筒状で上部中央は鞍部となり、両端に口がある双口土器である。左右の口縁部は中央に向って切り込みがある。

９号住居跡（第15図）

調査区南側の斜面上に位置し５号土坑よりも新しい。又、プラン確認では検出出来なかったものの土層観察によって住居跡中央部にも新しい掘り込みがあることを確認している。住居跡平面形は４ｍ前後の円形と考えられるが、東と南側では壁を確認出来なかった。壁は北側で高さ60cmほどである。埋土は、残存部分では白色粘土、褐色系の土が堆積する。床は、西側では堅くしまっているが、炉を中心とした部分では下に10号土坑があるため50cmほど沈下している。炉も10号土坑のため保存状態は悪いがおそらく住居跡中軸線上に作られたものであろう。土器埋設石囲部と石組部からなる複式炉である。石囲部は40cm×30cm、石組部は75cm×60cmで南に向って広くなるが石組部底面に敷石がされたかどうかは把握出来なかった。ピットは、住居跡北西側の壁外にあり柱穴と考えられる。

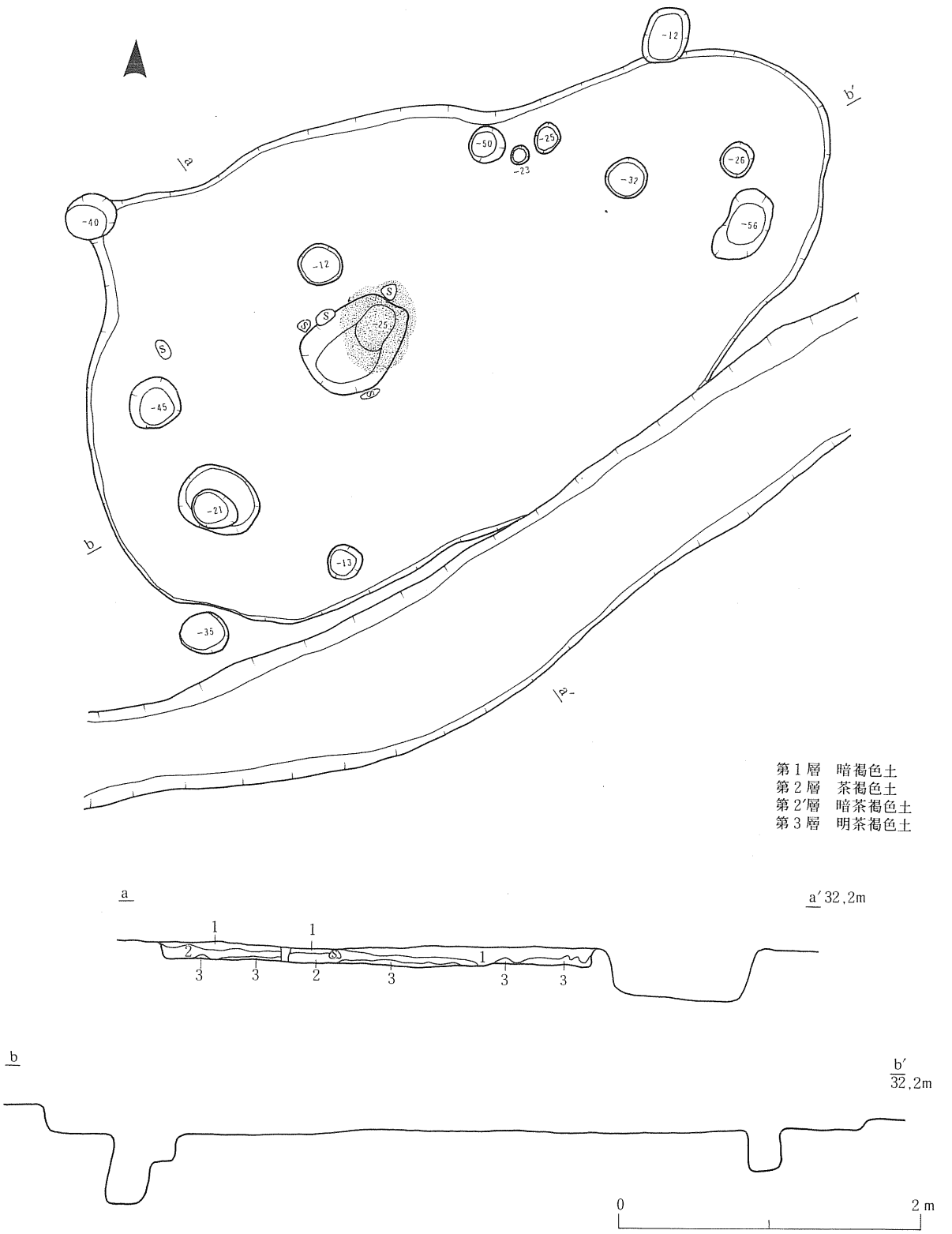
出土遺物

土器（第37図66～69）

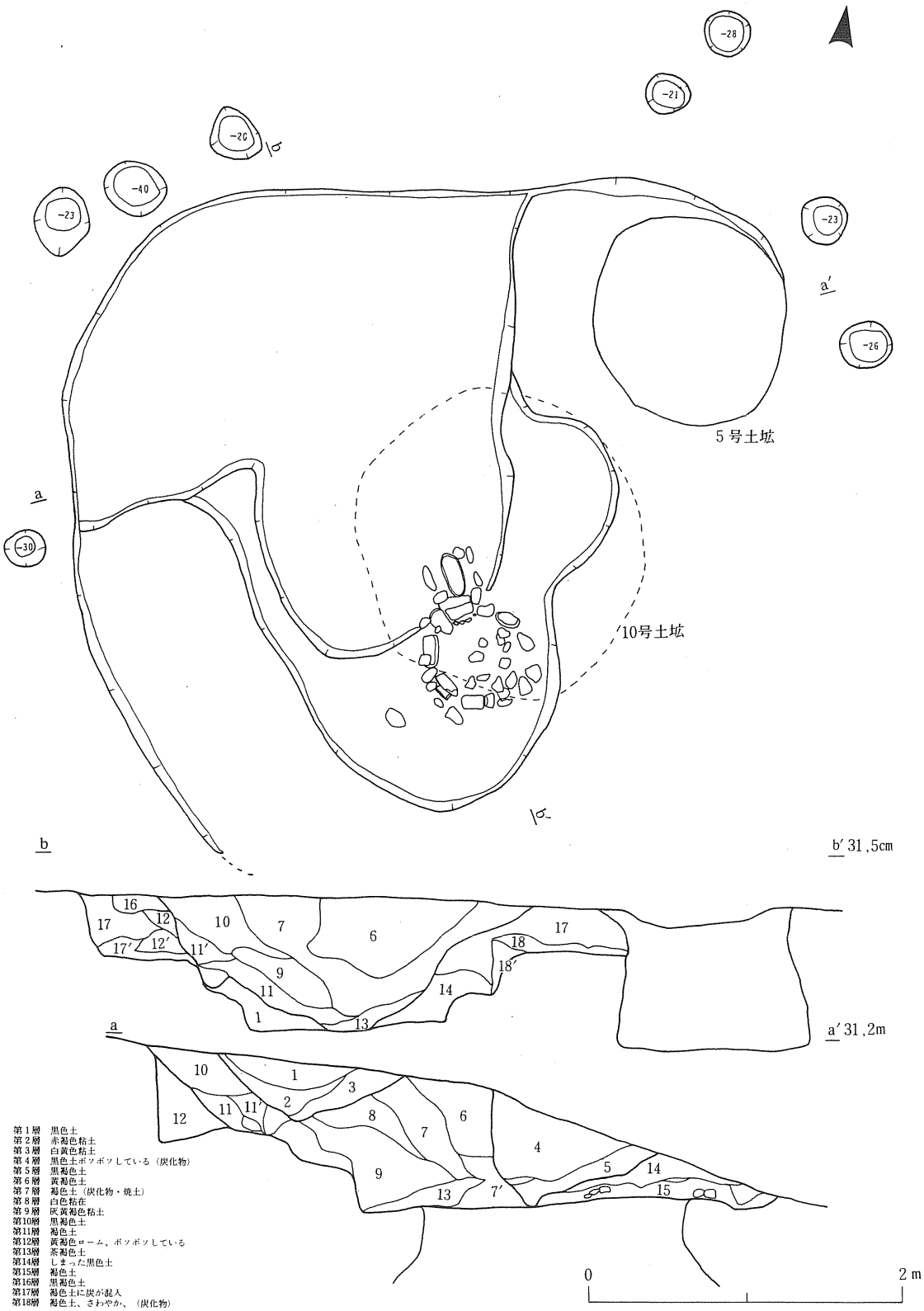
直立する口縁部で口唇部に太い隆帯を貼り付けたもの、縦位に条痕を施したものや、隆帯によって円形に区画した中に沈線を格子目状に施すものがある。

石器（第41図11・12）

縦型の石匙、掻器状の石器が出土している。


-12
-50
-25
-23
-32
-26
-56
-40
-12
-25
-45
-21
-13
-35
a
a'
b
b'
第1層　暗褐色土
第2層　茶褐色土
第2'層　暗茶褐色土
第3層　明茶褐色土
a
a' 32.2m
b
b'
32.2m
0
2m

第14図　8号住居跡


-28
-21
-20
-40
-23
-23
-26
-30
a
a′
b
b′
5号土坑
10号土坑
b′ 31.5cm
a′ 31.2m
0
2 m
第1層　黒色土
第2層　赤褐色粘土
第3層　白黄色粘土
第4層　黒色土ボソボソしている（炭化物）
第5層　黒褐色土
第6層　黄褐色土
第7層　褐色土（炭化物・焼土）
第8層　白色粘在
第9層　灰黄褐色粘土
第10層　黒褐色土
第11層　褐色土
第12層　黄褐色ローム、ボソボソしている
第13層　茶褐色土
第14層　しまった黒色土
第15層　褐色土
第16層　黒褐色土
第17層　褐色土に炭が混入
第18層　褐色土、さわやか、（炭化物）

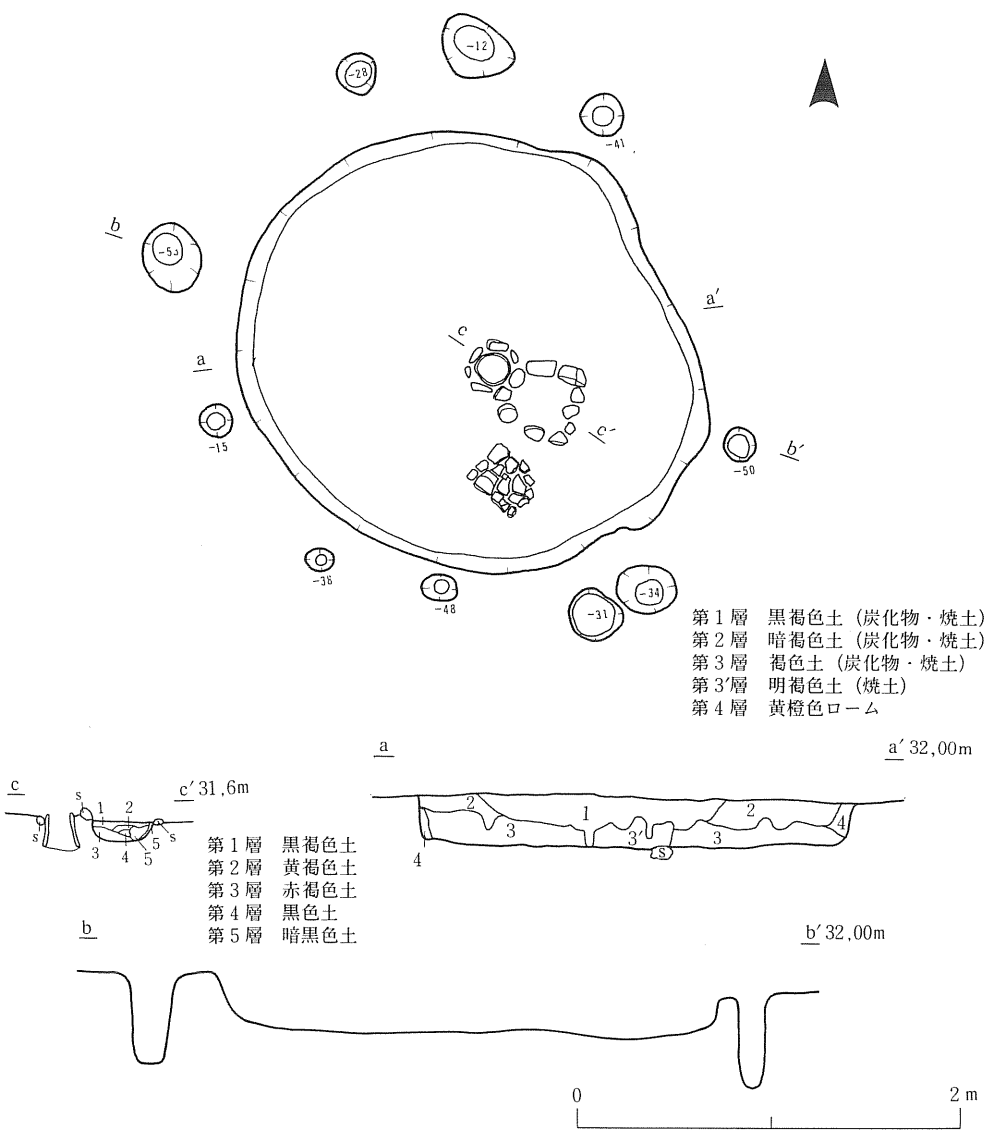
第15図　9号住居跡

10号住居跡（第16図）

調査区西側で１号土坑の南側に位置する。プランは径 2.5 mの円形を呈する。壁は高さ20cmで垂直に立ち上る。埋土は全体的に炭化物・焼土を含む褐色系の土で壁際にはロームブロックがみられる。床面は極めて堅くしまっており炉は土器埋設石囲部と石組部からなる複式炉である。埋設土器は倒立しており、それを石で囲む。石組も１重の単純なものである。ピットは壁外に径20cm深さ30～50cmものがあり柱穴となる。

出土遺物土器（第33図６・７）

(7)は外反する口縁部からほぼ垂直に胴部に至る深鉢形土器である。口縁部文様は刺突列があり、胴部とを沈線で画する。胴部文様は曲線的な沈線で横Ｓ字状の縄文帯を区画し、縄文帯の両端は入



第16図　10号住居跡

組文風になる。無文部は丁寧な磨消しが行われる。

炉埋設土器(6)は、ゆるやかな波状を呈し外反する口縁から胴部下半がふくらむ深鉢形土器である。文様は、沈線によって横S字状の縄文帯が画される。縄文帯の両端は波状頂点下で入組文風になる。胴部下半も沈線によってC字状文の未発達な縄文帯がある。

11号A・B住居跡（第17図）

6号住居跡東側に隣接する。

11号A住居跡は、B住居跡と重複しておりプランは長軸4m、短軸2.5mの楕円形を呈する。壁は西側では高さ25cmほどでほぼ垂直に立ち上るが西側ほど低くなりゆるやかな立ち上りをみせる。埋土は褐色系の土が堆積するピットは北側にあるが柱穴と判断出来なかった。炉はない。

11号B住居跡は、径3.0mの円形を呈し、壁は北側では高さ40cm、南側では30cmの高さで垂直に立ち上る。埋土は黒色土を中心に堆積する。床は堅くしまり炉はないが北側に床面の焼けた部分がある。ピットは壁際に沿っておりいずれも柱穴と考えられる。

出土遺物

土器（第33図8～9、第37図70～81）

11号A住居跡の土器（76～81）は、波状口縁を呈し、沈線で区画された縄文帯が横へ展開するもの、平縁で直立する口縁を有するもの等があり、土器片利用の円盤状土製品が2点出土している。（第33図9）は薄手で底部から大きく外に開く浅鉢形の土器であろう。

B住居跡出土の土器（第37図70～75）は外反する口縁が鋭く内側に折れるもので、口縁部・胴部上半には細隆帯上に爪形文を施し、口縁に巾広い粘土紐を貼付した擬宝珠状の突起を付したもの、あるいは、竹管状工具による沈線区画文、撚糸圧痕文、網目状撚糸文等がある。

石器（第41図13、第42図33）

一方の側辺にのみ刃部を作り出す石匙でツマミ部にアスファルトが付着したもの、凝灰岩の石錘が出土している。

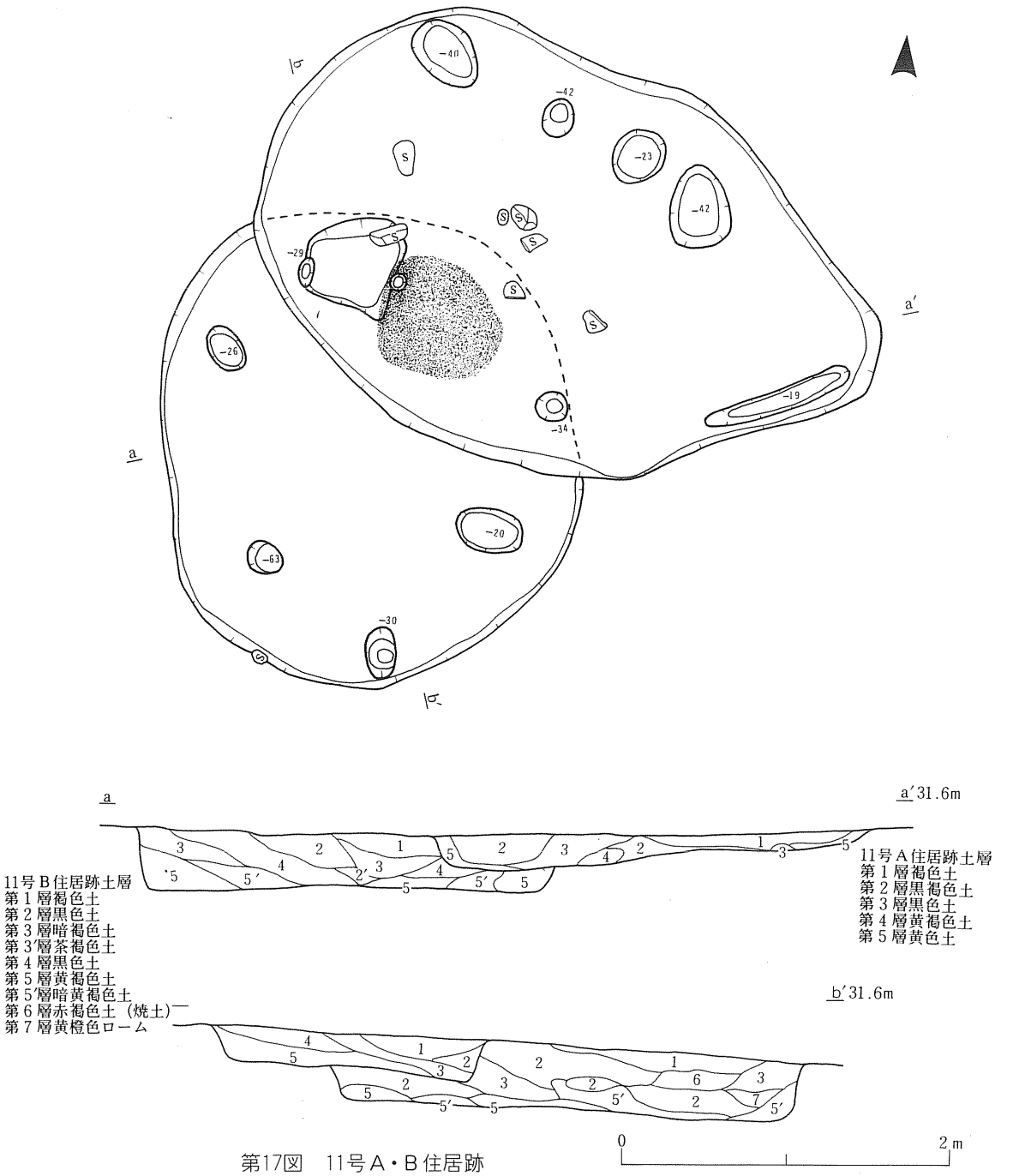
12号住居跡（第18図）

調査区の南側、6号住居跡の西側に隣接する。プランは径3.4mほどの円形を呈し、壁は、北から西南にかけて高さ25cmで垂直に立ち上るが、南側は、高さ10cmほどになる。埋土は暗褐色土や茶褐色土が中心に炭化物・焼土が混入して堆積する。床は全体的に堅くしまり、炉から離れて北側にも床の焼けた部分がある。炉は住居跡中軸線上に作られ埋設土器と石組部からなる複式炉である。埋設土器には石囲いは見られず、石組部は、50cm×60cm、深さ15cmの掘り込みに底面から掘り込み口まで石を組んだもので、南側に開くが、壁に接する掘り込み部はない。ピットは壁際に径25cm深さ12～30cmのものもあるが、深さ30cm前後のものが柱穴と考えられる。

出土遺物（第34図10・11、第38図82～85）

直立する口縁に刺突が付され、胴部文様は沈線と隆起線によって縄文帯が区画される。(11)は外反

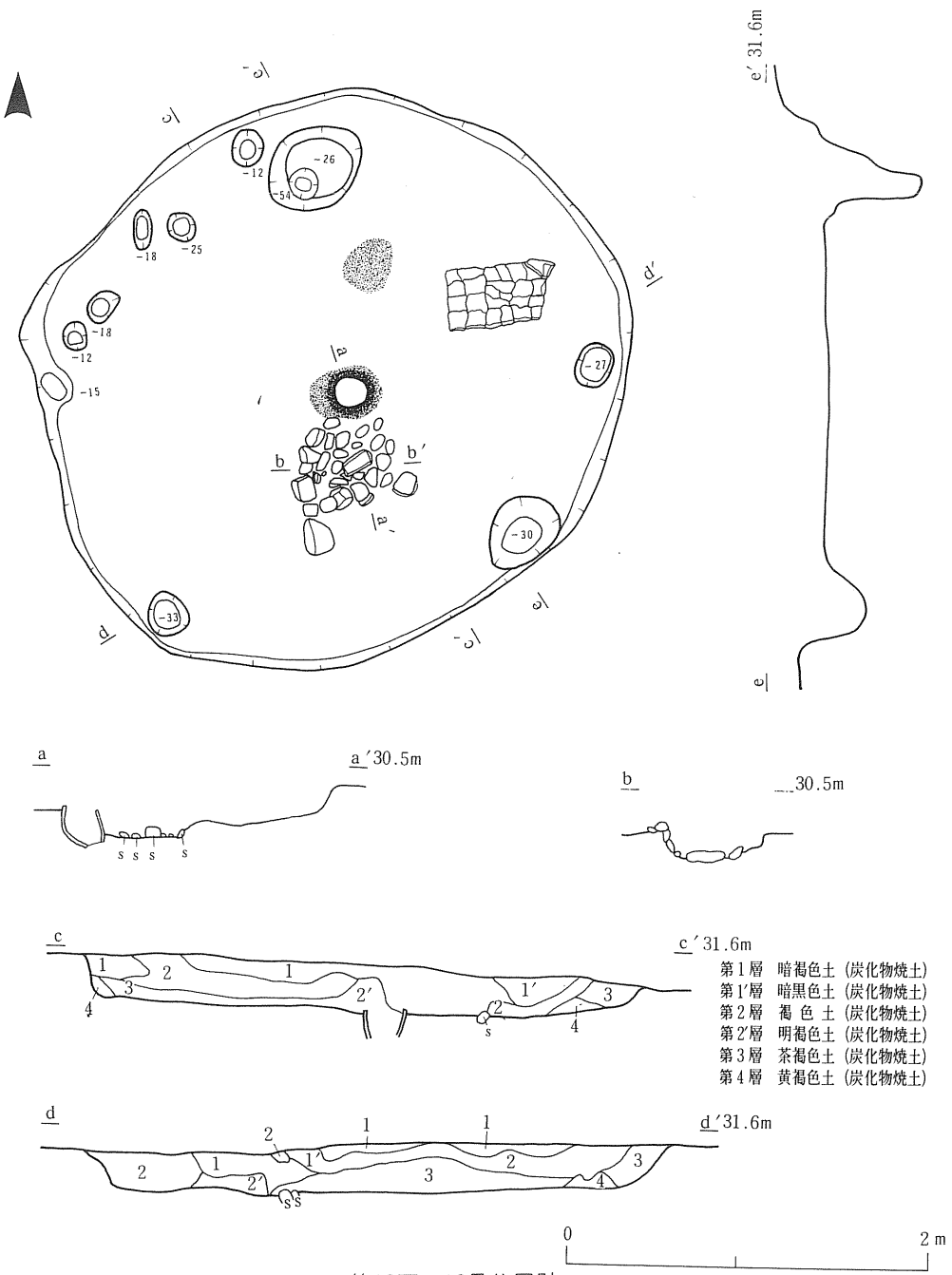
ぎみの口縁からわずかにふくらみながら胴部にいたる大形の深鉢形土器で、胴部はＬＲ縄文を施文するが、器面の$\frac{1}{4}$には、ＬＲとＲＬ原体を縦位回転して羽状縄文を施す。(10)の埋設土器は、外反する口縁からふくらむ胴部にいたる深鉢形土器で、文様は胴部上半を、半Ｃ字状に沈線で区画し、磨消したものである。



第17図　11号Ａ・Ｂ住居跡

13号住居跡（第19図）

調査区中央部やや南側、７号住居の西に隣接する。プランは長軸5.9ｍ、短軸2.5ｍの長楕円形を呈する。壁は高さ10cmほどで東側はほぼ垂直に立ち上るが西から南側の壁はゆるやかに立ち上る。埋土は、暗褐色土を中心に壁際には明褐色土や黒褐色等が堆積する。床は北側では堅いが、南側では軟らかい。北側の一部が焼けている。ピットは壁際に確認されているが、柱穴と考えられるのは



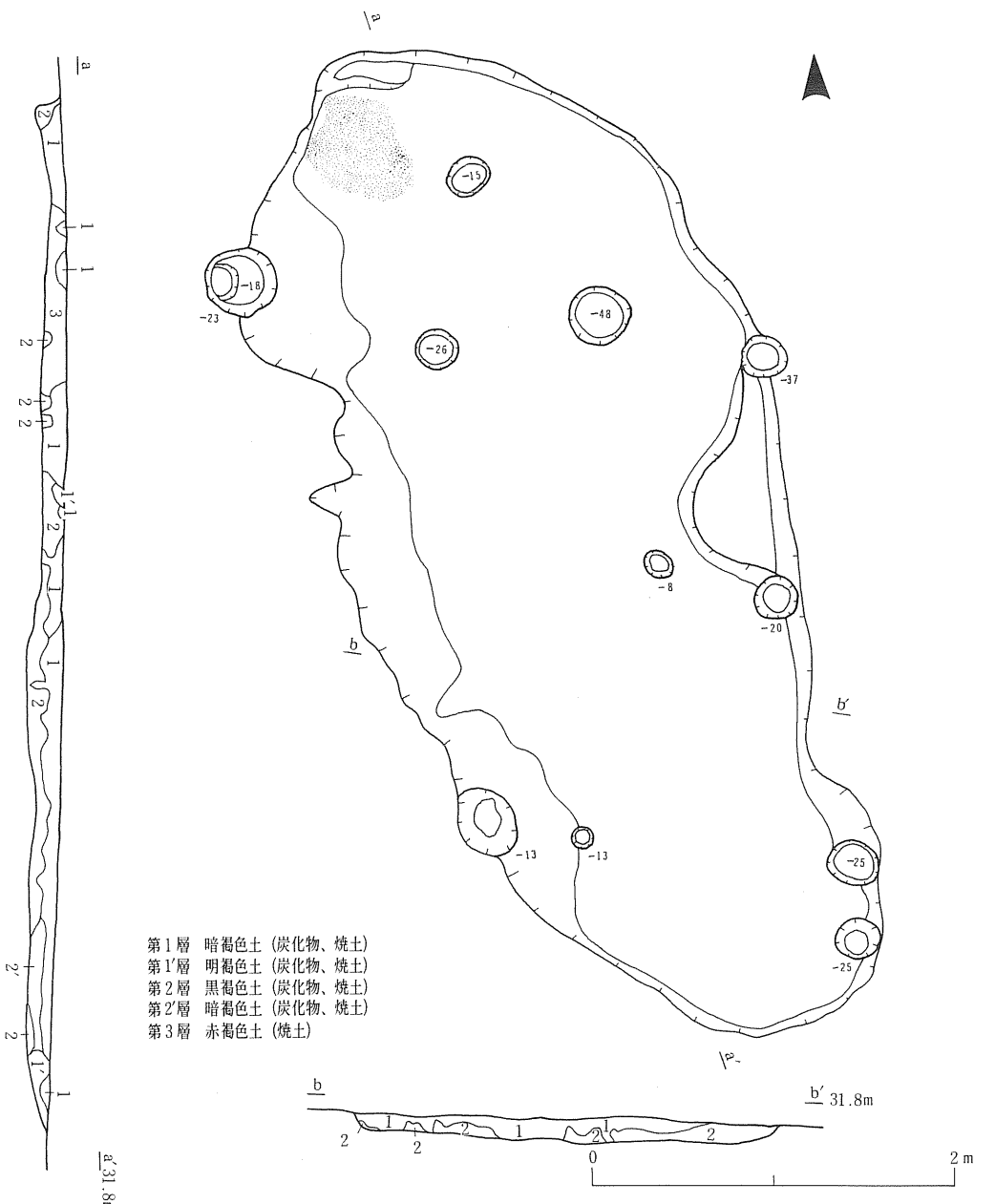
第18図　12号住居跡

深さ20cm前後であろうか、炉はない。

出土遺物

土器（第38図36～97）

縄文を地文として、細隆帯上に爪形文を施すもの、地文の縄文がないもの等がある。89は直立し肥厚する口縁部から胴部にかけて急に外に張り出す。口縁部に球状の突起が付き突起の下に橋状把手が貼付される。口縁部文様帯は爪形文のある半隆起線文があり、中間には細い粘土紐を継ぎなが



第19図　13号住居跡

ら小さな鋸歯状文を作る。92～97は、沈線によって区画縄文帯が描かれる。

14号住居跡（第20図）

調査区の北端に位置する。壁は高さ10cmほどで垂直に立ち上る。埋土は、黒色土が入り、壁際には黄色土ロームがブロック状に堆積する。床はしまりがなく東に向って傾斜する。ピットも炉もない。

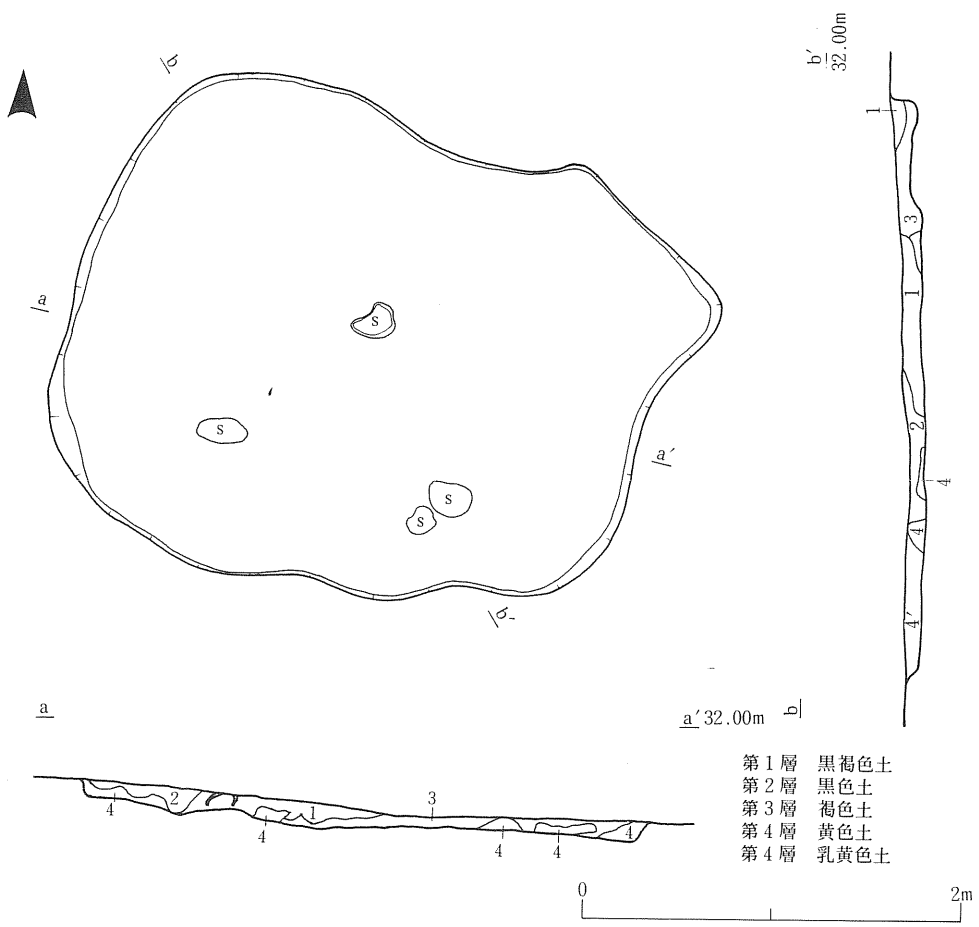
出土遺物

土器（第38図98・99）

沈線で区画された縄文帯や刺突が施される土器である。

15号住居跡（第21図）

調査区東南側、５号住居跡の西に隣接し北側では９号土坑に切られている。プランは長軸4.4ｍ短軸3.5ｍの不整円形を呈し、壁は高さ15cmほどで垂直に立ち上るが東側ではゆるやかに立ち上がる。床は比較的軟らかく炉もないが中央部で東西に径20cm前後、深さが20～40cmのピットが並ぶ。



第20図　14号住居跡

出土遺物

土器（第38図100・101）

曲線的な沈線によって縄文帯と磨消しによる無文部とに区画される。

16号住居跡（第22図）

調査区中央部北側17号住居跡東に隣接する。プランは径2.5ｍの円形を呈し、壁は高さ10cmほどで垂直に立ち上る。埋土は褐色系の土を中心に堆積する。床は堅くしまっており中央部に土器埋設炉がある。ピットは壁外の西側に径20cm前後のものがあり柱穴になるものと考えられる。

出土遺物

土器（第34図12・14、第38図102～109、第39図110～120）

直立する口縁部に撚糸圧痕文を施し、三条の刺突列をもち、胴部にＬＲとＲＬの結束羽状縄文を施すもの（102・103・107）。外反する口縁部が一度頸部ですぼみ胴部でふくらみをもち、口縁部には沈線で幾何学的な文様を施すもの（104）。口縁部がく字状になり、口唇部に撚糸圧痕文様帯には半截竹管状工具による格子目状文を施し、胴部との境の貼付による隆帯には撚糸圧痕文を施すもので胴部以下には縄文を付した後縦方向に沈線を引くもの（105・106）がある。（110）は肥厚し内湾する口縁部に隆帯と撚糸圧痕文を施すもので、17号住居跡出土の土器（第39図123）と同一個体である。（111～120）は曲線的な沈線、隆起線などで縄文帯と無文部を区画するものである。

埋設土器（第34図12）は、内湾する口縁部から胴部・底部に至るキャリパー形の土器である。口縁部には外反する４つの山形状の突起が付き、突起下には渦巻状に隆帯を付し、渦巻間をゆるやかな波状を呈す隆帯を施し、隆帯に沿って撚糸圧痕文を付す。胴部にはＲＬ縄文を付し、縦方向に磨消しを行う。

17号住居跡（第23図）

調査区中央部北側で16号住居跡西側に位置する。プランは長軸4.0ｍ、短軸3.4ｍの楕円形を呈し壁は高さ10cm前後で垂直に立ち上る。埋土は、褐色土や黄褐色土が堆積する。床は比較的堅く、炉は中央部で土器埋設炉である。ピットは多数検出されたが、主柱穴と考えられものは深さ20～45cmほどのものであろう。又、壁際の径10cm、深さ10cmの小ピットは支柱穴であろうか。

出土遺物

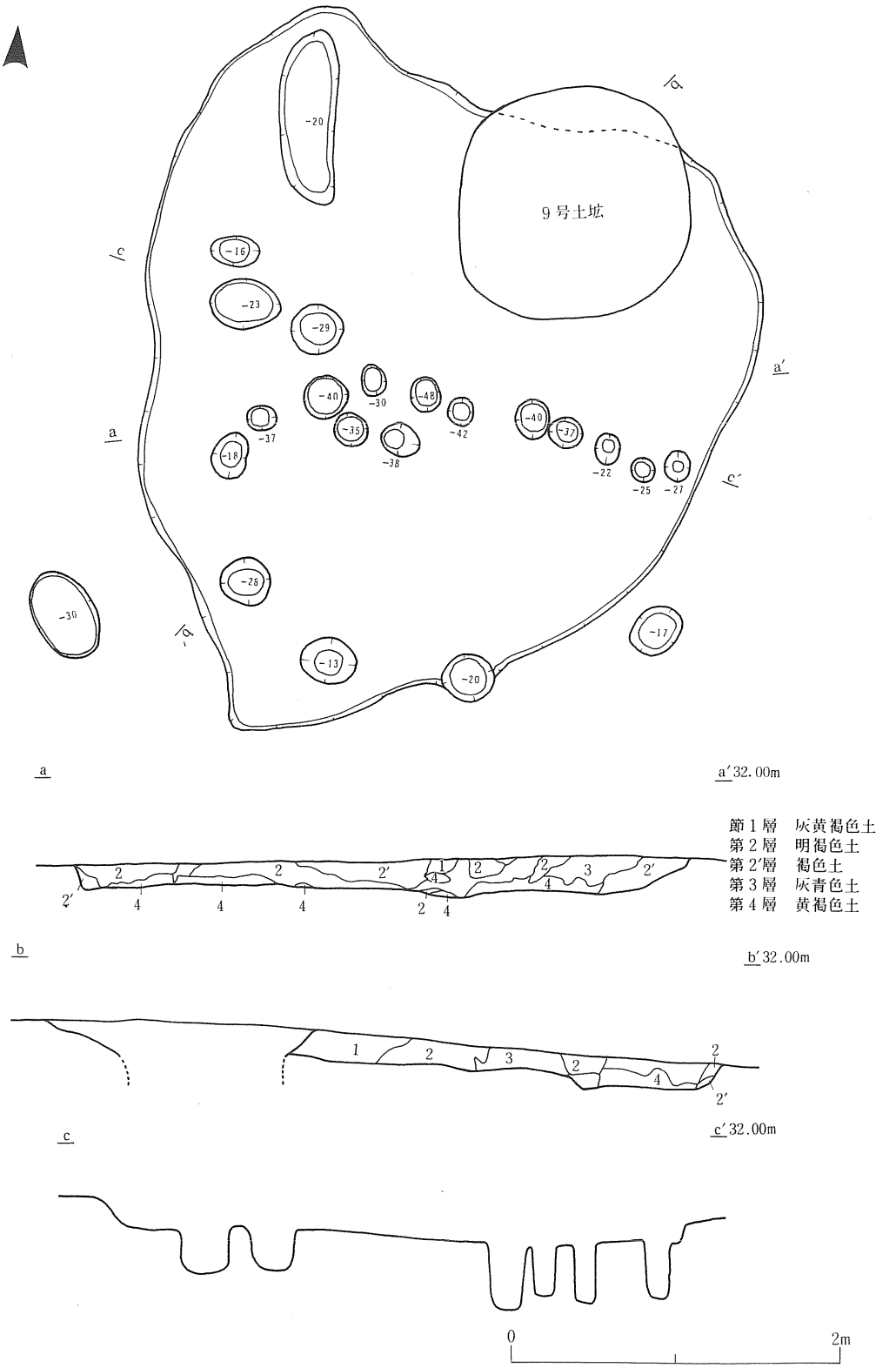
土器（第39図121～132）

細隆帯を同心円状に貼付するもの（121～122）口縁部に撚糸圧痕文を施すもの（123・124）、羽状縄文、あるいは沈線で胴部に文様を描くもの等がある。

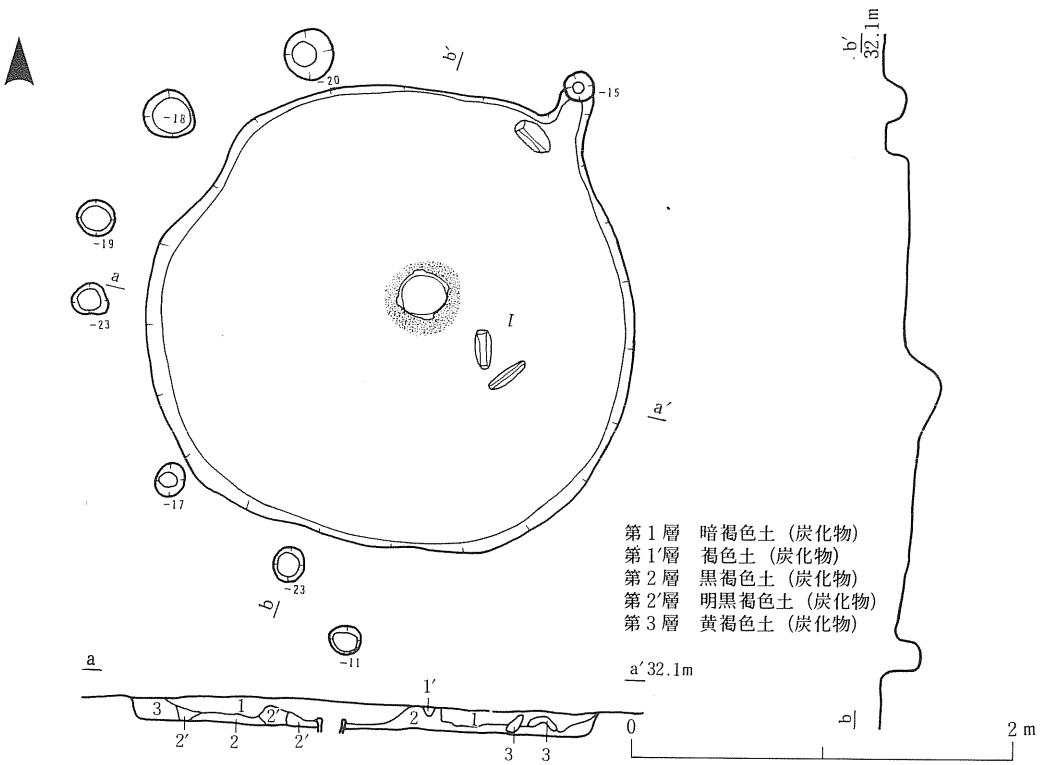
炉埋設土器は内湾する口縁部から胴部に至るキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様帯は、貼付された隆帯に沿って撚糸圧痕文を付す。胴部には縄文と綾繰文が施される。

石器（第41図14）

掻器状の石器である。


9号土坑
a
a′
b
b′
c
c′
-20
-16
-23
-29
-40
-30
-48
-42
-40
-37
-37
-35
-38
-18
-22
-25
-27
-26
-30
-13
-20
-17
a
a′32.00m
節1層　灰黄褐色土
第2層　明褐色土
第2層　褐色土
第3層　灰青色土
第4層　黄褐色土
b
b′32.00m
c
c′32.00m
0
2m

第21図　15号住居跡



第22図　16号住居跡

土坑

1号土坑（第24図）

調査区東側、10号住居跡の北に位置し、プランは口径1.8ｍの円形を呈し、深さ25cmで径80cmの頸部に達し、深さ65cmで径1ｍの底面に至る袋状の土坑である。埋土は褐色系の土が炭化物・焼土を含んで堆積している。土坑の周囲には深さ30cmほどのピットがある。

出土遺物

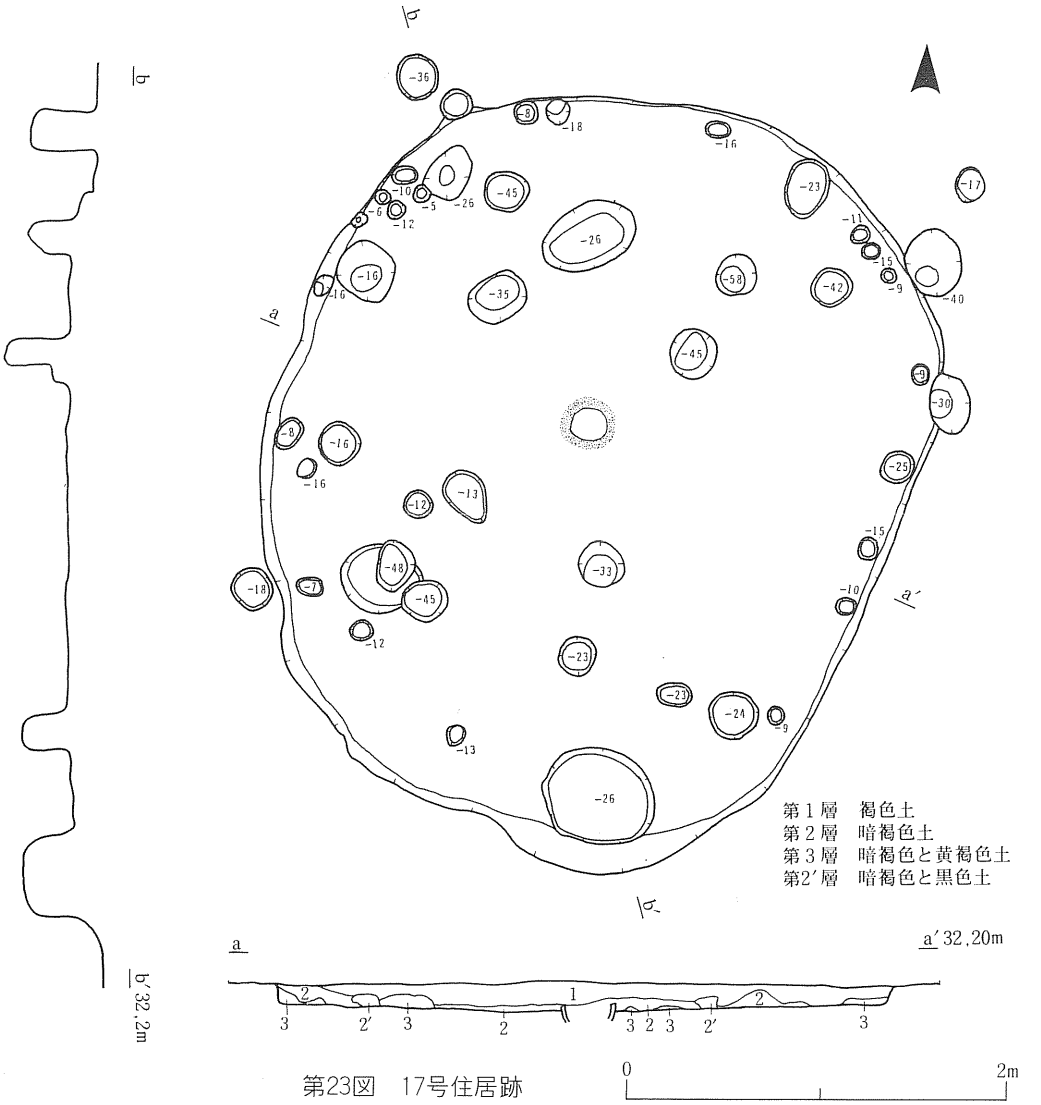
土器は細片だけで図示しなかった。

石器（第41図15・16）

15は扁平な磨製石斧で刃部の欠損しているものである。16は横型石匙である。

3号土坑（第25図）

調査区中央部やや西側、7号住居跡を切っており、プランは口径1.5ｍの円形を呈し、わずかにすぼまりながら深さ1.2ｍで径1.1ｍの底面に達する。埋土は褐色系の土が堆積する。壁際には壁の崩壊土と思われるロームブロックが入りこむ。土坑周囲のピットは深さ20cm～40cmほどのものである。出土遺物はない。



第23図　17号住居跡

出土遺物

土器（第40図133～137）

地文である縄文に細隆帯を貼付し、それに爪形文を付するもの、口縁部文様帯に沈線を斜めに引くもの、木目状撚糸文を施文後、細隆帯を幾何学的に貼付するものがある。

４号土坑（第26図）

調査区東側、３号住居跡の床面下にある。プランは口径2.0ｍ×1.2ｍの楕円形を呈し、深さ20cmでわずかにくびれ、深さ1.3ｍで、2.5ｍ×1.8ｍの楕円形の底面に達する袋状の土坑である。埋土は黒褐色土と堅くしまる明褐色土が中心となり３号住居構築時に埋められたものである。

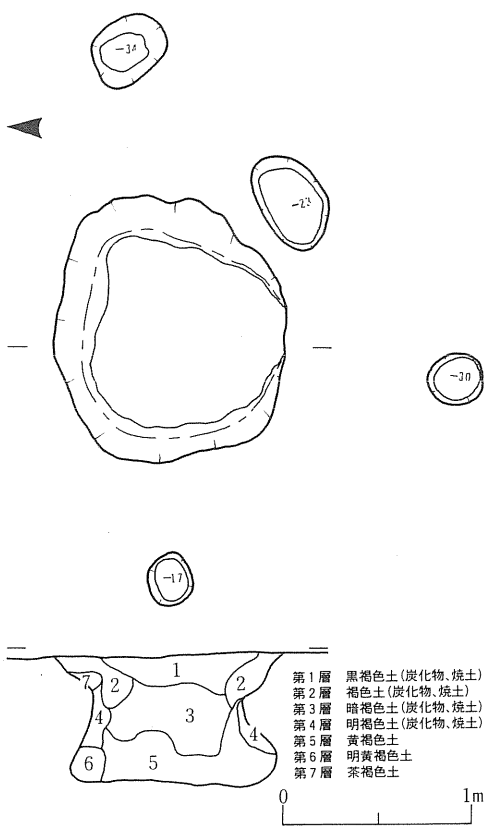
出土遺物

土器（第40図138～141）

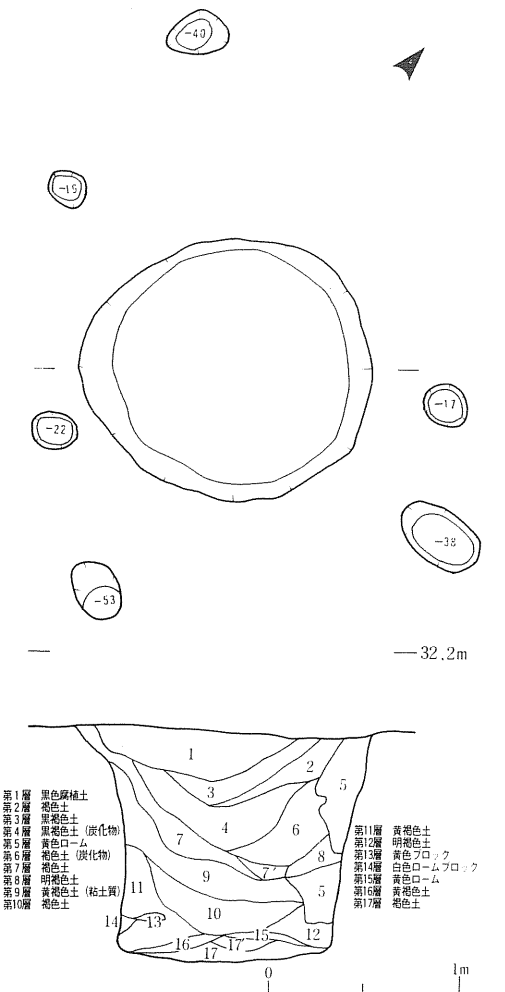
口縁部が内湾し、沈線で縄文帯を区画するものや竹管状工具による刺突が行われるものがある。

5号土坑（第27図）

調査区の南側斜面、9号住居跡の東側に位置し、プランは口径1.2ｍの円形を呈し、深さ15cmほどで径1.0ｍの頸部に至りさらに深さ70cmで径1.1ｍの円形の底面に達する袋状土坑である。埋土は各層がレンズ状に堆積し、壁際には、崩壊したロームブロックがみられる土坑外周東側には深さ20cm前後のピットが並ぶ。



第24図　1号土坑



第25図　3号土坑

出土遺物

土器（第40図142～144）

やや外反ぎみの口縁部が無文となるもの、木目状撚糸文が施されるものがある。

6号土坑（第28図）

調査区中央部の南西、7号住居跡の北側に位置する。口径1.1ｍの円形を呈し、深さ50cmで径70cmの頸部に達し、さらに深さ1.2ｍで径1.5ｍの底面に達するフラスコ状の土坑である。埋土は黒色土や黄褐色ロームが厚く堆積する。土坑東西にピットがある。

出土遺物

土器（第40図145～151）

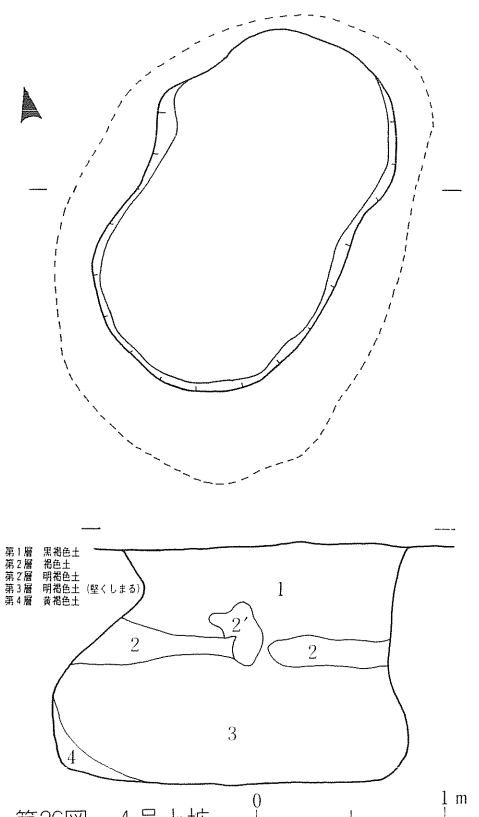
口縁部が肥厚し、直線的に胴部に至るものや外反する口縁部が鋭く折れて頸部に至るもの等があり、細隆帯を横走させその上に爪形文を施している。145は大きく丸くふくらむ口縁部に花弁状の突起を付けたもので縄文施文後、半隆起線を施すものである。

石器（第41図17・18）

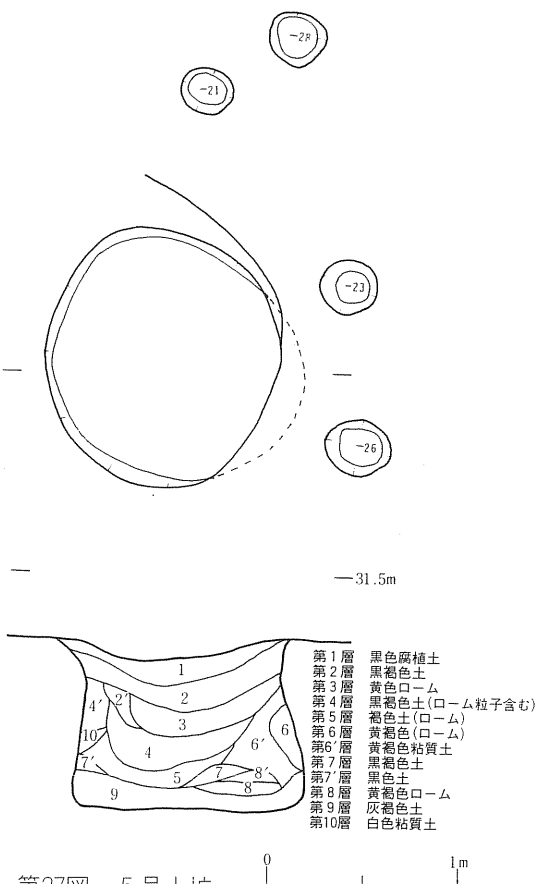
掻器状の石器と縦型石匙である。両者とも片面調整によって刃部を作り出す。

7号土坑（第29図）

調査区南側で、6号住居跡より古い。



第26図　4号土坑



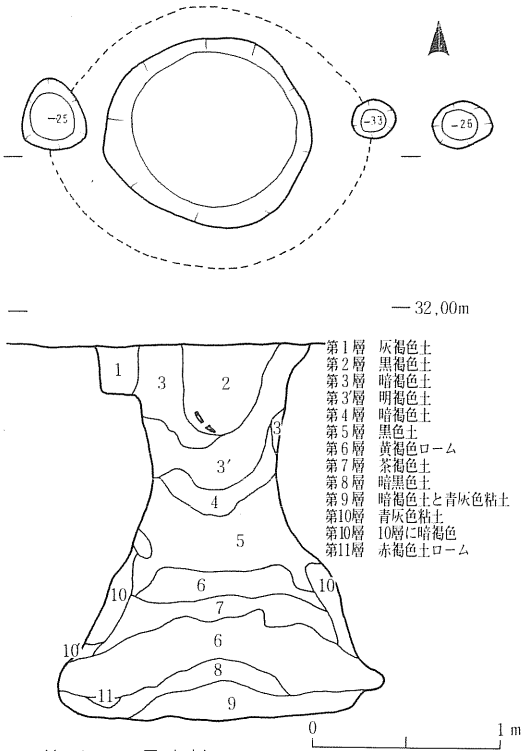
第27図　5号土坑

口径1.5mの円形で、深さ30cmほどでわずかにくびれ、深さ1.3mで径2.0mの底面に達する袋状の土坑である。埋土は上部に黄色ロームが厚く堆積し、11号住居構築時にうめられたものと考えられる。

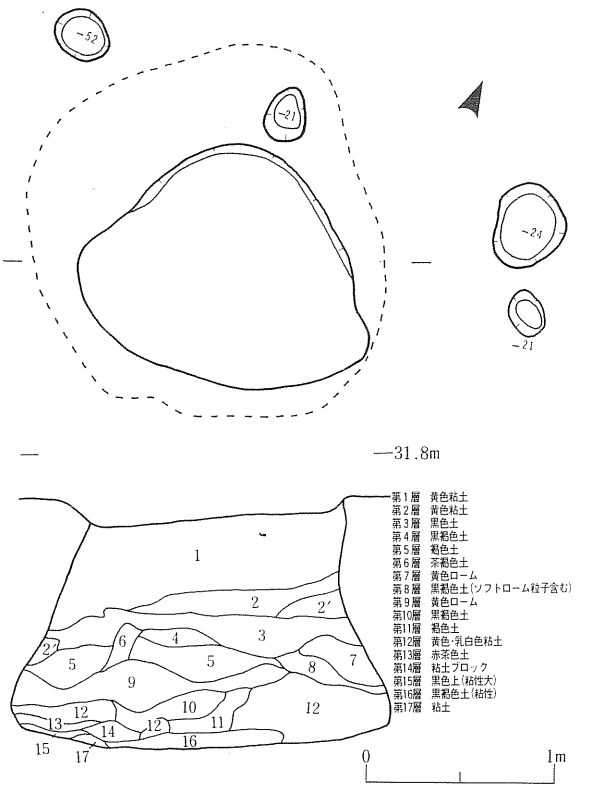
出土遺物

土器（第40図152～160）

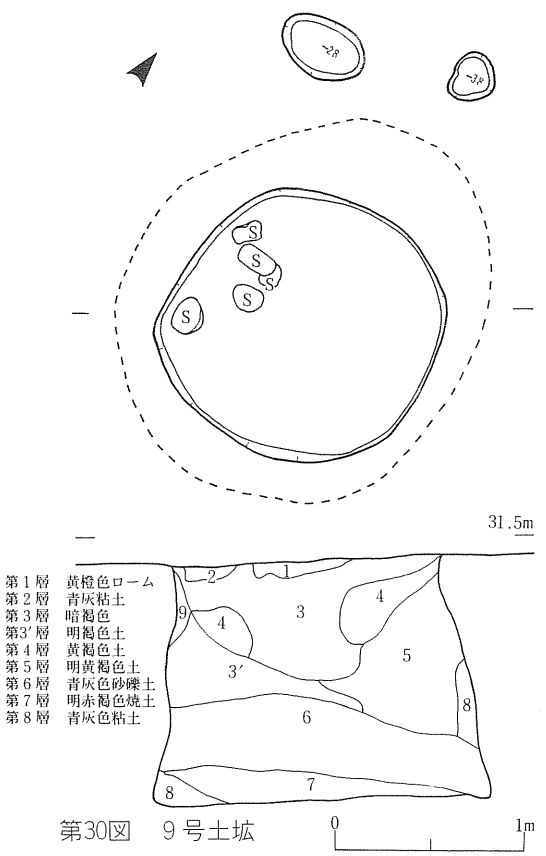
細隆帯を横走、波状、あるいは渦巻状にしてその上に爪形文を施したものがある。（152）は内湾する口縁部に突起を付し、細隆帯を横ないしは波状に貼付する。（156・157）は細隆帯上に爪形文を施しそれを底部付近まで施す浅鉢形土器である。



第28　6号土坑



第29図　7号土坑



第30図　9号土坑

9号土坑（第30図）

調査区の南東、15号住居跡を切っている。口径は1.5mの円形を呈し、深さ1.3mで径1.7mの底面に達する袋状の土坑である。埋土は下部に焼土、青灰色砂礫土が堆積する。ピットが北側にある。

出土遺物（第40図158～160）

細隆帯上に爪形を付すもの、円形の刺突のあるもの等がある。

10号土坑（第31図）

調査区南側の斜面、9号住居跡の炉の下にある。プランは口径1.8mの円形を呈し、深さ40cmで、径1.5mの頸部に至り、さらに外にふくらみながら深さ2.2mで径1.7mの底面に達する。最奥部の径は2.7mもある典型的な大形の袋状土坑である。

出土遺物

土器（第40図161～165）

半截竹管状工具による沈線文、細隆帯を貼付したもの、細隆帯と沈線によって縄文帯を画するものがある。

※２号土坑、８号土坑は現代の攪乱穴であったので除外してある。

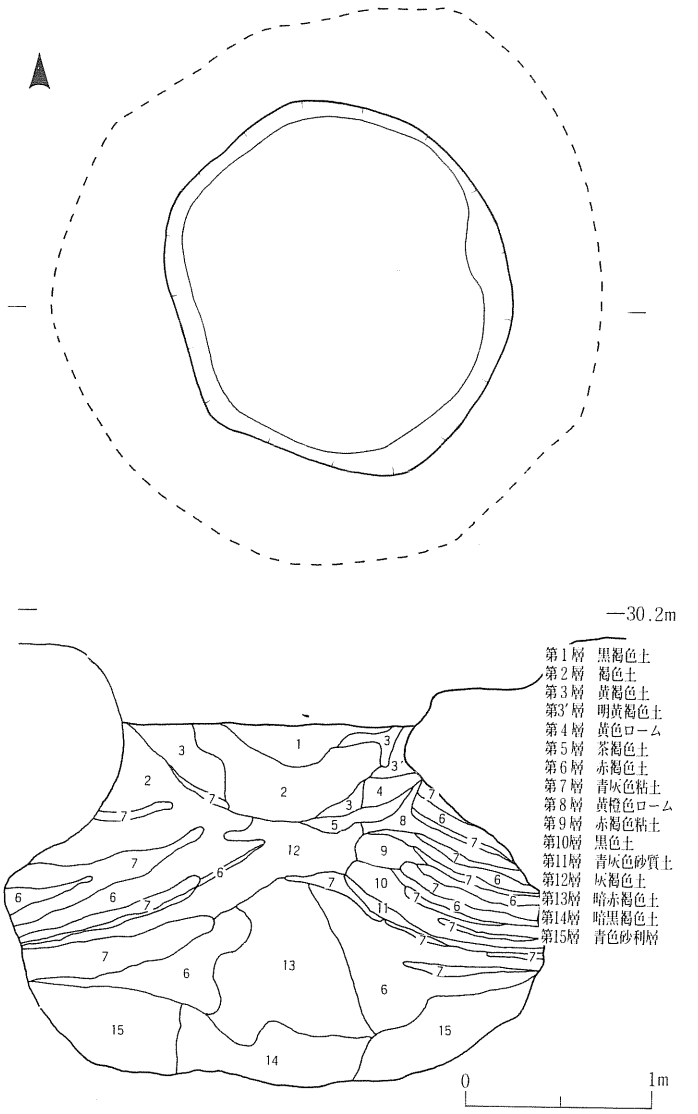
遺構外出土遺物

土器

遺構外出土の土器を施文様から次のように分類した。

１類（第43図166～185、第48図317～325）

口縁部文様帯に撚糸圧痕文を施し胴部には木目状撚糸文や羽状縄文が施されるものである。口縁部はほぼ垂直に立ち上り、胴部も垂直に底部に至るものであろう。口縁部の撚糸圧痕又は、３～４条の横走するものや、菱形に付される。（166～169）には口唇部にも縄文が押圧される。口縁部文様帯と胴部の境には細くて低い隆帯がありそれに刺突や縄文の押圧が行われる。

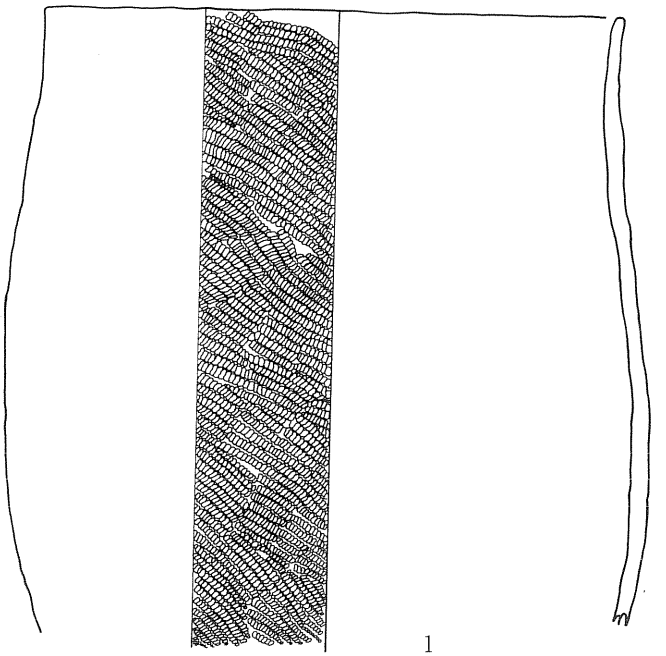


第31図　10号土坑

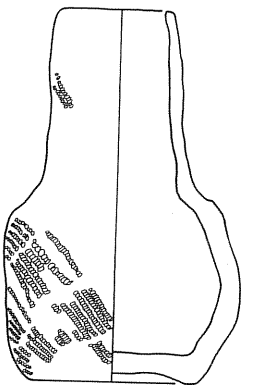
２類（第43図186～193、第44図194～208・210）

細い粘土紐を貼付し（細隆帯）爪形文を施すもので口縁部が内側に直角に折れるもので、そこにも細隆帯上に爪形文が付される。これら土器はａ、無地に細隆帯と爪形文を施し、細隆帯は渦巻状や大きな鋸歯状に貼付されるもの（第43図186～189、191～193）、ｂ、地文の縄文上に細隆帯を貼付するもので、横走斜走する２～３条１組の細隆帯は、ａの細隆帯もりも太く隆帯間も広くなる。ｃ、縄文を地文とする点はｂと同じだが、鋸歯状に付された細隆帯に爪形文をもたないものである。鋸歯状の細隆帯は短かな粘土紐の両端を継ぎながら貼付される。

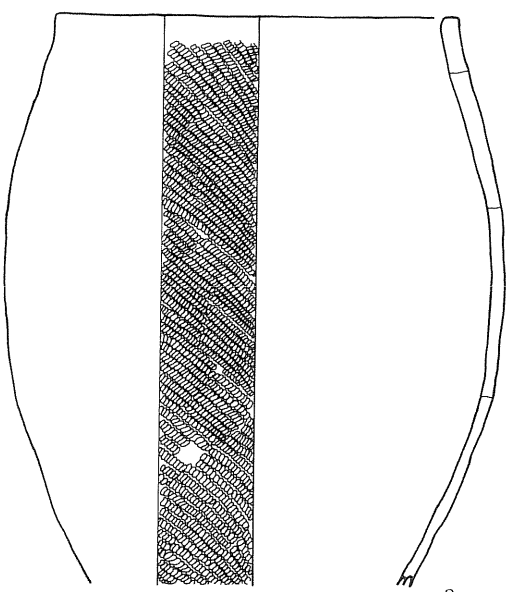
３類（第44図212～219、第45図220～225・227）



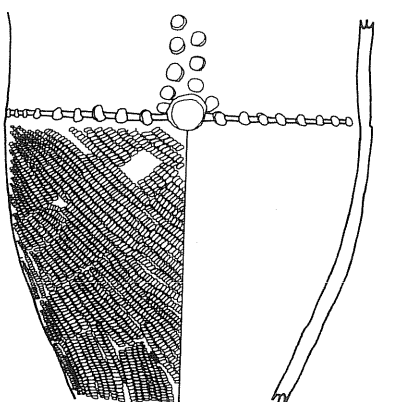
1



2



3



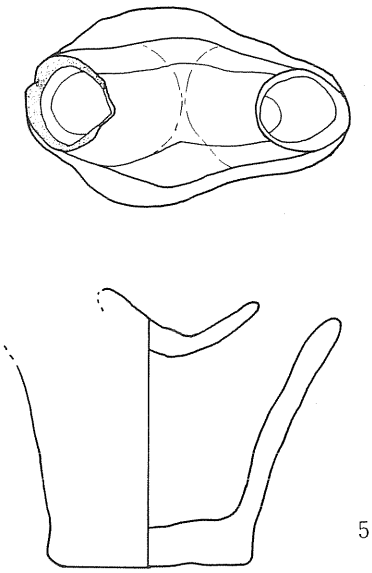
4

1．５号住居跡、炉埋設土器
2．５号住居跡、周溝内ピット
3．７号住居跡、炉埋設土器
4．７号住居跡、炉埋設土器

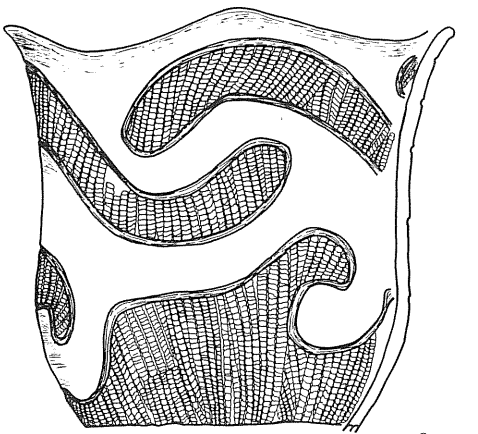
（2は $s=\frac{1}{2}$）

0　10cm

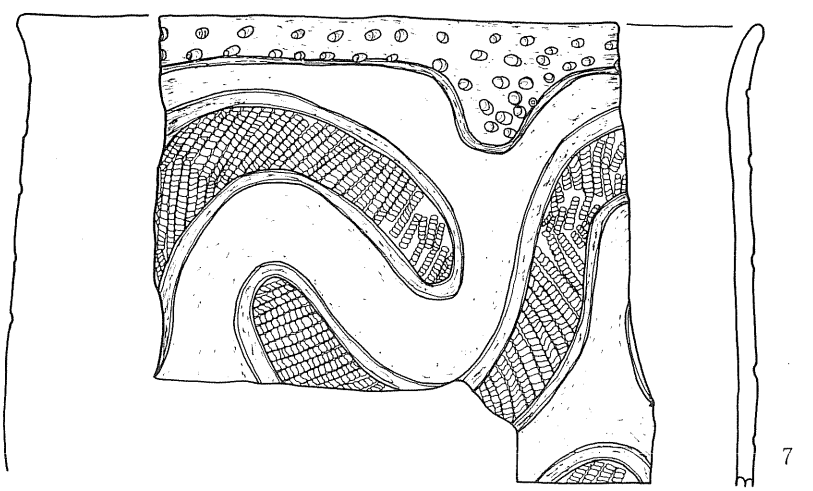
第32図　遺構内出土土器



5

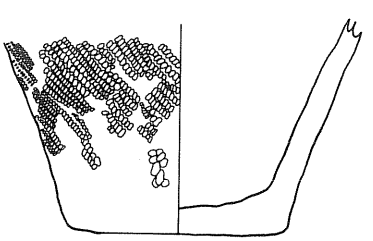


6

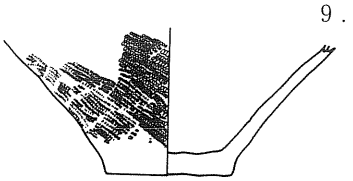


7

5．8号住居跡、埋土
6．10号住居跡、炉埋設土器
7．10号住居跡、床面
8．11号A住居跡、床面
9．11号A住居跡、床面



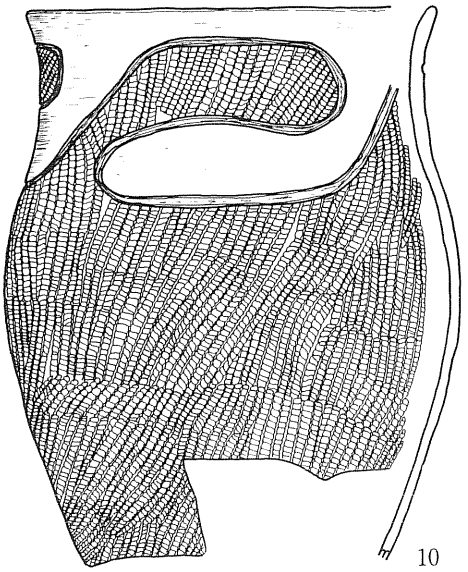
8

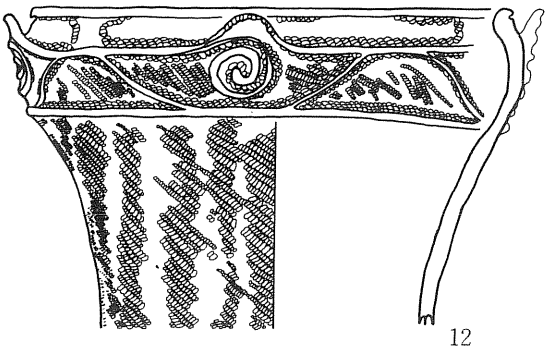


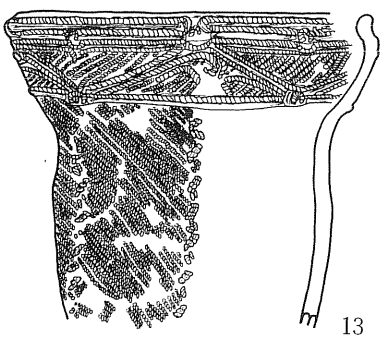
9

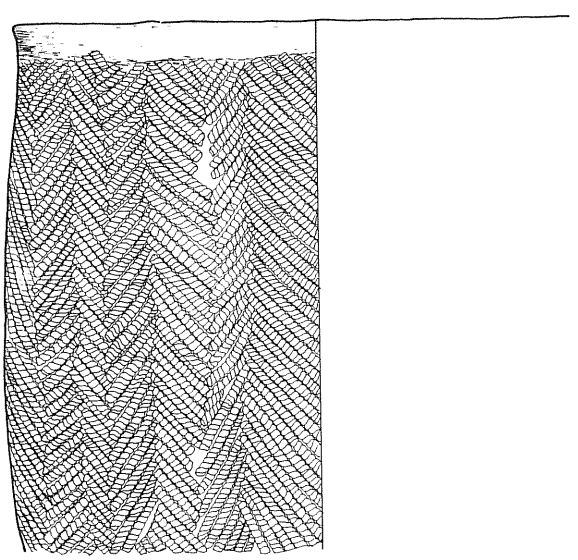
0　10cm

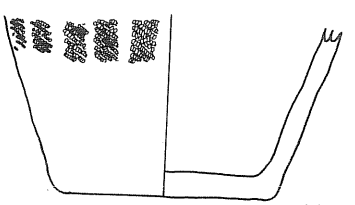
第33図　遺構内出土土器

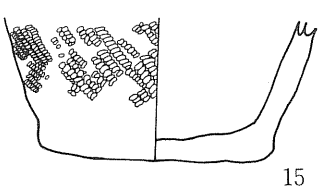








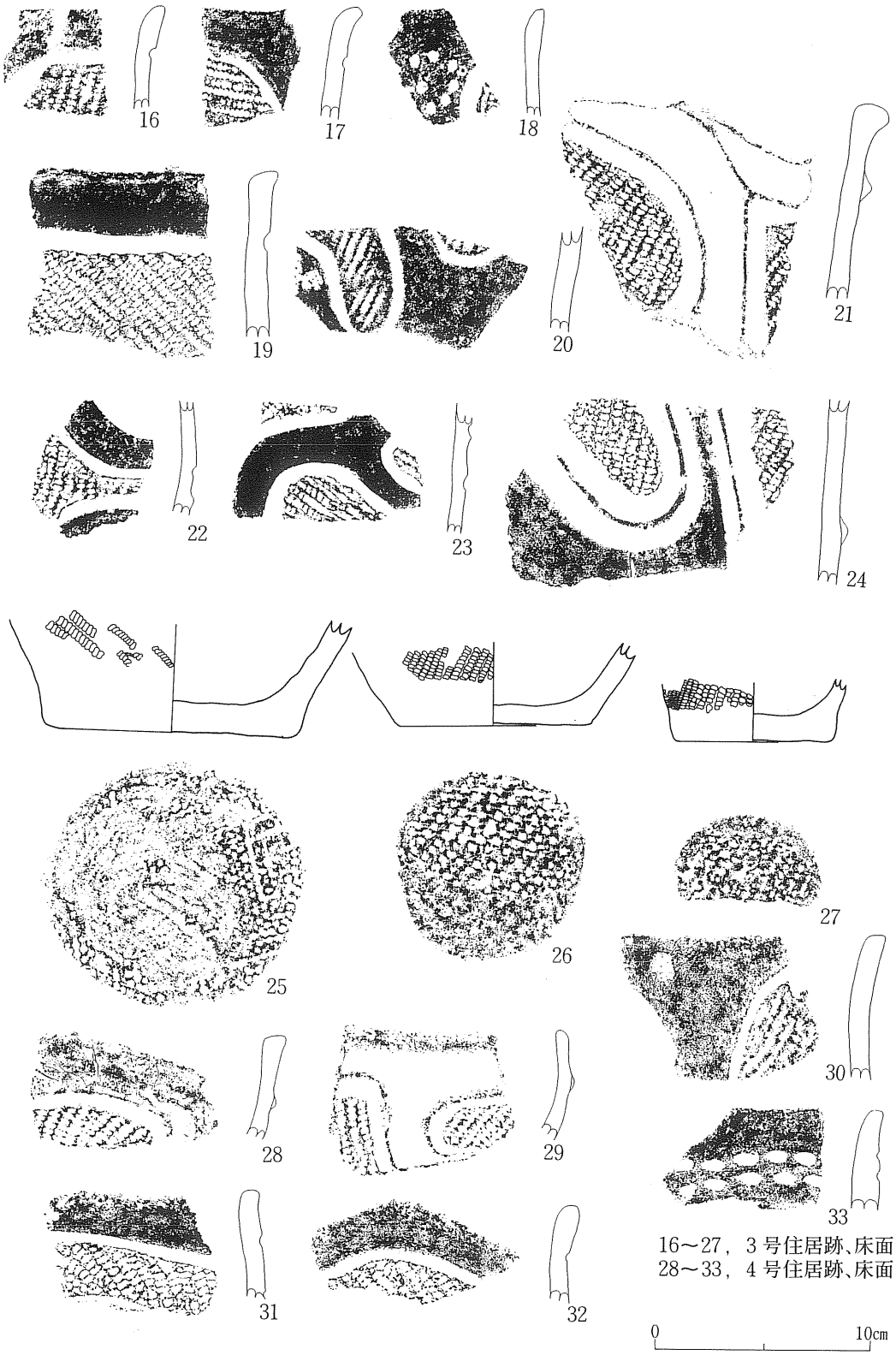




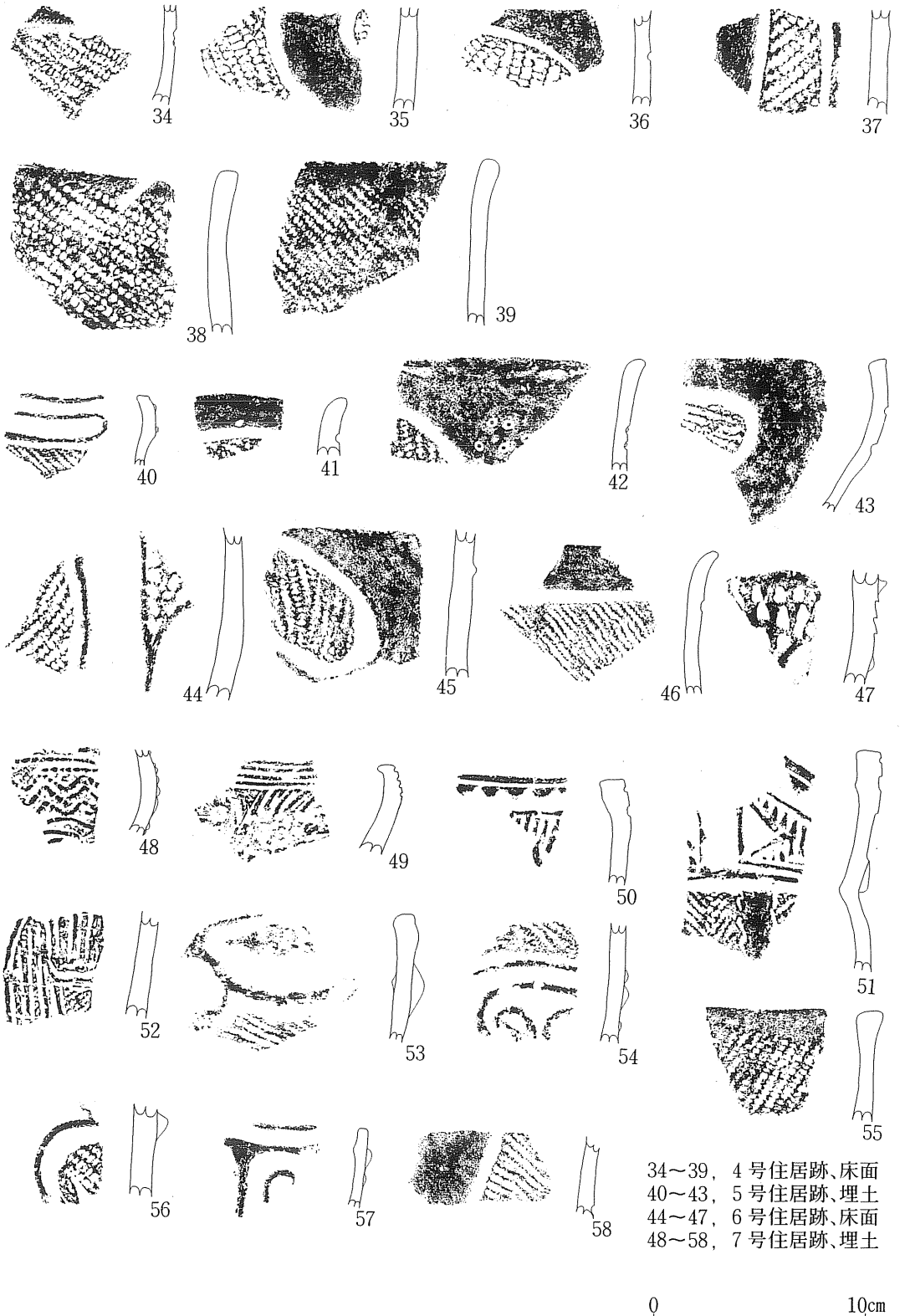
10，12号住居跡、炉埋設土器
11，12号住居跡、床面
12，16号住居跡、炉埋設土器
13，17号住居跡、炉埋設土器
14，17号住居跡、炉埋設土器
15，11号土坑、埋土

0　10cm

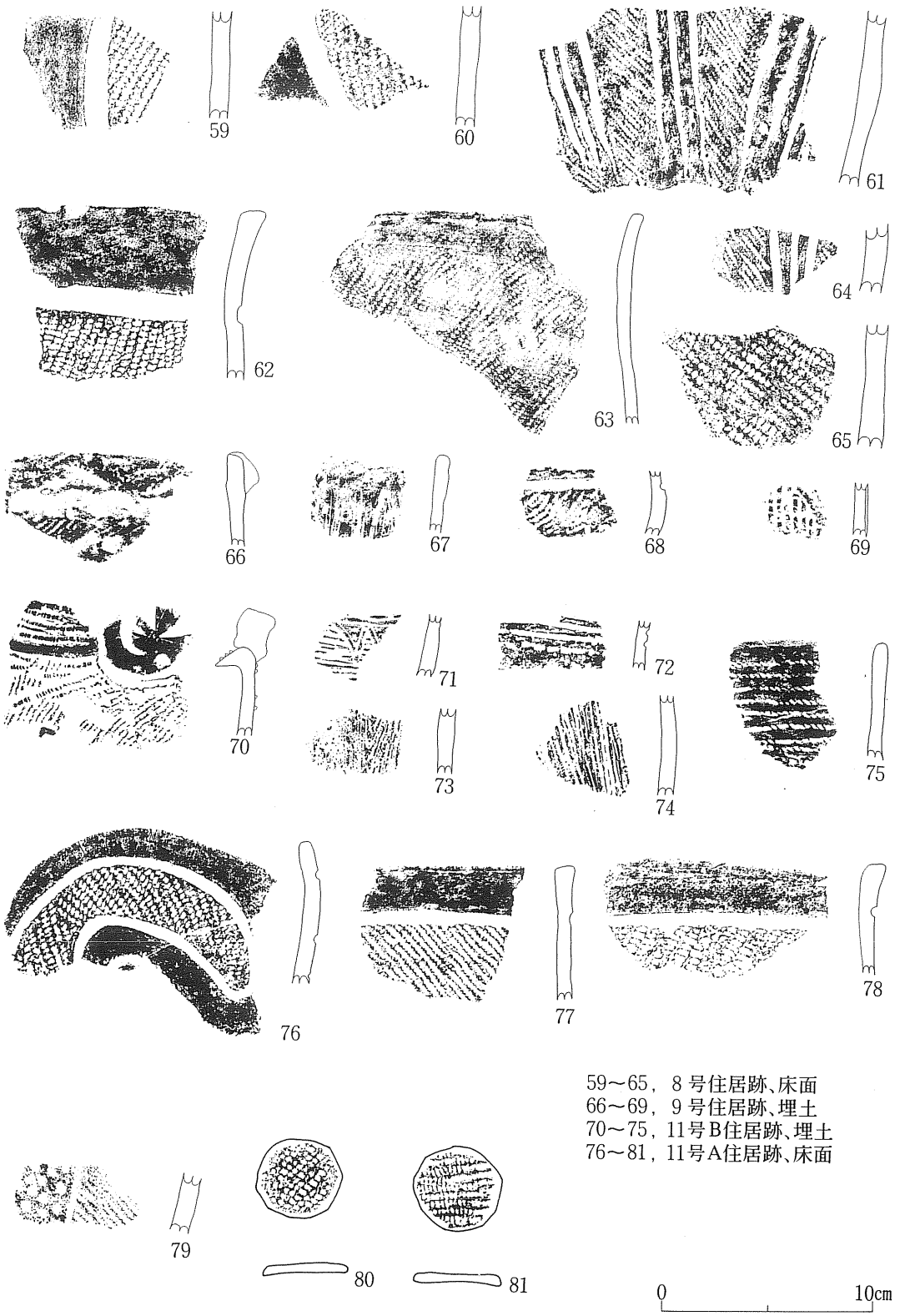
第34図　遺構内出土土器



第35図　遺構内出土土器

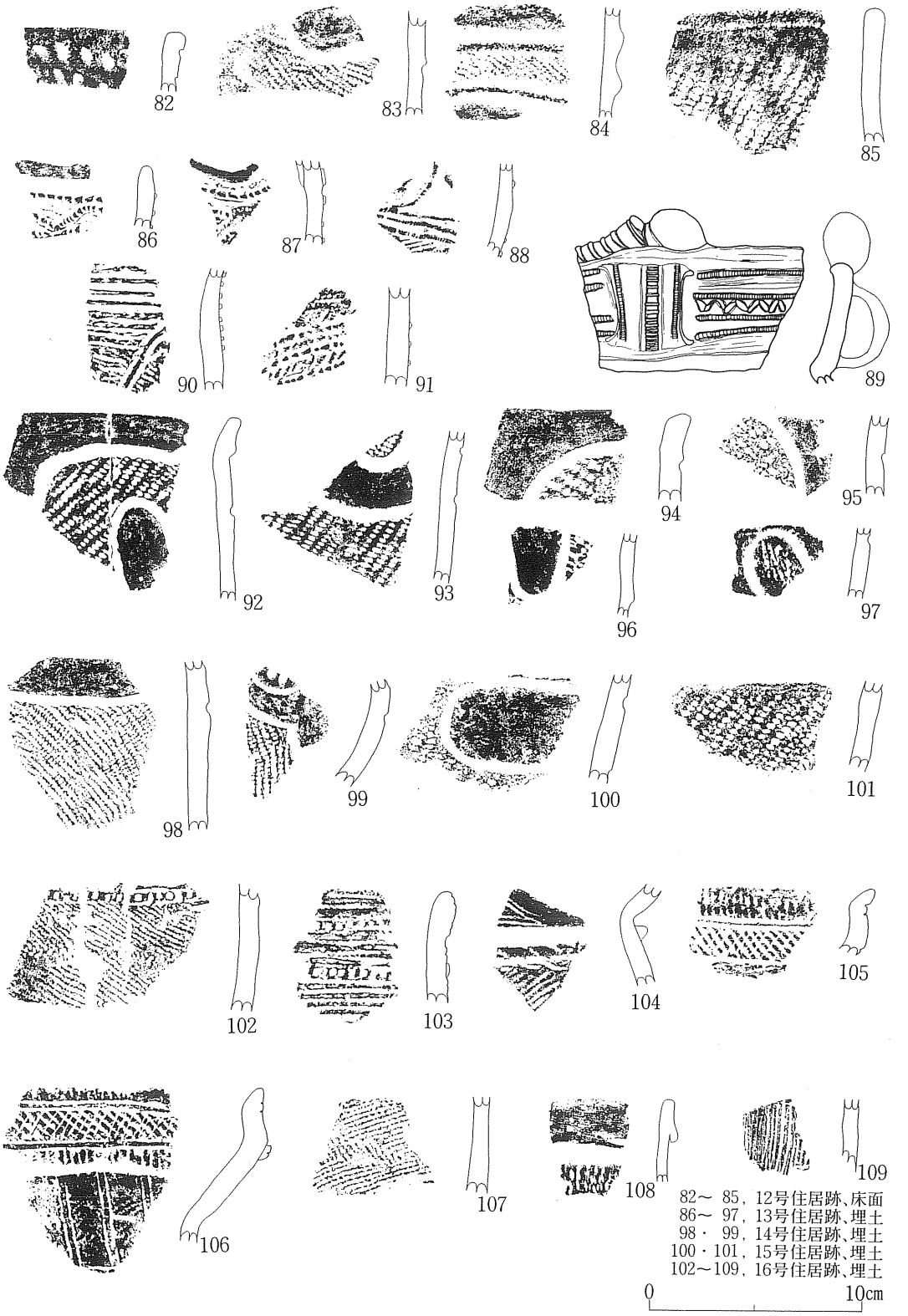


第36図　遺構内出土土器

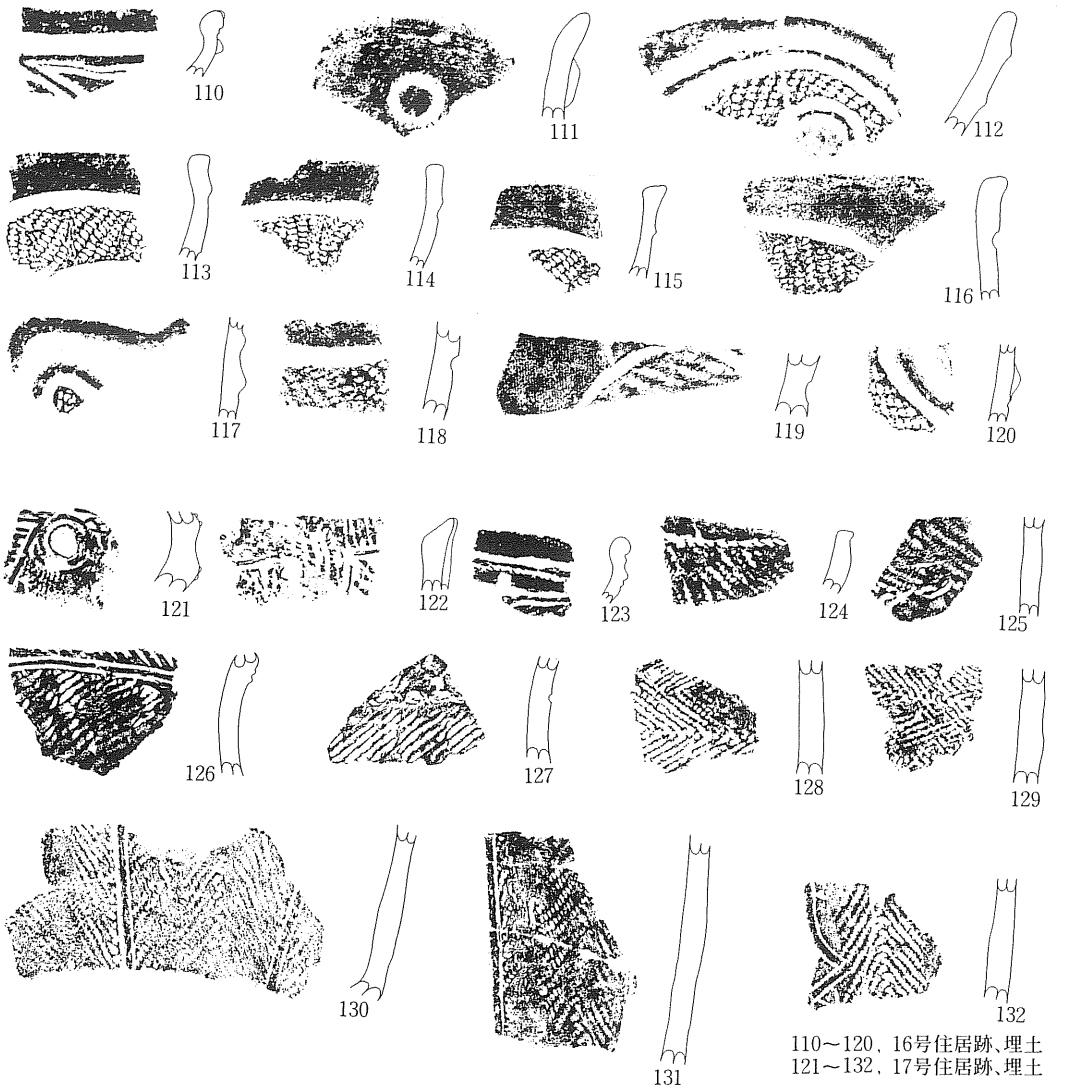


59～65，8号住居跡、床面
66～69，9号住居跡、埋土
70～75，11号B住居跡、埋土
76～81，11号A住居跡、床面

第37図　遺構内出土土器



第38図　遺構内出土土器

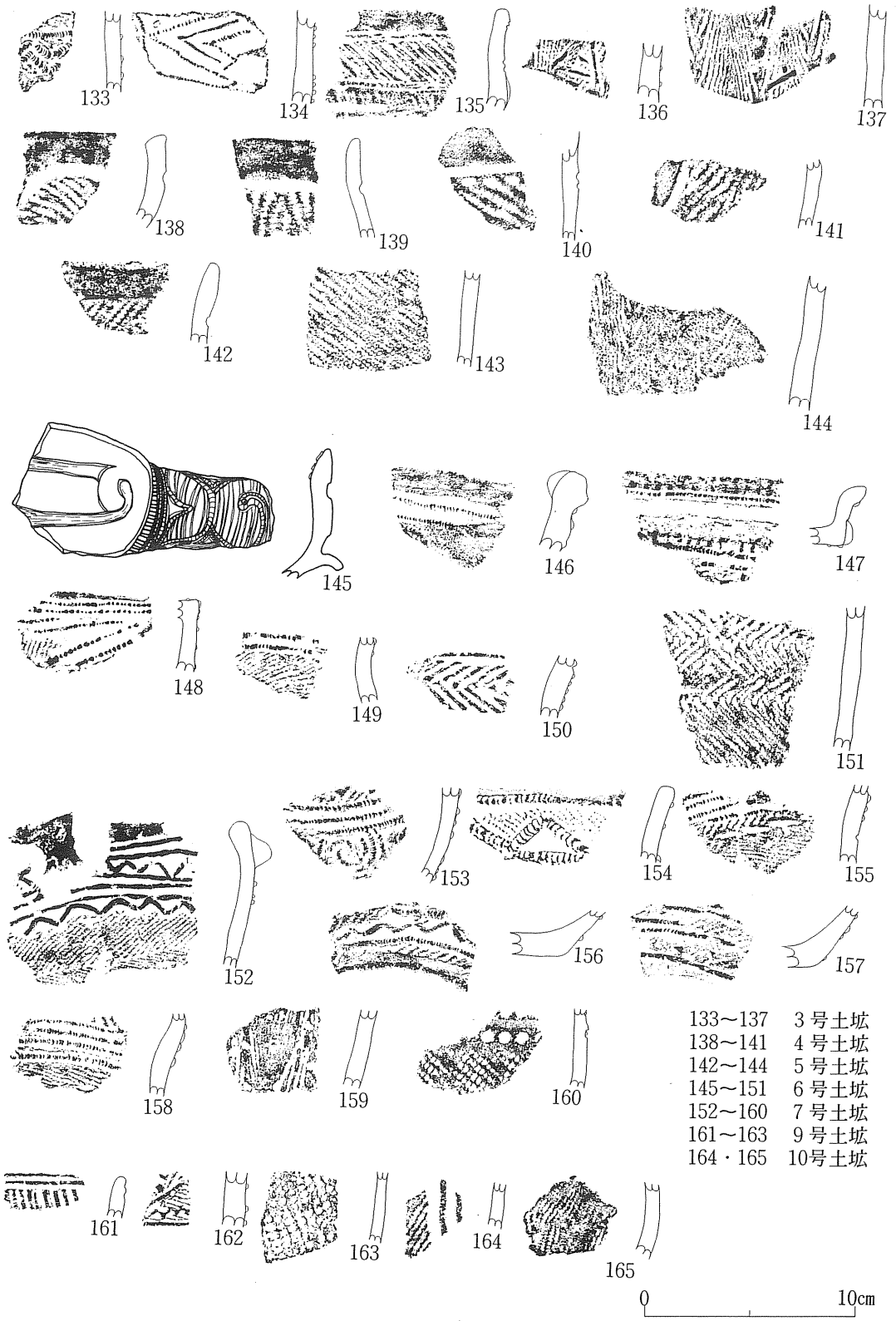


第39図　遺構内出土土器

半截竹管状工具により爪形文が施され、隆起するもの（半隆起線文）で、直線・渦巻・幾何学的に施される。半隆起線間に、直線、あるいは鋸歯状に貼付される細隆帯には爪形文は施されなくなる。口縁部は貼り付けにより肥厚し、外反しつつ一度頸部でくの字状にくびれ、ふくらみながら胴部に至る深鉢形土器であろう。

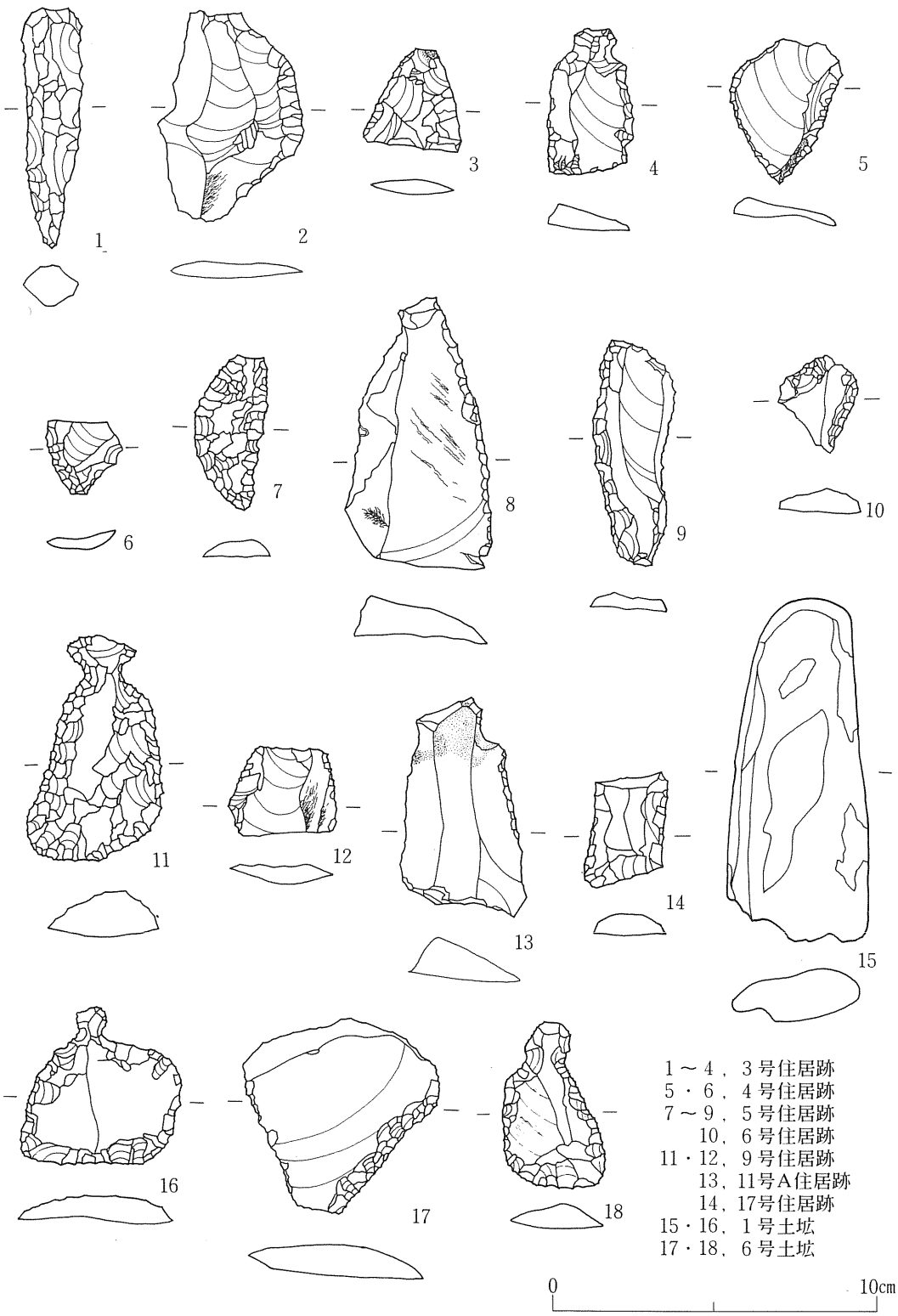
4類（第45図228～243、第49図336）

半截竹管状工具によって綾杉状、斜め、格子目状に沈線が深く引かれるもので、235・236のように粘土紐を貼付するものもある。（第49図336）はく字状の口縁部に渦巻状の大きな把手を貼り付け3ヶ所に小さな橋状の把手が付けられる。口縁部文様帯上部には縄文施文後、細隆帯が付され、下部には沈線で平行、鋸歯状文、菱形文を描く。ややふくらみかげんの胴部には縄文施文後、沈線に

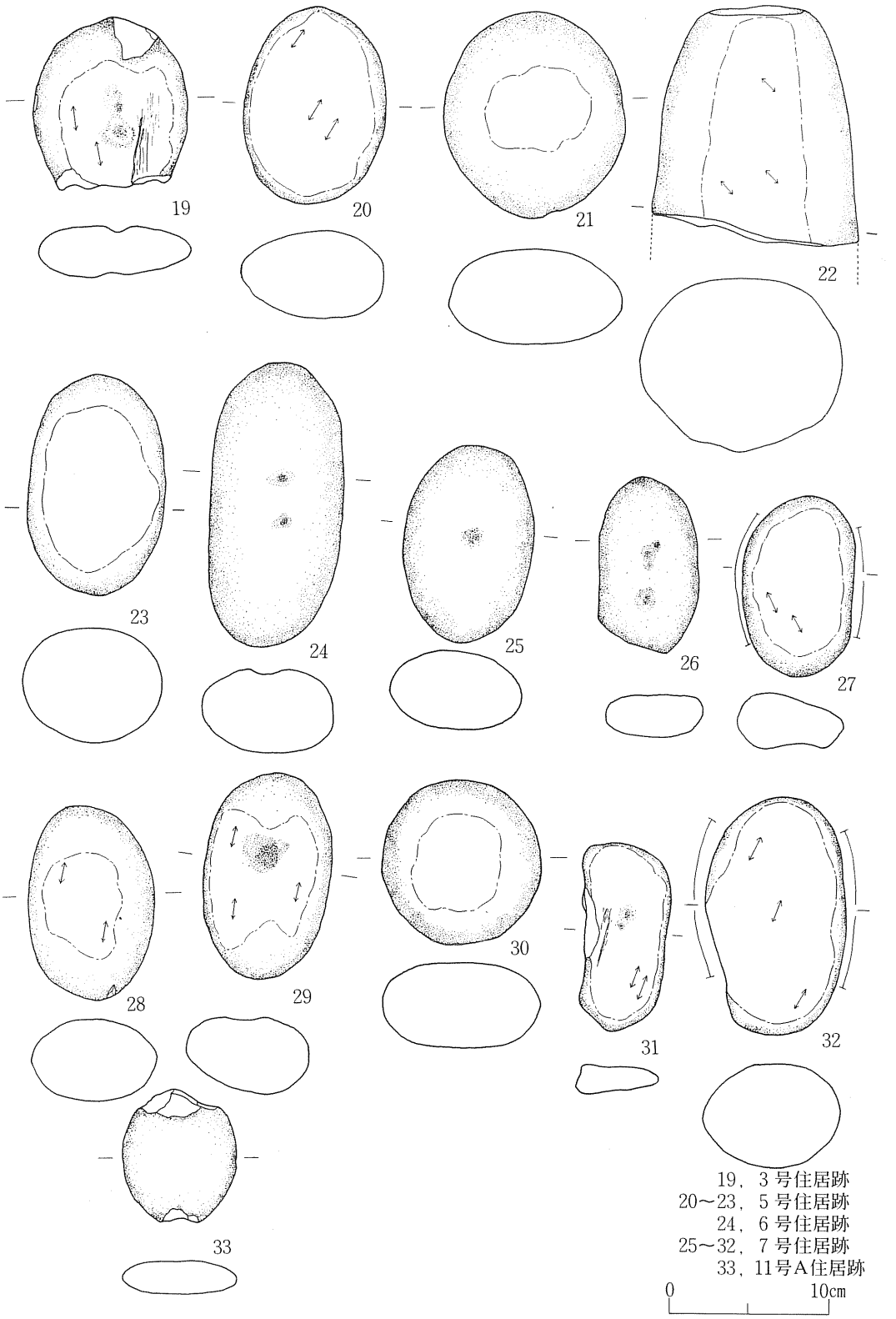


133～137　3号土坑
138～141　4号土坑
142～144　5号土坑
145～151　6号土坑
152～160　7号土坑
161～163　9号土坑
164・165　10号土坑

第40図　遺構内出土土器



第41図　遺構内出土土器



第42図　遺構内出土土器

よって、縦に幾何学的文様が描かれる。

5類（第45図224～248、第48図326～327）

鋭い山形状を呈す口縁部に三角形の沈刻文や縦に深い沈線を引くもので、ややふくらむ胴部には縄文やS字状の結節文が施される。（図版31）は直立する口縁部に沈線で施文された筒状の把手が付けられ、文様帯は三角形の沈刻文と上下を隆帯で画した中に格子目文を施す。胴部には縄文とS字状結節文が施される。

6類（第45図249～250、第46図251～257）

外反する口縁部に断面凹状の沈線を数条めぐらし円形の刺突を行うものである。（255～258）は、浅い沈線で刺突も小さくなる。

7類（第46図258～263）

直立ないしはやや外反し、肥厚する口縁部に幅の広い隆帯を曲線的に付し、円形の刺突・押圧縄文・縦の刻みを付けるものである。胴部には、撚糸文や縄文が付され隆帯を貼り付ける。

8類（第46図264～273）

内湾ぎみの口縁部に渦巻状の隆帯を付し、それに沿って撚糸圧痕文を付し胴部には縄文を施し曲線的な隆帯を貼り付ける。口縁部に文様帯を持たず羽状縄文や縄文を付すものもある。

9類（第46図274～276、第47図277～280）

やや内湾ないしは直立するものや波状を呈する口縁部で、貼り付けによる断面三角形の隆帯が渦巻くものや、幅広い沈線によって縄文帯を区画するものである。3・4・6号住居跡床面。

10類（第47図280～300、第48図301～316）

やや外反し肥厚する口縁部から胴部に至る深鉢形土器で、口縁部に幅広い磨消しによる無文部があり、そこに刺突の行われるものもある。胴部文様は、曲線的な沈線によって縄文帯が画され、縄文帯が横に展開されるものもあり、無文部が広くなる。

11類（第50図328～335、第51図337・338）

雲形文やX字状文や、口縁部に平行沈線を2～3条引くもので、浅鉢や壺形土器がある。

土製品（第51図339）

玦状耳飾で、焼成の良好なものである。両面に擦痕がみられる。土製の玦状耳飾は、下堤D遺跡からも出土している。

石器（第52図34～52、第53～60）

石鏃状の石器（34～36）は剝片を利用したもので片面からの調整によるものである。

ヘラ状石器（37・40）は両面から調整を施し断面は丸みを帯た菱形である。

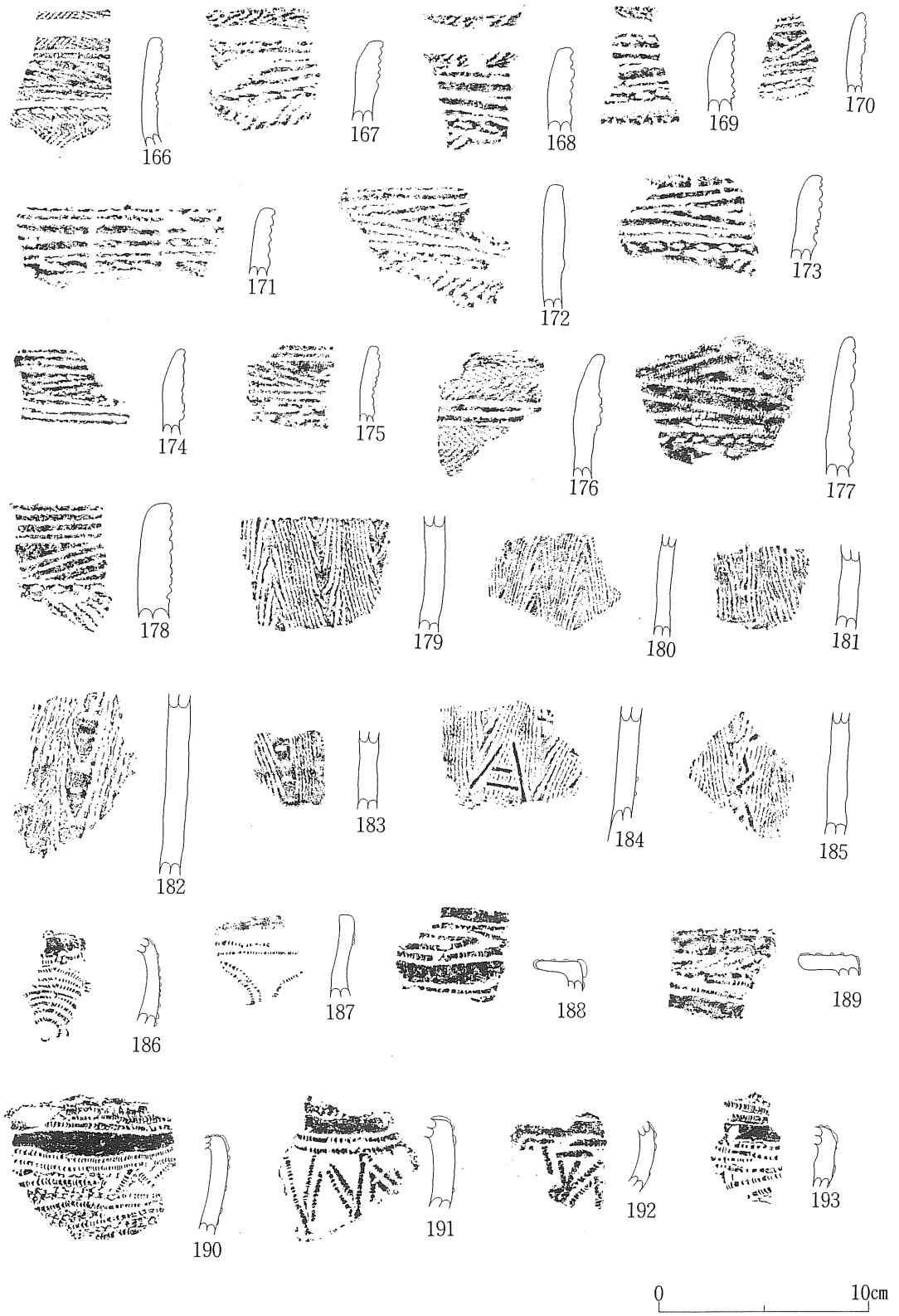
槍先状の石器(38)は基部の欠けたものである。

掻器（39・49・51・52）は背面に押圧剝離によって刃部を作出しているものである。

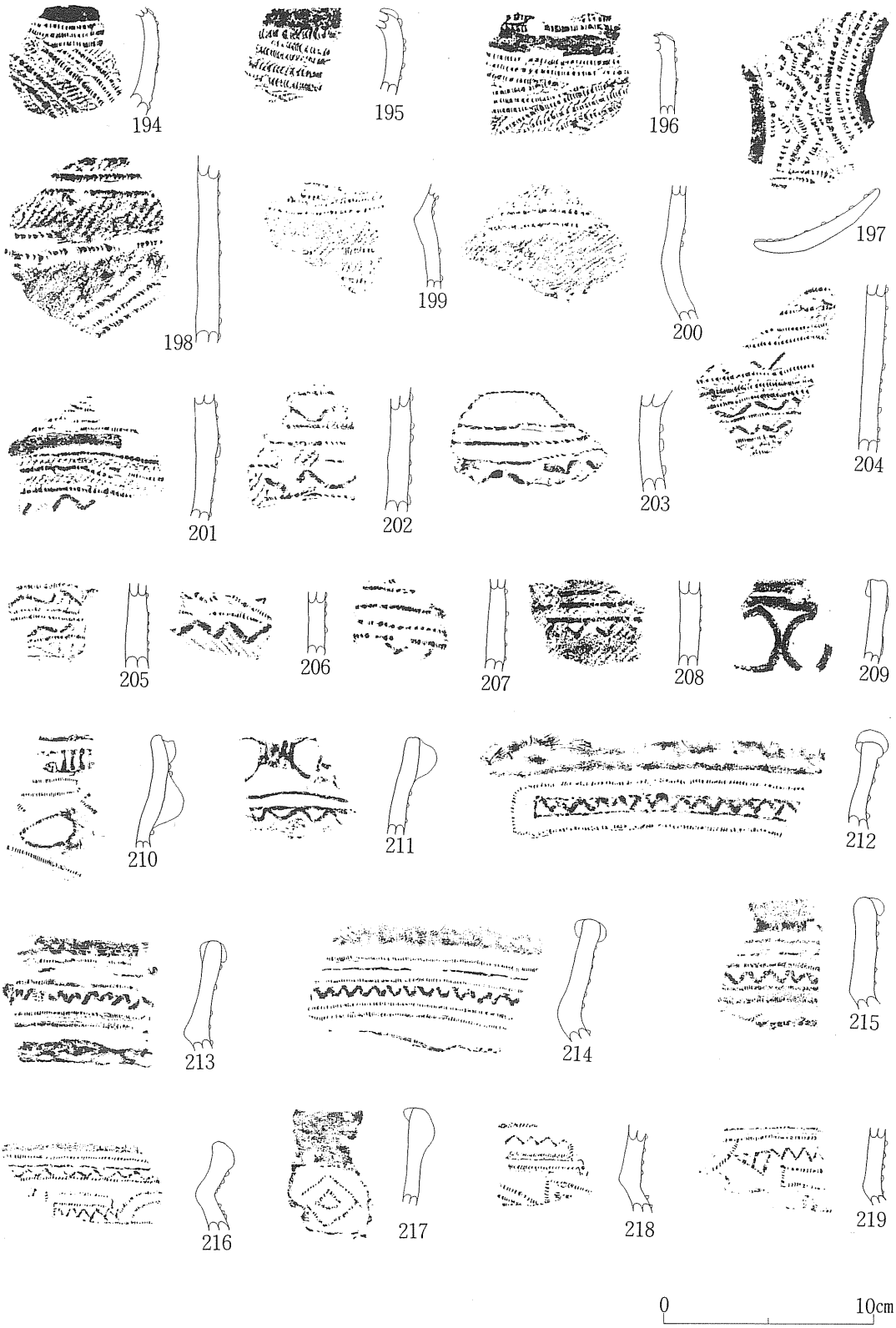
縦型石匙（42～47）も背面に刃部をもち、打面方向がツマミ部になるが、(43)だけは主要剝離面に刃

部をもつ。⑸は石錐、⑷は両面に調整を施し、特に２つの先端部は丁寧な調整が行われる。石質は⑷の玄武岩の他は全て頁岩である。

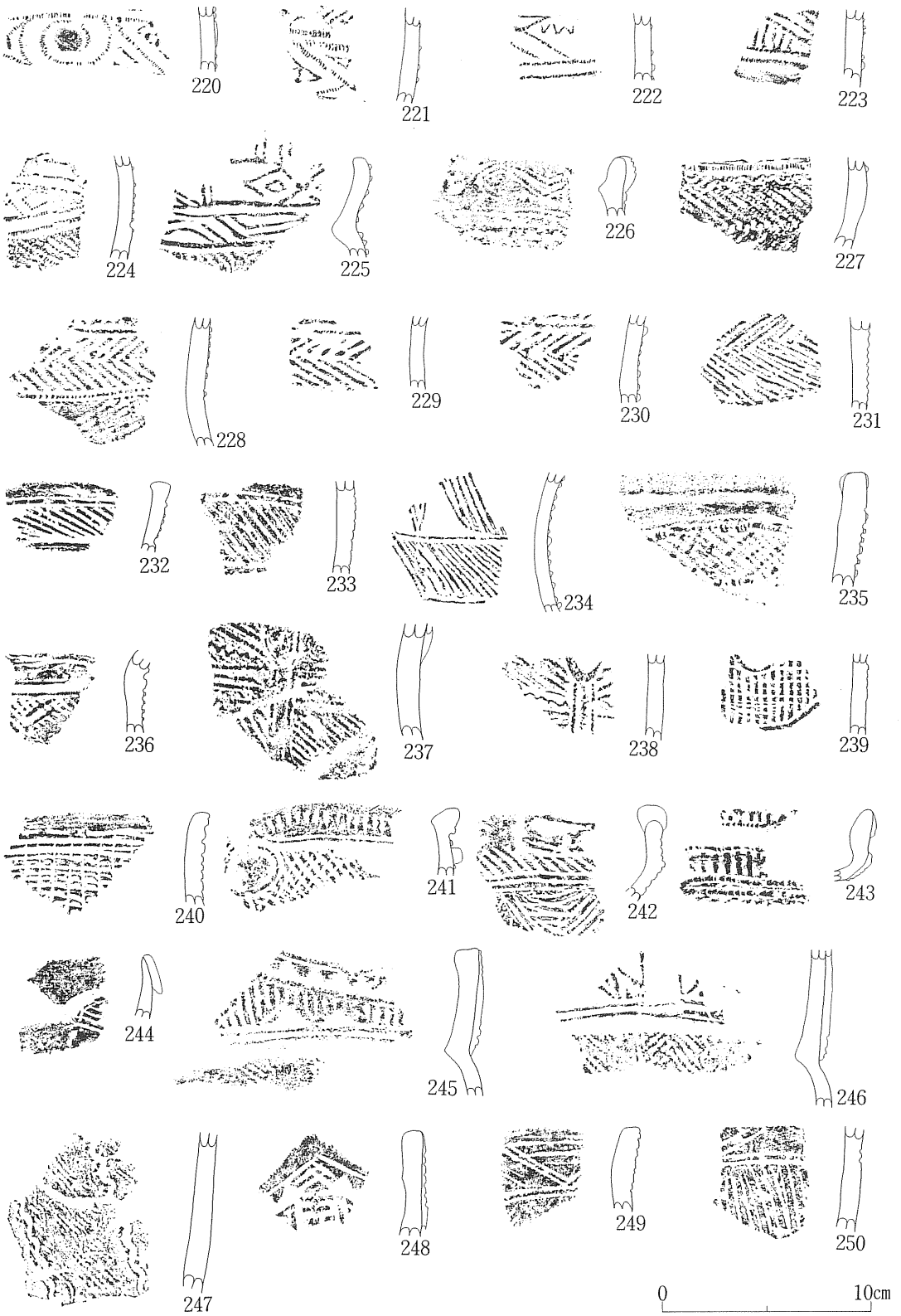
（第53図53）は大形の磨製石斧で緑色凝灰岩であり、２点の石錘、他磨石とも凝灰岩である。



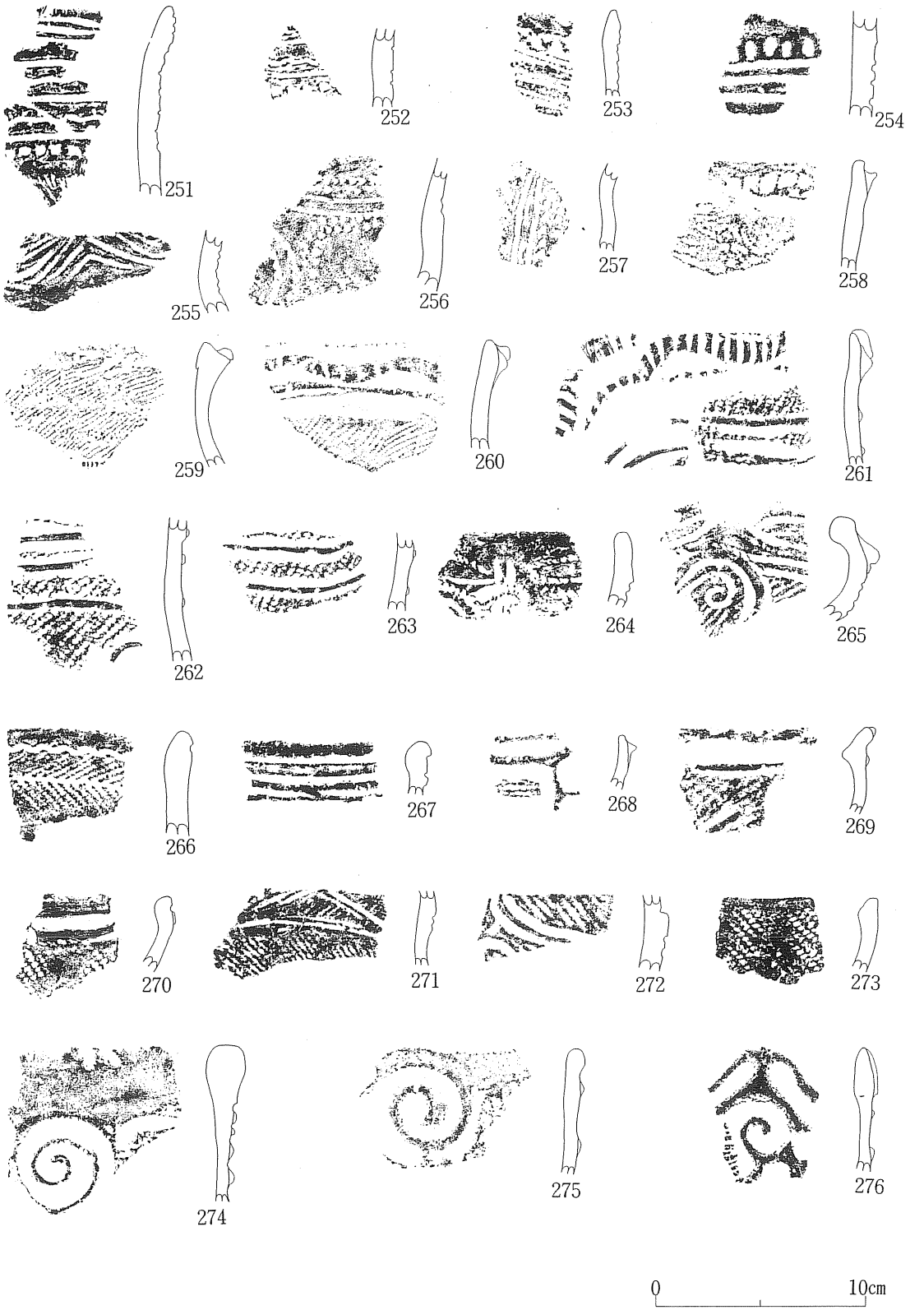
第43図　遺構外出土土器



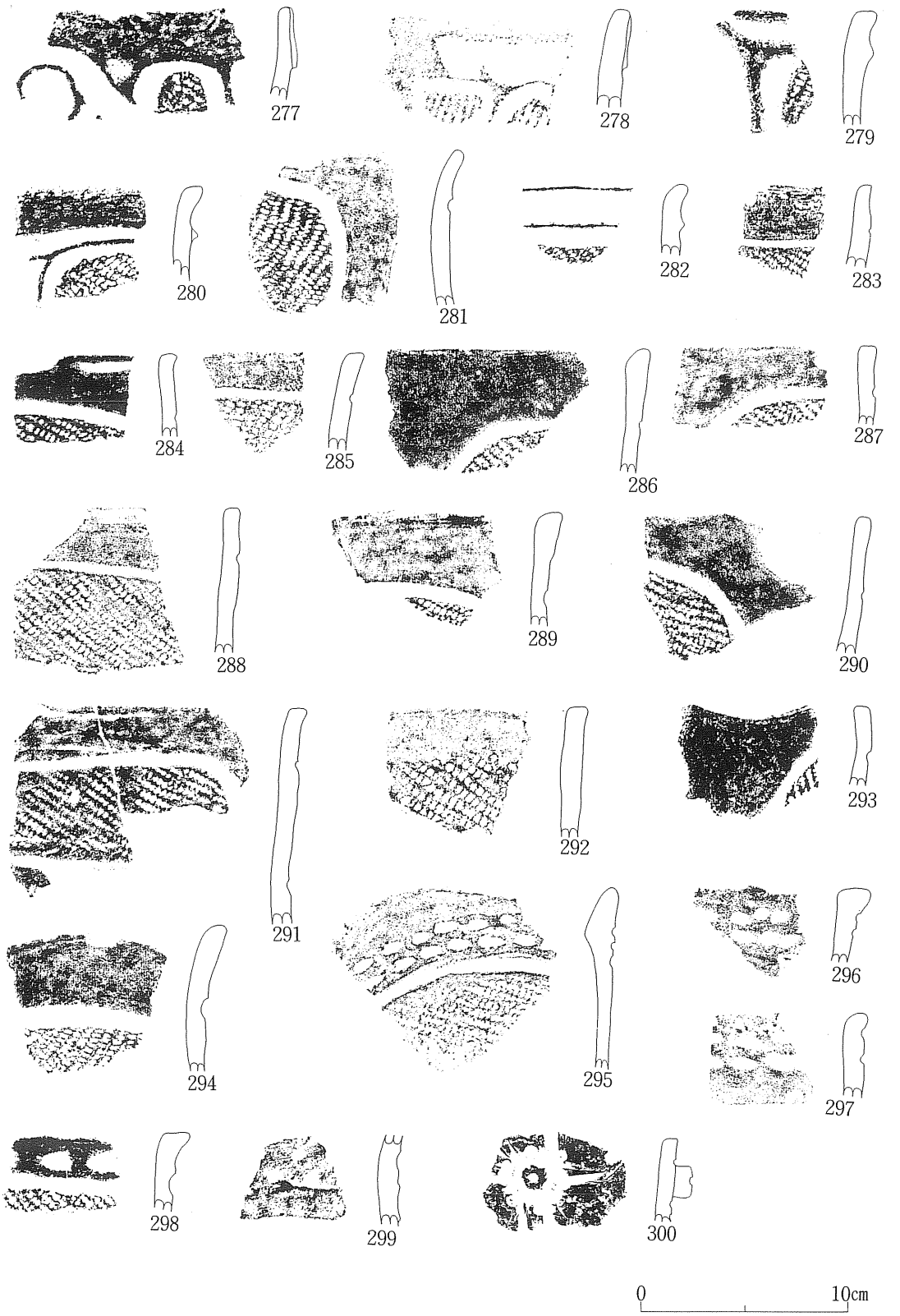
第44図　遺構外出土土器



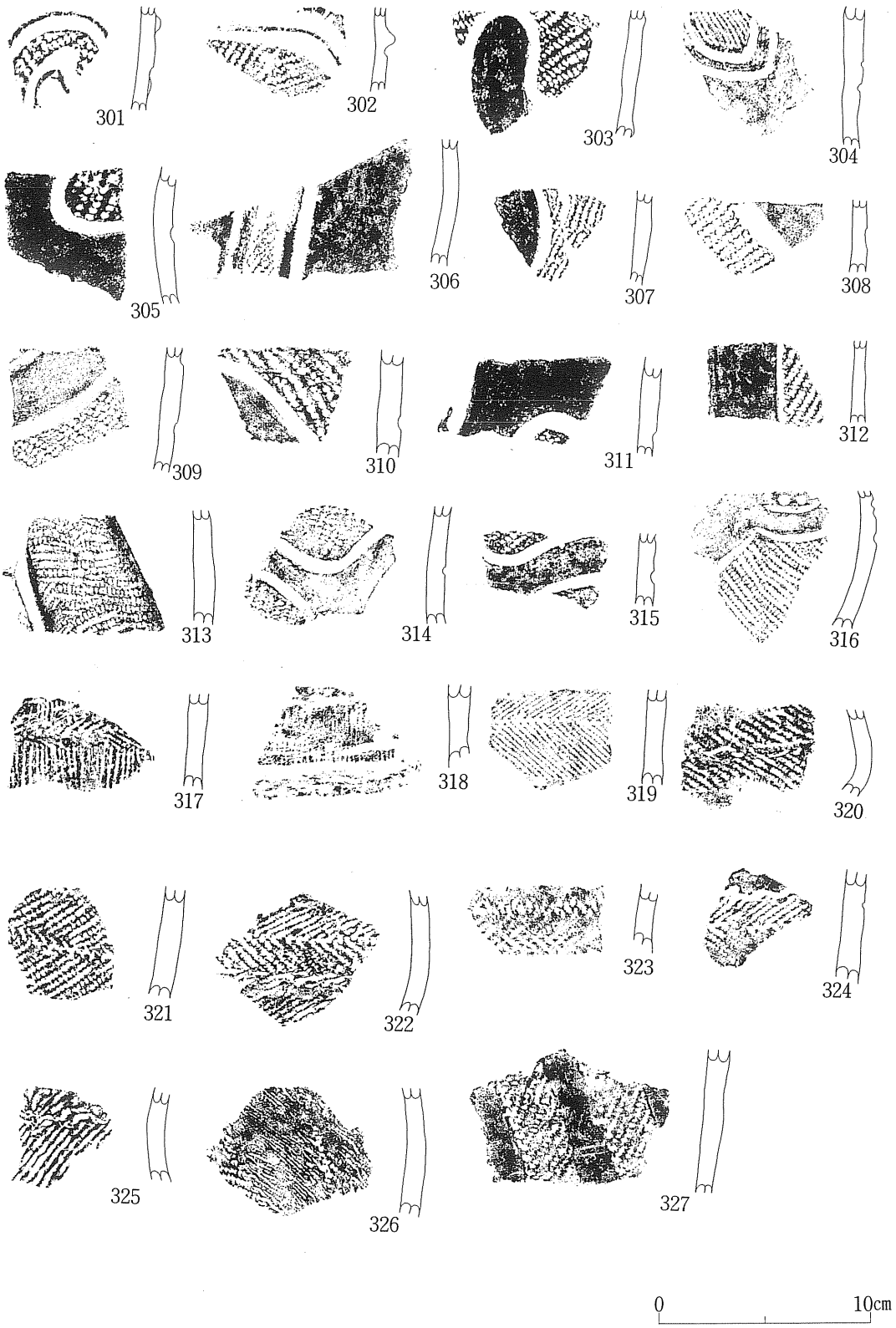
第45図　遺構外出土土器



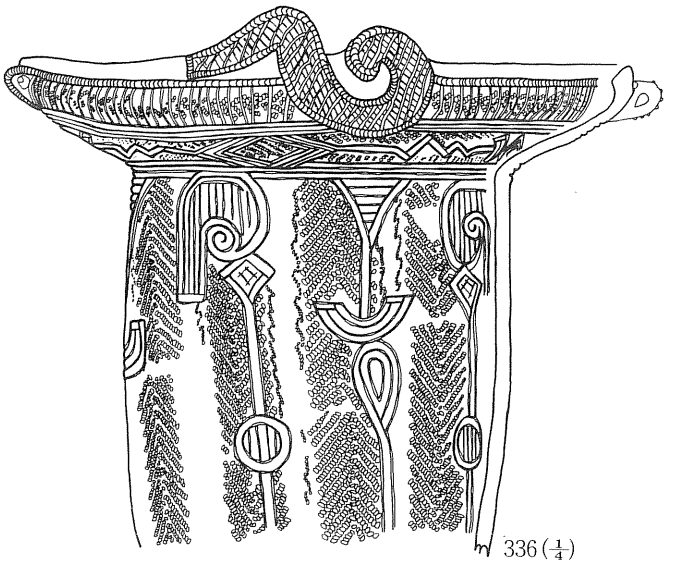
第46図　遺構外出土土器

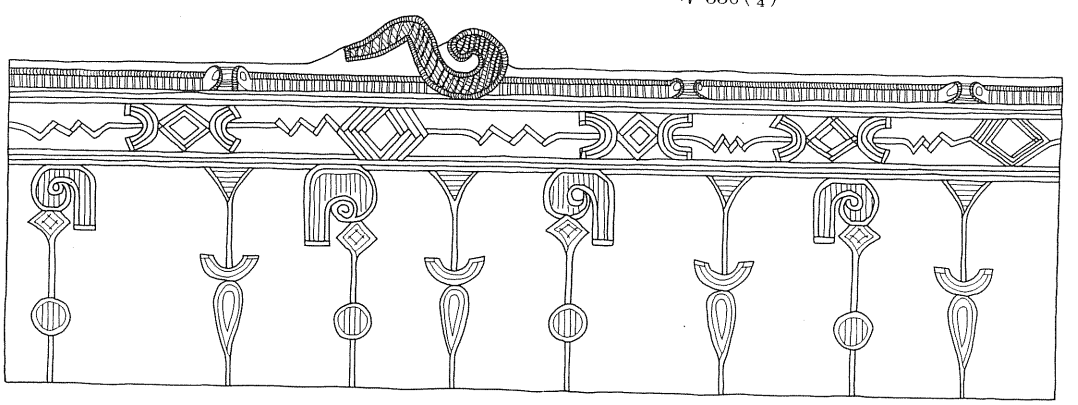


第47図　遺構外出土土器



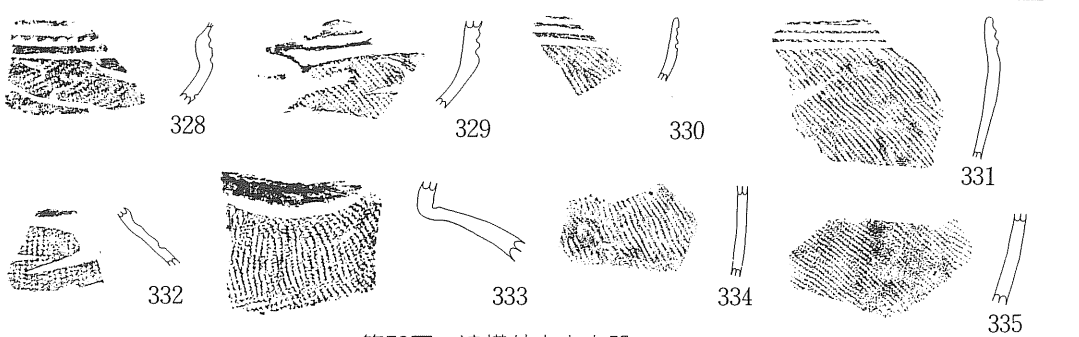
第48図　遺構外出土土器





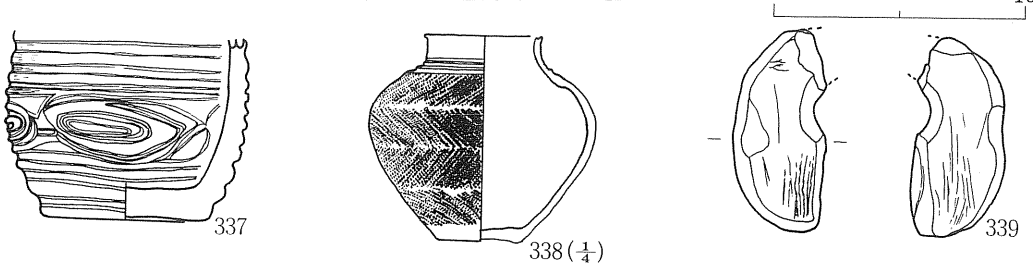
第49図　遺構外出土土器

0　10cm



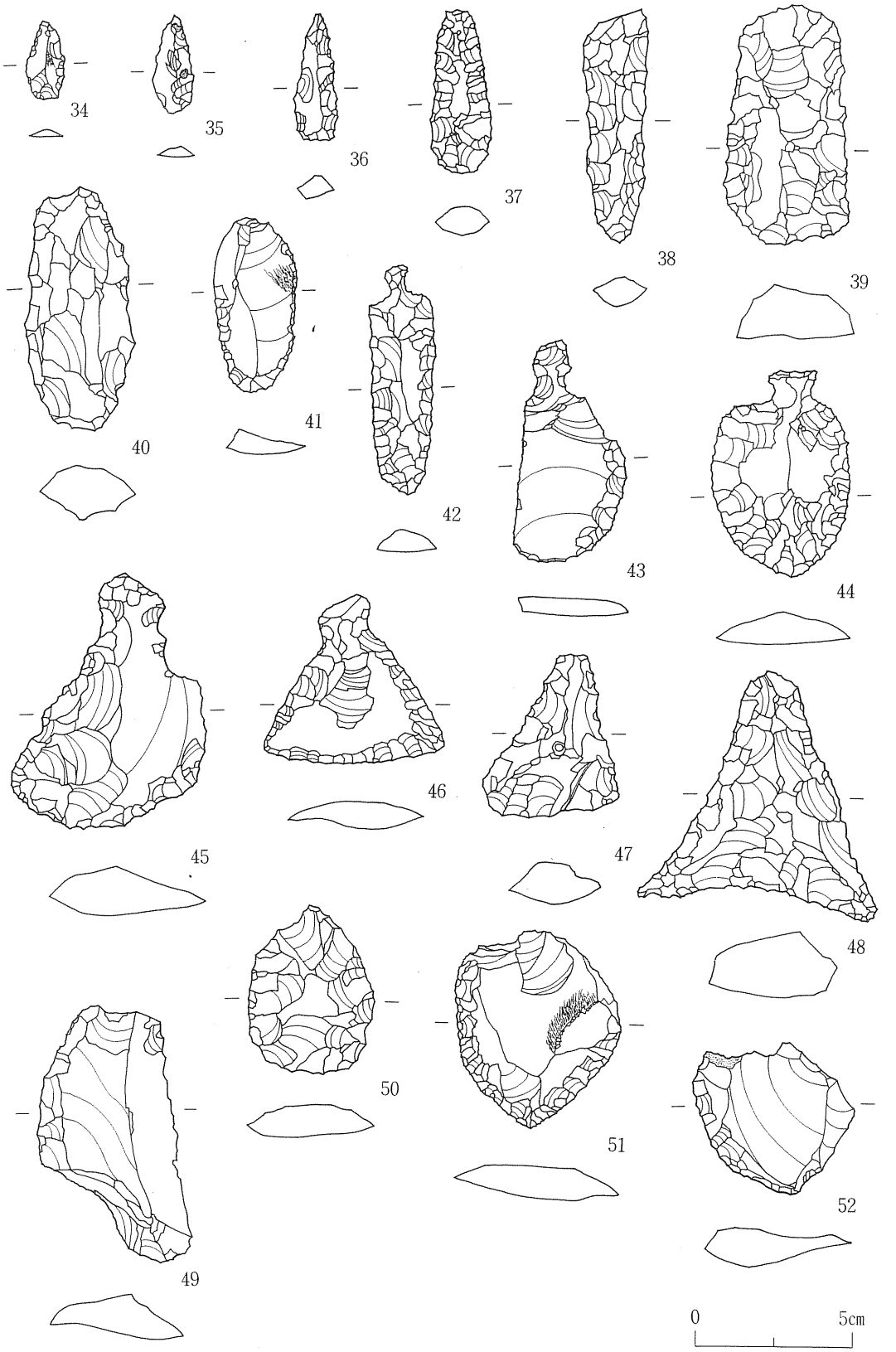
第50図　遺構外出土土器

0　10cm

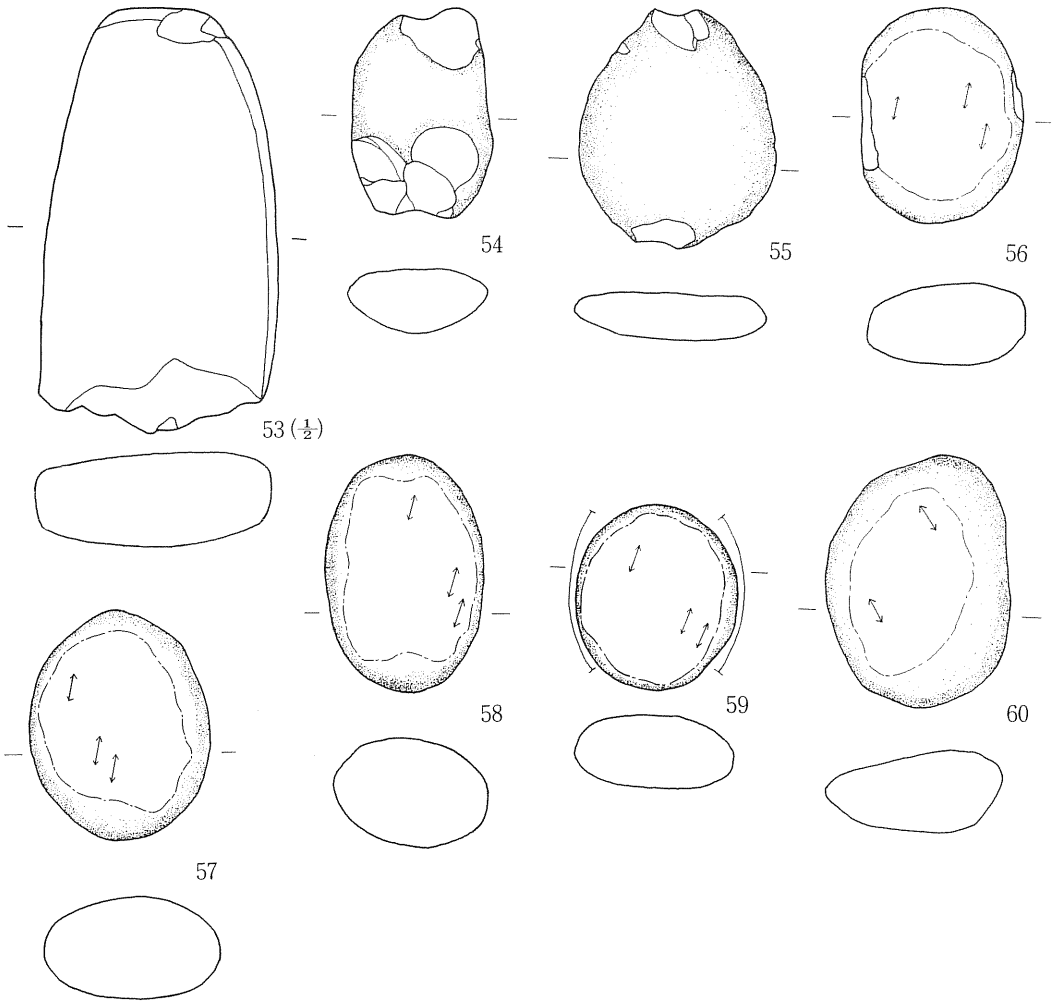


第51図　遺構外出土遺物

0　5cm



第52図　遺構外出土石器



第53図　遺構外出土石器

0　20cm

まとめ

遺構について

本遺跡では既述の通り住居跡17軒、土坑８基である。これら遺構、特に住居跡の年代を炉埋設土器と床面出土の土器を決め手とするならば、３・４・６・８号住居跡は大木９式期、７号Ａ・Ｂ・10・11号Ａ・12号住居跡は大木10式期、16・17号住居跡は大木８ａ式期に位置づけられる。また５・９号住居跡も複式炉を有することから10・12号住居跡と同様大木10式期と考えられる。この他に１号住居跡を除く２・13～15号住居跡も埋土出土土器から縄文中期のものと推測出来る。これを整理すると次のようになる。

大木８ａ式期―16・17号住居跡

大木９式期――３・４・６・８号住居跡

大木10式期――７号Ａ・Ｂ・10・11・12・５・９号住居跡

縄文中期　――２・13～15号住居跡

平安時代　――１号住居跡

このことから本遺跡の住居跡群が１時期には２～５・６軒の住居が存在していたことがわかる。

大木８ａ式期の住居は、ほぼ円形で土器埋設炉を持つものであり、次の大木９式期では、長楕円形のプランで周溝をもつものもあり、炉はなく床面が焼けて焼土の堆積する程度である。大木10式期には、複式炉を伴う住居でプランは円形を呈するものである。複式炉は住居跡中軸線上に沿って構築されるが５号住居跡の埋設土器石囲部、石組部、掘り込み部からなるものが典型的な複式炉とするならば10・12号住居跡の炉は簡略化されたものである。この簡略化が単に住居の規模の大小からくるのか明らかではないが、５号住居跡の空間的位置や、その規模が特異なものとすれば、５号住居跡の複式炉の大型化や石組みの堅緻さも納得出来る。

土坑は、住居跡との切り合い関係にあるものは、その時期をおおよそ把握出来るものの単独で検出された土坑に関しては時期的なことを詳述出来ない。住居跡との新旧関係の明確なものだけを挙げてみると次のようになる。

３号土坑←７号Ｂ住居跡（大木10式期）

４号土坑←３号住居跡　（大木９式期）

５号土坑←９号住居跡　（大木10式期）

７号土坑→６号住居跡　（大木９式期）

９号土坑←15号住居跡　（縄文前期末～中期）

10号土坑→９号住居跡　（大木10式期）

（→が新しい遺構）

しかしながら、これら土坑群と住居跡との時間差となると、土坑からの遺物が時期を決めることの出来る出土状態を示さないかぎり明確には出来ないだろう。一応これら土坑群が縄文前期末葉から縄文中期後葉に至る間に位置づけられるものとしておく。

土器について

遺構外出土の土器について11類に分類したが、これらを遺構内出土の土器とともに編年的に群にまとめてみたい。

１群土器――１類土器

口縁部文様帯に横走ないしは、菱形を描く撚糸文が施され、胴部との境の隆帯には、刺突列点文があり、胴部には木目状撚糸文や、羽状縄文が施されるものであり、円筒下層ｄ式で、16号住居跡出土の土器の一部もこれに入る。

２群土器――２類～５類土器

縄文前期末葉から縄文中期初頭に位置づけられる土器であるが、関東・北陸の影響を強く受けた土器群である。半截竹管状工具によって半隆起線を作りその上に爪形文を付すもの、沈線による綾

杉状・格子目状文・あるいは三角形沈刻文、あるいは細隆帯上に爪形を付すなどの文様は、関東の十三菩堤・五領ヶ台、北陸の朝日下層・新保式に見られる文様要素と同じものであり、近年秋田県内でも日本海側に近い遺跡から出土例がある。７・11号Ｂ、13・16・17の各住居跡、及び３～９号土坑出土の一部がこれに該当する。

３群土器――６類～10類土器

縄文時代中期初頭から末葉までの土器群である。６類は口縁部に平行沈線と刺突、さらには弧状の沈線等で施文されるものである。縄文前期末葉から中期初頭に位置づけられると考えられるが、沈線が弧状、波状を呈し、胴部に撚糸文が施される（第46図251）もの等からして大木７ａ式に近似するものであろう。

７類土器は、口縁に沿う隆帯に刻みや撚糸文を施すキャリパー形を呈するもので大木７ｂ式と考えられる。

８類土器は典型的なキャリパー形を呈する土器である。口縁部の隆帯に沿って撚糸圧痕文を施すもので大木８ａ式であり、16・17号住居跡の炉埋設土器がこれに該当する。

９類とした土器は、断面三角形の隆起線で縄文帯を区画するのを特徴とし大木９式に比定される土器である。

11類土器は縄文帯を区画するのが曲線的な沈線となり、隆帯や隆起線は全くみられなくなる。しかしながら、円形の刺突文やわずかながら残る隆起線は、大木９式の名残りをとどめるものでありこれら土器が大木10式の古い方に位置づけられよう。これらには、７号Ｂ・10・12号住居跡の炉埋設土器が該当する。

４群土器――12類土器で大洞C_2式である。

以上本遺跡出土の土器を上記のように５群に分けたがこれを整理すると次のようになる。

１群土器――１類土器――円筒下層ｄ式

２群土器――２～５類土器――縄文前期末葉～中期初頭

３群土器――６類土器――大木７ａ式

７類土器――大木７ｂ式

８類土器――大木８ａ式

９類土器――大木９式

11類土器――大木10古式

４群土器――12類土器――大洞C_2式

参　考　文　献

秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書、駒坂袋Ⅰ遺跡」
秋田県文化財調査報告書第92集　1982

梅宮　茂：「複式炉文化論」福島考古第15号、福島県考古学会　1974

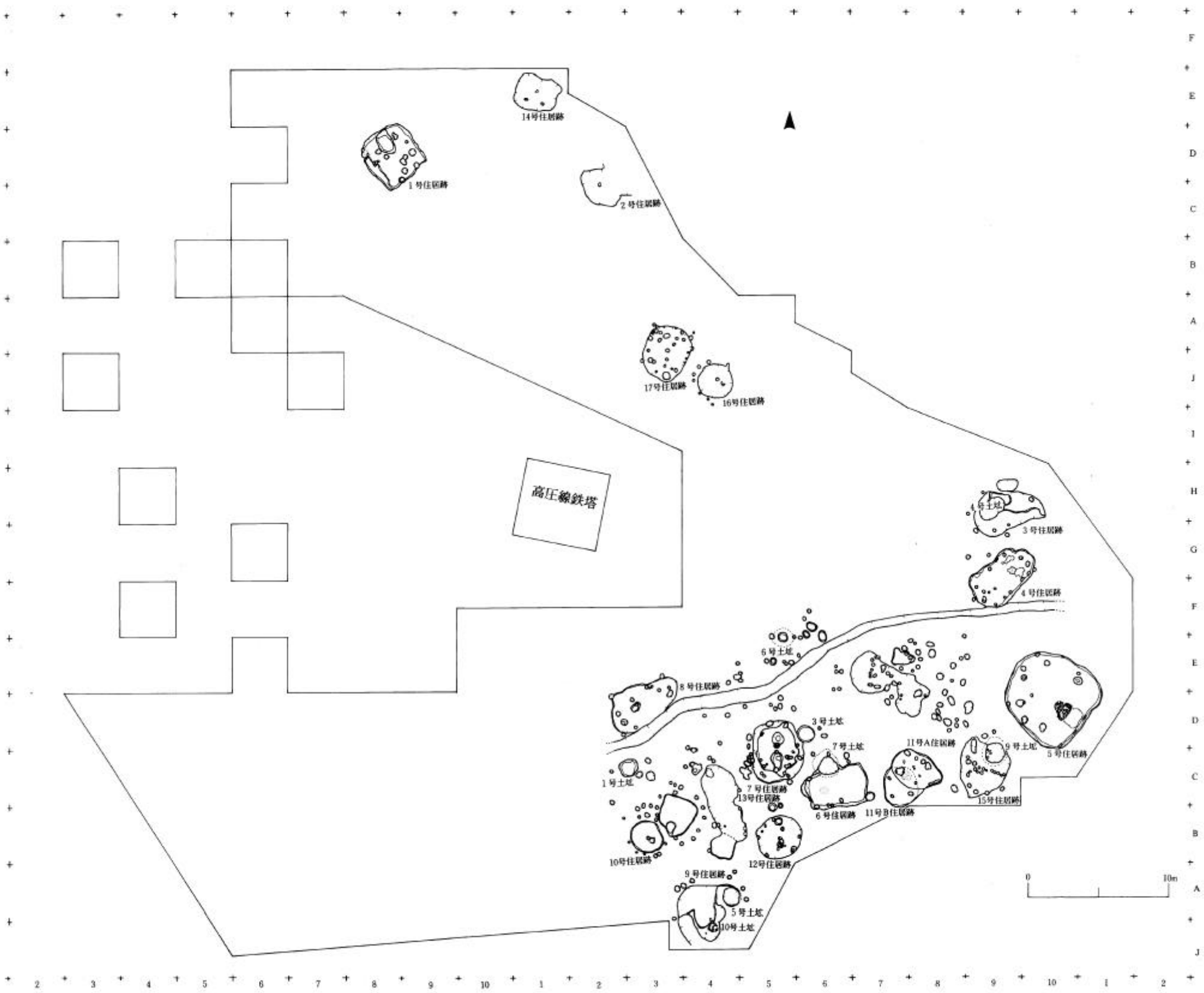
芹沢長介、坪井清足他：「縄文土器大成、第１巻早　前期」、講談社　1982

芹沢長介、坪井清足他：「縄文土器大成、第２巻中期」　講談社　1981

横浜市埋蔵文化財調査委員会：「港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅳ」　1974

武蔵野美術大学考古学研究会：「宮の原貝塚」青友書房　昭和47年

柳沢清一：「大木10式土器論」古代探叢一滝口　宏先生古稀記念考古学論集一、早稲田大学出版部、昭和55年10月


14号住居跡
1号住居跡
2号住居跡
17号住居跡
16号住居跡
高圧線鉄塔
4号土坑
3号住居跡
4号住居跡
6号土坑
8号住居跡
3号土坑
7号土坑
11号A住居跡
9号土坑
5号住居跡
1号土坑
7号住居跡
13号住居跡
6号住居跡
11号B住居跡
15号住居跡
10号住居跡
12号住居跡
9号住居跡
5号土坑
10号土坑
0
10m

遺跡全景（西→）

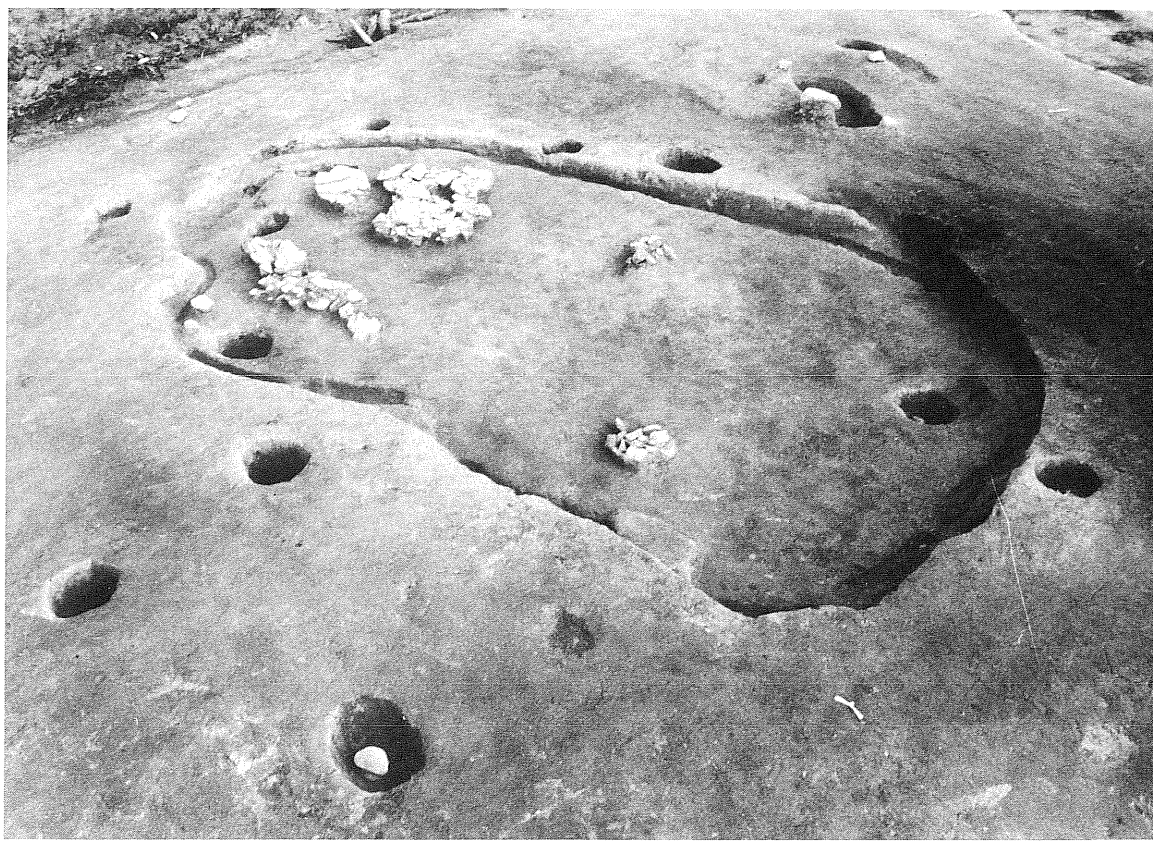
遺跡全景（北→）
図版 1

1号住居跡（北→）

2号住居跡（南→）

図版 2

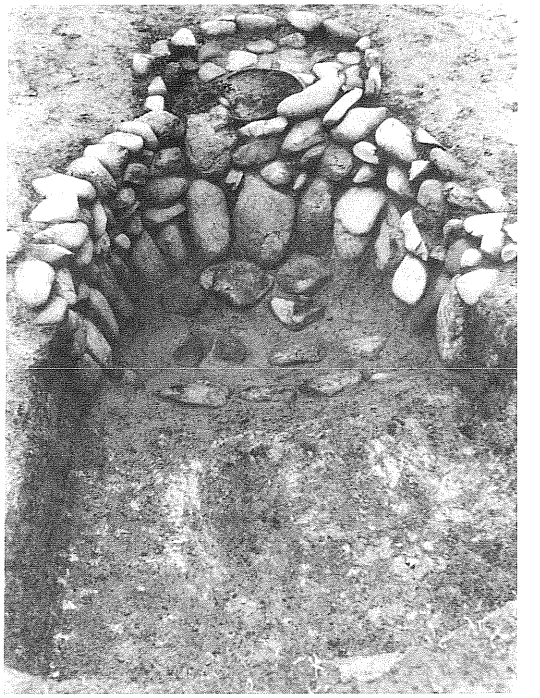
3号住居跡（西→）



4号住居跡（北西→）

図版 3

5号住居跡（北→）



5号住居跡、複式炉
図版 4